
冥獄抄散話（めいごくしょうさんわ） - 儚ノ中

銃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めいごくしよつさんわ
冥獄抄散話 - 儚ノ中

【Nコード】

N3174K

【作者名】

銃

【あらすじ】

「……夜が、白い……。」

「夜よりこっちの闇の方が深いからね。」

「夜より暗い？」

「ここは冥獄でもかなり底に近い堕ちに堕ちた所だからね。」

「不思議な木……………」

「はい。堕^{だなん}鳥の木です。」

「鳥が落ちるかのように見える木ですので…。」

「詰まらない所でしょう…。」

準和風幽玄小説「冥獄抄シリーズ」第二幕、「冥獄抄散話・儚ノ中」です。今回はゆめが主人公のお話となっております。

ゆめが「墮烏苑」だなんえんに遊び死に至るまでのお話です。

序（前書き）

どもです、銃です。

冥獄抄シリーズ第二幕となります。

ですのでもし初見の方は「冥獄抄散話・狂」から読まれる事をお勧めします。

（おそらくそうでないと世界観がつかみずらいかと…。）

銃・

ちなみに以下自分の表紙イメージです。

> i 7 3 0 3 — 1 0 4 1 <

序

序

「どうしてあたしは「ゆめのなか」なの？」

それは物心付いてたぶん私が一番始めにした質問。

「……………ん？」

目の前の興に魅入っていたその人が不思議そうな顔をしてこちらを見た。

水平にこちらに視線を移す私と同じ目線の男の子。禿頭前面に複雑な刺青を施し、小さなちよびひげを生やしている。でもそれより何よりそのぱっちりとした黒い瞳が印象的で。

「何か言ったか？「ゆめ^{ゆめ}のなか^{なか}」。」

物心ついた私とほとんど変わらない姿形のその人は、その当時から幼い私と違ってきちんとした声調と意味を帯びた言葉を話していた。その人が私より全然長生きでとても恐ろしい人だと知るのはまだもう少し先。

物心ついたその頃の私は、何故だかわからないけど一番偉いその男の子の隣で普通にお話出来る事が嬉しくて自慢したくて、よく上座に上がってはその人に色々世間話をしたり色々おねだりをしたりしていた。

そしてその日は初めての質問。

「だからね、あたしなんで「ゆめのなか」なの？」

なんで「ゆめ」だけじゃないの？なんかちよつとかわいくないよ。

へんだよ。」

私は頬を膨らませて少し拗ねた。

それを何の表情も浮かべずにただじつとぱっちりとした黒い瞳が見つめる。

私もじつとその黒い瞳を見つめた。負けるもんか。……………。

……………でも駄目だった。いつも必ず私から目を逸らしていた。

それがちよつと悔しくて私はもつと頬を膨らませる。

「「ゆめ」だけじゃ駄目じゃ。それじゃお前の名として意味がない。」

幼く落ち着いた声が興の音を貫いて私の耳に入ってきた。その人の声はいつもそう。

どんなに騒々しい所でもその弦き一字一句がきちんと誰の耳にも聞こえる。

この御殿の中でどの音にも絶対負けない主の声だ。

「いみ？なにいみつて？」

私が再び目を向けると先程と変わらず黒い瞳がじつと私を捉えていた。

その人は本当にじつと見る。今ならわかる。だってこの人絶対瞬きしない。

だから私から目を逸らすしかないんだ。

「お前の「ゆめ」には境がある。ずっと続くものじゃない。じゃから境の外と区別しなければならん。じゃからお前は「夢ノ中」じゃ。」

「……………なにが「じゃからじゃから」かぜんぜんわかんないよ。そとつてなに？」

その人の口の端がうつすらと上がる。全然可愛く見えない無情の笑顔。昔も今も好きじゃない。

「勿論「死」じゃよ。」

「し?.....って??」

「ふむ、どこまで突き詰めるか難しい所じゃのお。そうじゃのおお前でいうならその体からその御魂が抜けて腐って亡くなる、それが「死」じゃ。

お前の「中」は本来非常に短い。もって百年少しの灯じゃ。ここに在らず現世に在るべき御魂じゃからの。お前は命の火が消えれば腐る。そして消える。故に儚い。まさに夢のようにの。だからやはりお前は「儚ノ中」じゃよ。」

ほっほっほっと子供らしくなくその人は笑った。

何だか馬鹿にされたみたいですごく嫌な気分だった。本当に馬鹿にしてたんだろうけど...

「うそっ！うそつきっ！ひやくねんなんてもうとつくにすぎてるもん！
ぬしちやまのうそつきっ！」

私はそれだけ言つとその人の前から走り去った。その人の笑い声がよく聞こえる。

もうその姿が見えない所まできてもその人がまだ笑っているからどこまでもその笑い声が付いてくる。

——うそつきっ！うそつきっ！あたしがくさるなんてへんだもんっ！それじゃたべものとかといっしょじゃないっ！

あたしをこわがらせようとしてあんなこといったんだっ！やなのっ！だいきらいっっ！

そっ...私が死ぬなんて...あり得ない、そんな事とても考えられない

死は、醜くて悲しくて……何より怖いもので……。

私は、死にたくはなかった。

第一章 第一節

「冥獄抄散話・儚ノ中」

第一章

第一節

—

「明日からお前はお使いだよゆめ。」

「お使い？どこへ？」

囲炉裏を囲んだ夕餉の席で「丸嬰」まるえいがゆめに向かって言った。

そこはゆめ達が何度か奉公に訪れている世界の境に位置する茶屋の中。

いつものように茶屋の手伝いをして日が暮れて、いつものように囲炉裏を囲みささやかな食事を楽しんでいる時に発せられた「丸嬰」の突然の一言だった。

そこにいる全ての者の視線が「丸嬰」に集中する。

ゆめ、そこから右隣に「露歩つゆあるき」、「さき」、「閑伽注あかづく」、「丸嬰」を飛ばして「くるり」、「とばねき」の計六名の視線が「丸嬰」に集中した。

ゆめがまだ死を身近に感じるより数千年程前の事になる。

「とある夫人のお屋敷だよ。貪主の古い知り合いのね。」

随分前に旦那を亡くしてずっとそこで暮らしてるもんだから、暇で暇でしょうがないんだよ。んで、今日訪ねてちよろつとあんた達の事話したら話がしたいと言っからさあ。

引き受けてきたって訳。」

「引き受けてきたって…そりゃいきなり勝手な事を…。」

ゆめの隣の「とばねき」が少し呆れた顔をして「丸嬰」を見やる。

「あん？別にどって事ないだろ？皆茶屋番位の仕事しかなくてヒマなのは確かなんだしさ。」

「いや…まあそりゃそうなんだけどさあ……でもまたあまりにいきなりだろう？」

「そりゃそうさ！あたしはいつだって気まぐれ勝手だからね！」

そう言つて「丸嬰」はけたけたと笑つた。処置なしとばかりに「とばねき」が軽く溜息をつく。

「でも、何で私なの？」

ゆめの問いに「丸嬰」が笑うのを止めて瞳をゆめに合わせる。

「そりゃそうだろう？」

逆に返された。訳が分からずゆめは首を傾げる。

「何がそんなのよ。」

「夫人は話がしたいと言つたんだ。「くるり」と「さき」にそれが出来ると思うかい？」

「……………」。

仏頂面で確実にガンを垂れている無言の「さき」。

「……………」。

呆けた面で確実に心ここに在らずな無言の「くるり」。

ゆめは………納得した。

「なる程……」

「って訳だからゆめ！明日は早いよ！あたしが案内してやるから今日はもう寝なっ！」

そう言つて「丸嬰」はさつさと話をまとめてゆめを追い立てた。

ゆめを寝かしつけるようにと「とばねき」をも追い立てる。

それに連なる形で「くるり」も「とばねき」達と共に奥の間へと消えた。

一気に囲炉裏の周りを静けさが満たした。誰も何も話さない。

時折湯呑をすすする音と火のはぜる音しか聞こえない。

しばらくすると奥の間から聞こえていた物音や囁きも途絶え、小さな寝息が漏れ聞こえるのみとなった。

「何故だ？」

静かに声を発したのは「露歩き」だった。

誰に向けての問いか誰もがわかっていて。けれどその問いに対する答えは返ってこない。

「何故ゆめを今その夫人の元へ使いに出す？「丸嬰」。」

今度は名指しで、端的だった質問を飾り付けて「露歩き」は再度尋ねていた。

「さき」は刺し殺すような視線を「丸嬰」に向ける。

「閑伽注」は穏やかな笑みを浮かべた状態で茶釜をゆっくりと掻き混ぜている。

「丸嬰」の瞳が妖しく光る。ぎらついた眼光が「露歩き」の静かな蒼に溶けた。

「別に時期は関係ないよ。たまたまあたしが一緒だったのが今回だ

「つたから今回言っただけの事さ。それにあれはいずれ試されなきゃならない…必ずね。」

二人は視線で線が引けそうな程に強く、互いに相手を見つめていた。空気が張り詰めていてとても居心地が悪いその中で「闕伽注」と「さき」はその様子を自然の態でくつろいでいる。

「貪主と契約した時に聞いてないのかい？その「さき」を含めてこいつ等三人は貪主の縛れる御魂じゃない。御殿に随する御魂だつて。それで御殿の御魂には御殿の御魂の役割があるって事をさ。」
「丸嬰」が御殿の御魂の「さき」を目の前にしてずばずばと話を進める。「さき」は別段表情に変化を見せない。
いつもの陰しい表情。「さき」は三人の中で唯一その役割を知っていた。

「それがもしかしたら今回のゆめじゃないのかもしれない。でもそれはまだわからない。」

「縁」が切れるその瞬間まであなたは指をくわえて見てるしかないんだよ。「露歩き」。

「……………」

「これがあんたが望んだ道だ。どうだい？堪ないだろう？」

「承知している。」

「そうかい…。じゃあ別にいいね。」

それだけ言つと「丸嬰」はあふあと欠けた前歯を露わに大きな欠伸をするとその場でごろりと横になった。短い裾がめくれその小さな尻が半分露わになる。

それを直すでもなく手を尻にやるとぼりぼりと搔いてしまいいはががああとでかいびきを立てて完全に寝入ってしまった。

誰もそこを動かない。後に残されたのは眠りを必要としない者ばかり…。

夜は長く続く。

その夜を、「露歩き」はいつまでも「丸嬰」のその小さな背中を見つめて過ごした。

二

茶屋を中心に広がる幾筋もの長い道。

どれも似たような筋道を描いて似たような山の上を幾筋も伸びていきその端に姿を消す。

何処かへ辿りつく為に引かれている道であるのは確かなのに、何処へも辿りつけないかのような気持ちにさせる、そんな道。

一人で目的も無くこの道を踏み出したら、あの山の端に姿を消したら、もう二度とこの茶屋を目指す事は叶わないのではないかと思わせる永遠の道にゆめには思えた。

実際この茶屋の道を「丸嬰」と二人という少人数で、しかも明日からは本当に一人で行く事を考えると少し怖かった。

そんなゆめの気持ちを讀んでか「丸嬰」がにっかりとその欠けた前歯を見せて笑顔で振り返る。

「さっ！行こうか！ゆめ。」

「うん…。」

歩み出す「丸嬰」の隣にゆめが並ぶ。

長閑な道を二人は進む。

「二人とも気を付けるんだよー！」

「くるり」と並ぶ「とばねき」がその背に声を掛ける。

「さき」はいつもの縁台に腰掛けてその様子をただただ見つめていた。

「露歩き」は、そこに姿を見せなかった。

長閑な道は見た目通り本当に何処までも続いていた。

幾つ山を越えてみても、また似たような光景が目の前に広がる。けれど不思議と疲れない。

「丸嬰」曰く、

「道がむしろ呼んでいるからさ。」
との事。

——意味わかんない……。

途中道の端に寄って昼飯を取ったりしながら、その変わらない眠くなるような道をただただ進んでいった。

思えばまだ一度も分かれ道を見ていない。

それについても「丸嬰」曰く、

「目指す道に迷いが無いからね。」
との事。

「……………意味わかんないよ……。」

ゆめは思つにとどまらずついに呟いていた。

進む道は風景もその道程もあまりに変わらず、同じ所を歩いているのじゃないかと疑いたくなる程単調なものだったが、ゆめは全く飽きなかった。

隣を歩く「丸嬰」が今では誰も知らないような御殿にまつわる色々な昔話をするからだ。

例えば、恐れ多くも「極楽貪主」^{ごくらくどんす}の命を狙って賊の一味が侵入した

時、今では「居眠り護兵」の名称で親しまれている（？）「一連撃」いちれんきやくがまともに戦い、全てそれらを召し捕ったという捕物劇の話や、助平で有名な豆蔵爺の若かりし日の当時一番の舞手との禁断の恋物語等々。

それを確実に本人そっくりだろうと思われる声音で所々の名言を再現するものだから、ゆめはもう驚くやら、可笑しいやら、ちよつぴり切ないやらで自分が道を歩いている事さへほとんど忘れて「丸嬰」の話に聞き入っていた。

だから、突然自分の中に訪れたその感情が何と呼ぶものなのかゆめにはすぐにわからなかった。それが自分の感情だという事すらもわからなかった。

突然獣に襲われたような感覚。ゆめは思わず後ろに飛び退いていた。楽しげに話をしていた「丸嬰」が言葉を止め、そんなゆめを見つめる。

そしてゆめの視線の先を追いつくりとそちらを眺めた。

目の前にはいつの間にもやら深い青々とした竹林がその葉を囁かせながら密集していた。

道は竹林を境に石が敷かれその間を苔が生している。茂る笹の葉の合間を縫って陽光がその石畳に文様を描いている。とても静かな光景だった。

——でも……何だか…怖い…。

ゆめはわずかに後ずさりした。

「ゆめ！」

はつきりと呼ぶ「丸嬰」にゆめははっとして顔を向ける。

「大丈夫だよ。こっちが何もしない限り向こうも何もしない。」

——「向こう」……………？

「さっ…おいで！ゆめ！」

「丸嬰」がゆめに向けて紫色のその小さな手を差しのべた。

ゆめがその手をそつと取ると、「丸嬰」はしっかりその手を握り竹林の中へとゆめを誘った。

三

竹林の道は数歩進むと、いきなり急な下り坂に変化した。

奈落を目指すかのように進む道。その周囲を竹林と芦が際限なく蒼緑の世界を作り上げている。

空気もひんやりとしてあまりに静かで何も感じ取れない。おそらくここに生き物は何もない。

そんな感じの不自然な静けさだった。

——さっきまでと世界が全然違う…。

ゆめは肌と心でそれを感じ取っていた。

隣に行く「丸嬰」がそつと呟く。

「ここを通る時は、何も話しちゃいけないよ。足元の石だけを見て歩くんだけ。」

——どうして？

思わずそれを声にしようとしていたが、ゆめは寸出の所で思いとどまった。

それを両手で口を押さえるという態で体で表現する。

「そう、それでいい。」

「丸嬰」はそれだけ言つと、口をつぐんでゆめの手を取りずんと道を進んでいった。

ゆめはずつと石畳の苔と一步前に行く「丸嬰」の背中で揺れる銀の髪を眺めながら進んだ。

その間も何だかわからない心のざわめきは、竹林に生える芦や笹の葉の音色のようにゆめの心の中で絶え間なく響いていた。

その竹林が長かったのか短かったのか、ゆめにはよくわからなかった。

過ぎてしまえば一瞬だったような、永遠だったような……。おぼろげな感覚。

竹林を抜けるとゆめはほつと息を付いていた。

息がつけるとゆめは「丸嬰」に先程思つた質問を投げかけていた。

「どうして話しちゃ駄目なの？」

「彼らを起こしてしまうからさ。」

「彼ら？」

ゆめはそつと背後の竹林を振り返る。

「あれ……？」

下り道を進んできたはずなのにそこには平坦な道筋があつた。

ちょうど竹林の入口と同じ風景。

何処までも広がる竹と芦。やはり不自然な静けさしかそこには感じられない。

「変な所だつたけどここには何もなかったよ「丸嬰」。」

「本当にそう思ukai？ 妙な静かさがここにはあつただろう？」

「うん……あつた。でも静かさだよ？ 生き物の気配は全然なかった。」

「

「そういう事。」

「え……？」

「ここにあるのは生き物の気配じゃないって事さ。」

——生き物じゃない……生きてない……じゃあ……

「じゃあ……何？」

「「死人」さ……それもとてつもない数のね。」

「え……。」

——とてつもない数って……そんなの何処にも……。

「芦が茂ってるから道からはよく見えないんだけどね。竹林の間に
ごろごろ転がってるんだよ。」

ここは「客死きやくし隧道すいどう」って言うてね。

誰にも看取られず、思われず、供養もされずに客死した、信心の
無い行き倒れの御魂が、逝く場を亡くして眠る墓場道なのさ。」

——誰にも看取られず、思われず、供養もされず……。

「きやくし……。」

その言葉を呟いた途端、ゆめの心を重いものが襲った。

水に落とした墨のように枝葉を伸ばして禍々と広がる「それ」。

じんわりと確実に体を満たしていく深い「それ」。そして、その先
に逝くつくもののその姿は——。

——え……？何で？どうしよう？

どうして私ソレヲ……ソノキモチヲ……。

「行くよーゆめ。」

「あ……。」

「丸嬰」の声に気持が晴れる。

「うん。」

ゆめは「丸嬰」に並んでまた道を歩み出した。

ゆめは知らない。

「丸嬰」が声を掛けたのが随分時間を置いてからのものだという事を…。

それまでずっとぼんやりとしたゆめを無言で見つめていたという事を…。

その瞳に獰猛な修羅を宿していたという事を…。

四

「客死隧道」から敷かれていた石畳はその先も続いていた。

いや、むしろ隧道に敷かれていた道より次第に上等なものへと変化していった。

当初は所々苔むし、でこぼこの石くれが何とか気持ちばかりの緩やかな細い道を描いていたのに対し、今では完全に滑らかな黒石が隙間なくはめ込まれ五人位が横並びしても十分通る事の出来る上等な道になっていた。

映る景色もがらりと様変わりしていた。

茶屋の前面に広がっていた長閑な山の原でも、先程までの静かな竹林でもなく深い壁のような林がそこには広がっていた。

それは決して例えではなくまさに壁。初めこそまばらに生えていたそれはいつのまにやら隣同士その亀の甲のように無骨な暗色の木肌を密着させ、根元では互いが互いを喰らうかのような蛇のごとくにくっっていた。

しかし獰猛なそれは決して緻密にはめ込まれた石畳の上にまでその手を伸ばす事なくその境だけ不自然にも整然と足並みを揃えていた。木肌を流れる樹液の様なものが淡く碧色に蛍光している。

「なんかここ…変な感じがする。」

ゆめが呟く。するとぺたぺたと音を立てて隣を歩いていた「丸嬰」が指をついと上へ向けてゆめを見て口を開いた。

「上は見たかい？」

「上？」

ゆめは上に顔を向ける。

「あっ……。」

驚きに声を漏らしていた。

そこにはおそらく夜空が広がっていた。けれどそれは常の色の夜空ではなかった。

漆黒の闇を目もくらむ純白が、きらめく星の輝きを宵闇の獣のごとき朱点がその役割をなしている。

純白であるが故に世界に闇は無く、ゆめは「丸嬰」に言われるまで自分が夜道を歩いているという事実到现在まで気付かなかったのだ。

「……夜が、白い……。」

「夜よりこっちの闇の方が深いからね。」

「夜より暗い？」

「そうさ。」

道の先、遠くにほんのりと灯りがとるのが見てとれる。

真昼の様な景色の中で、弱弱い灯りのともりが何故かはつきりと見てとれる。

茶屋が世界のはざまに位置していて、その道は様々な世界につながっているという事はよく聞いていたけれど、これ程違う世界だとはゆめは思いもしなかった。

「ここは冥獄でもかなり底に近い堕ちに堕ちた所だからね。」

隣を往く「丸嬰」がぴたりと止まった。ゆめも止まり前を見る。その数歩先にはどっしりとした濃紺の瓦屋根を載せた古木の門が構えていた。

ゆめが門を認識すると同時にそこから世界が広がりを見せる。

門の両隣からまるで囚人の檻のような鉄柵がみるみる生え揃う。鉄柵を外壁として使う、それはゆめのいた世界では檻以外に見ないものだったのでとても奇妙なものとして映った。けれど見知らぬ草花の彫刻の施された綺麗なそれをゆめはむしろ素敵だと感じた。

その果ては果てしない。

その柵の隙間も果てしない。

そこになにも映らない。

そこには空同様の純白が広がっていた。

突然、隣にいた「丸嬰」がその門に向けて走り出した。

ゆめがその動作に気付くか気付かないかの所で、すでに「丸嬰」は門に到達しその走りの勢いそのままに門の上を駆けあがっていた。中程に垂れていた鎖の紐に両手でぶら下がる。

り
—
ん…………

耳に優しく余韻を残す涼やかな鈴の音が木霊する。

「丸嬰」が鎖から手を離して地面に降り立ちしばらくすると、大人の二人重ねた位の大きな木の扉が内側に向けて音もなく開いていった。

そこに控える一人の男。

右手を己の左胸にあて、深々と頭を下げている。

「お待ちしておりました。」

落ち着いた深みのある声。

その面がゆつくりと正面を向く。

「ようこそ、「だなんえん墮烏苑」へ。」

——あ…………。

ゆめは、自分の中にほのかな気持ちが宿るのを感じた。

第一章 第二節

第二節

—

「ゆめは恋をするとすぐわかるね。」

そう言われたのはいつの事だった？

言ったのは「さき」だ。それは覚えている。

「目をきらきらとさせて本当によくじっと見つめている……。」

「さき」に言われて初めてそれを自覚した。

本当だ、よく見ている。

その人の動作、表情、声をつぶさに見つめてしまっ自分がいる。

でも、だからといってそれを止める事が出来なくて…。

気付くと視線が、心がその人を追ってしまっ。

いつからこうなっただんろう？よくわからない。

でも、もう気づいたらこの気持ちになっっていた。

なるような気が随分前にした気がする。

そう思っただ時からもう私の気持ちは変わってきてたのかもしれない。

「好きなんですよ？「露歩き」の事。」

——うん、私「露歩き」の事が好き。

カタカタカタカタカタ——！

積み木細工を崩すかのような音にゆめはふと我に返った。
正面の人物に心を戻す。

肩にわずかにかかる黒い髪、眼鏡の奥の鳶色の瞳。
相（外見年齢の事）は、「露歩き」と同じ位。
すらりとした長身を落ち着いた茶と黒の上下の和装が彩る。

あれは、いわゆる「亜装」^{あそうつ}だろうか？

着物の中に白い襟のある衣をまとい、首下でその襟をまとめるように細い布を巻きつけている。黒い袴の下から覗く紐を巻きつけた革で出来た長い履物も、ゆめの知らないものだった。

——変な格好、不思議な人……。
だけどこの気持ち……。

その人を瞳に捉えると、ゆめは心の中に温かい気持ちが広がるのを感じた。

嬉しいような、くすぐったいような、心躍るそんな気持ち。
「露歩き」に抱く気持ちとよく似た幸せな気持ち……。

——私この人に恋をするかもしれない。
うつん、そう思ったらもう駄目。

——私この人たぶんもう好きだ。

「はじめまして。

私はこの「墮烏苑」だなんえんの下男で、「鎖葉詩」さばしと申します。

以後お見知り置きを……。」

そういうなり「鎖葉詩」というその下男は、ゆめの前でわずかに膝を折り優雅にお辞儀をしてみせた。

それはあまりに自然で流れるような所作、思わず惚れ惚れする程に……。

「さばし……さん。」

「どうぞ呼び捨てで……。」

「えっ……えっと……さ……さばし……。」

「はい。」

「鎖葉詩」はにこりと微笑んだ。その笑顔には華があつた。はつと息を呑む、心に響くそんな華……。

——っ……す……すてき……。

ゆめは真っ赤になって俯いた。

そんなゆめをやれやれと横目で見ながら「丸嬰」まるえいがずんずんと歩き出す。

「はいはいはい、いつまでも突っ立ってんのも何だしさ！

早く案内してよ、下男なんだから。

あゝそれでこの子は「儂ノ中」なまのちゆうっていうから。「ゆめ」って呼んでやって。

宜しくね。」

そういうやいなや、「丸嬰」は「鎖葉詩」の手を取るとずんずんゆめを置いて進んでいってしまった。

ゆめはそんな「丸嬰」の態度に一瞬あつけにとられたが、すぐ我に返り拳を握り震わせた。

——じつ……自分で自己紹介したかったのにイ……ッ！

——そんなゆめの殺意を察してか、「丸嬰」がちらりと振り返り——

にやりと笑った。

——きイ……ッ！

ゆめは心の中で怒りの奇声を発し、二人の後を追いつけた。

二

不思議な庭だった。

生きるものが、何もなかった。

見た事のない全ての草花が、鋭利な硝子ガラスで出来ていた。

空の白さを反射して庭全体が雪原のように綺羅綺羅と光り輝いている。

カタカタカタカタカタカタ——！

積み木細工を崩す音、唯一動きを見せるものにゆめの瞳は奪われていた。

それは、桜の様な古木だった。

館に続く石畳の両脇に、一定の間隔を置いて植わっている。

全ての木の頂に細い注連縄のような赤い紐が付いていた。

それがどこまでもどこまでも天に伸びていてその終わりは純白の闇に吸い込まれ定かではない。

古木の枝は、全てが早送りのように、黒い蕾をぼつぼつと膨らませる。

蕾はそのまま花開くことなくぐらぐらと大きくなり、まるで小さな鳥が羽を休めているかのように見えてくる。
からす

古木に群れなす鳥の影は一種異様だ。

しかしそれはある程度膨らむとまるで猟師に射止められたかのように、突如鳥のごとく翼をひらき、羽を散らしてぼとぼと地面目指して落ち始めた。

そしてそれは地面に落ちるか落ちないかの所で消えていた。

それと同時に鳥が休んでいた木はみるみる平面の枯れ木と化し、その場で衣を折りたたむかのように積み木細工の様な音を鳴らして崩れていく。

地面に完全に折りたたまれた時、わずかにはらはらと宙を舞う漆黒の羽が霽もやのように消えていく。
後には何も残らなかった。

しかししばらくすると崩れ落ちた木は、その先端に結び付けられた赤い紐にひっぱられ天へ向けて直立し、また蕾をつける。

その繰り返しを繰り返していた。

「不思議な木……………」

「はい。堕鳥の木です。」

「だなんの木？」

「はい、鳥が落ちるかのように見える木ですの……」

ちなみにこの苑の名前の由来はこの堕鳥の木にあります。」

「へえ…。」

ゆめは舞い散りひらひらと落ちてきた黒い羽に、そっと手を伸ばした。

それはゆめの指先に触れるか触れないかの所で、煙のように消えてしまった。

「……消えちゃった。」

「はい。それは、まやかしですから。」

ゆめの隣で「鎖葉詩」が静かに答える。

「この木だけではありません。この苑のものは全てまやかしですから…。」

「詰まらない所でしょう…。」

「そんな事ないよ!」

ゆめは思わず「鎖葉詩」に大声で叫んでいた。

まやかしと言う「鎖葉詩」が少し寂しそうに見えたから…

そんなゆめの態度に「鎖葉詩」が少し驚いた顔をする。

でもすぐに「鎖葉詩」はゆめの心根を知り、ゆめが気まずい表情を作る前に言葉を発していた。

「そう言っていただけだと、私も嬉しいです。有難うございます、ゆめお嬢様。」

—— ゆめ…お嬢様…。わ、わたし…お嬢さま。

ゆめの心が沸点を超えた。

ゆめはしばらく無言で雲の上を歩くかのように歩を進めた。そんなゆめを見てまた「丸嬰」が舌打ちする。

「お嬢様、ねえ……。」

何だい「鎖葉詩」、随分な鼻^{ひな}肩^{かた}じゃないかあ？

あたしの事は一度もそんな風に呼んだ事なくせにさあ。」

「恐れながら、マルエイサマはとうにお嬢様という御年ではないと奥様より伺っておりますので……。」

「……………」

「何か敬称をご希望という事でしたら……そうですね、奥様と同年代と伺っておりますのでやはり「丸嬰奥様」とお呼びいたしましうか？」

「……絶対嫌だツ……。」

「……失礼いたしました。」

「……………」

「……では、何とお呼びいたしましょう？」

「……つく……もういいよ！何でも！」

「かしこまりました。」

「……………」

「……………」

「ねえ、「鎖葉詩」。」

「はい。」

「今、ちよつと面白いと思つただろ？」

「いえ、そのような事は決して。」

「……………いつかあんたの化けの皮、？してやる。」

「……ははは、お戯れを。」

と、いささか剣呑な会話を和やかに「丸嬰」と「鎖葉詩」がやりとりしている内に、一行は館の正面玄関に着いていた。

濃紺に微細な白い斑点を散りばめた瑠璃、まるで星空のような石造りの亜装の建物。

物見櫓ものみぐらでもないのに窓の数を見る限り、その建物が三楼から成っている事が見てわかる。

建物全体を石で造る事、住処が二楼より高い事はとても物珍しくゆめの目には映った。

けれど一方で所々の出窓や屋根などは、瓦を使用したゆめの知る造りをしている事にも気づいた。

——「鎖葉詩」もそうだけど、ここに住んでる夫人って人、和装と亜装の両方が好きなのね。

でも、亜装なんて珍しい。確か亜装って……。

ちやぷん……

「あ……。」

水の音で我にかえる。見るとゆめの目の前には扉があった。物思いにふけっている間にいつの間にもやら正面扉に達していたらしい。

障子の格子のような木枠の間に分厚い硝子をはめ込んだ観音開きの扉。

両の扉に一匹ずつ黒と赤のひげの長い鯉が木枠を越えてそれぞれの扉の中をゆつくりと泳いでいる。

その尾ひれが生み出した水泡は、まるでおはじきの玉の如く様々な色を魅せながら、からからと木枠に当たり軽やかな音を響かせながら消えていく。

「きれい……。」「

ゆめはぼそりと呟き、一つの扉の鯉の上をなでた。

その下で鯉が大きく体をくねらせる。するとまたちやぷんと水音を響かせて沢山の鮮やかな水泡を散りばめた。

からからからと小気味よい音が響き渡る。

「わぁっ……。」

ゆめが喜びの声を上げる様を「鎖葉詩」が微笑ましげに見つめた。その視線に気づくとゆめははっとし少し恥ずかしそうに俯いた。

——やだな……きっと今すぐ子供っぱいって思われた…。

「……残念です。」

「え……？」

「鎖葉詩」の寂しそうな呟きにゆめが顔を上げる。

「鎖葉詩」が困ったような笑みを浮かべてゆめの顔を見つめていた。もう少し貴女のその素敵な笑顔を見ていたかった。

やはり乙女の笑顔はどんな華や色より美しいものですから…。」

「……ッッ！」

「乙女の笑顔……！」

「丸嬰」がゆめと「鎖葉詩」の間に割り込み、にっかりと前歯の欠けた歯を見せて笑いながら顔を突き出した。

無。

「ではご案内いたします、ゆめお嬢さま。

少し段差がございますので足元にお気を付け下さい。」

「……あ、有難う、「鎖葉詩」。」

「鎖葉詩」は優雅にゆめの手を取ると扉を開けてゆめを館の中へと

誘った。

音もなく閉じる観音扉、黒い鯉が尾ひれを鳴らし、水泡がからからと小気味よく音を立てた。

「……二人とも無視かよ。」

とびきりの笑顔を顔に張り付けたまま「丸嬰」は一人静かに怒りに燃えた。

三

館に入るとそこは三楼全てを吹き抜けにした巨大な広間が広がっていた。

「うわぁ……高い……。」

ゆめは空を見上げて思わず呟いていた。

そこはいわゆる他の部屋へ向う為の空間だった。

広間の両隅を堅牢な亜麻色の木製階段が囲み、二楼、三楼の所で両の階段を繋ぐように通路が渡されている。

深い色合いの水泡をはらんだ琥珀の壁面には、その階段を辿る様に沢山の様々な文字を記した掛け軸が掛けられていた。

ゆめの知らない文字である。

それがそれぞれの掛け軸の中で様々な文字を生き物のように躍らせ、そして消えていく。

それを何度も何度も繰り返している。けれど次に躍る文字は消えた文字と必ずしも同じものではなかった。

「鎖葉詩」は階段へは向かわずその空間の対面に位置する観音扉を目指して真っすぐに進んでいく。その広間の中央の手前でゆめは少し躊躇し足を止めた。

「ゆめお嬢様？」

「あれ……大丈夫？」

ゆめがおそろおそろ天を指さす。

空のように広い天井には巨大な朱塗りの燭台が吊るされていた。

それは上に向かうにつれて小さくなる正方形を山の様に重ねた燭台で、その上を沢山の蠟燭の灯が揺れている。

天を覆うように浮かぶその巨大さにしては、それを吊る注連縄の様な紐はあまりに頼りなく見えた。

ゆめの不安に気付いた「鎖葉詩」がふつと優しくゆめに向けて微笑んだ。

軽く膝をつきその視線をゆめに合わせる。

「大丈夫ですよ、ゆめお嬢様。」

あれが落ちてくる事はございません。それに——」

「もしも落ちてきましては必ず私がお守りいたします。」

まっすぐな鳶色の瞳が眼鏡の奥で微笑んだ。

「……………あ、ありがとう……………」

ゆめはそれだけ言うのが精一杯だった。

「鎖葉詩」がそつと立ち上がりその手を引いて先を進む。

ゆめはその背中をぼんやりと見つめ、その手を引く細く長い優しい指先に心を揺らした。

黄と緑の蛙の戯れる対面の観音扉を開くとそこは外だった。天を白

い夜空と散りばめた朱点が覆っている。

四方は星空の壁とそこから乱暴に突き出した樹華に囲まれて、地面は深く底の知れない水で完全に満たされていた。その中には樹華に砕かれた壁の黒石が小島のように所々に突き出し、その間を蛍のような淡い光が漂っている。

館の前に広がる庭と違い、そこは夜より深い闇にしっとりと満たされていた。

「足元にお気をつけください。」

「鎖葉詩」は前方にまっすぐと伸びる湾曲した朱塗りの橋をゆつくりと歩んでいった。

その先には小さな庵がぼんやりと見える。

淡い光に照らし出されたそれはそこにあるのがまるで幻のようであった。

—— 何だか……真夜中の夢みたいな所……。

怖くないけど、心がひんやりする……。

何処からのものか、生暖かい幽かな風がそよぎ水面を揺らした。

その風に吹かれ散り落ちた樹華の小さな白い華弁が、また水面に細く孤を描く。

そこではただ在るものだけでなく動きを見せるものさへ静かだった。

—— ……まるで眠るように死んでるみたいな所だわ……。

思わず息をひそめながら橋を進むゆめはそう思った。

「あ……………！」

懐かしいものを見てゆめは思わず声を上げた。

東屋の中には沢山の鉄で出来た丸い虫籠が下げられていた。

それは丸である事を除けば、大きさや装飾などどれを取っても一つとして同じ形のものはない。

その中を金色の光を振りまく七色の光が漂っている。

「極楽蝶……。」

それはゆめの生まれた西の指の御殿を舞う蝶と全く同じものであった。

一番近くの籠に手を伸ばしその中を舞う蝶をそつと覗き見る。

幸福に彩られた燐分がゆめの鼻を甘くくすぐりその心を幸せで満たしていた。

「「鎖葉詩」、これ本物でしょ？」

ゆめが振り返り後ろに控える「鎖葉詩」に問いかけると、前方から優しく透き通るような声が歌のように囁かれた。

「そうです、それは本当の極楽蝶ですよ。」

ゆめは「鎖葉詩」の答えを待たずに前方に目を戻していた。

ひっそりとした闇の中に目を凝らす。

幸福を魅せる虫籠の奥に動く影をゆめは見た。

長椅子の端に両の手を載せ寄りかかるように座る女性。

「はじめまして、そしてようこそ私の苑へ。」

そこには「墮鳥苑」の夫人が穏やかに微笑んでゆめを迎えていた。

第一章 第三節

第三節

—

「さあ、どうぞこちらへ。貴女の御顔をよく見せてくださいませ。」

やはり静かで、まるでさざ波のような穏やかさを持つ夫人の声音がゆめを招く。

ゆめはそつと庵の中へ足を踏み入れた。

「えっ……あれ？」

ゆめはまたまた驚いた。

この苑に来てからもう何回驚いた事になるだろう？
けれどやはり驚かずにはいられなかった。

外から見た庵は幻のように闇の中でひっそりとしていたのに対し、
庵の中は真昼の木漏れ日で温かく満たされていた。

庵の中から見る外の風景も死んだように眠る静けさはなく、深い水の底は温かく清らかな碧色の光を映し、これもまた何処からのものかわからない温かな日差しをその水面に輝かせている。

また四方は黒壁を境として世界が閉じていたはずなのに、何処までも広がるかのような田園風景が見渡せていた。

ゆめはそこに見える田園風景の草花が、全て見た事のあるものだとふと気づいた。

そう、それは西の指の御殿の中にある大浴場、「浮魂癒^{ふたまゆ}」の景色によく似ていた。

「お分かりになりますか？」

目の前に夫人がいた事を思い出し、ゆめは夫人に視線を戻した。光の中で夫人を見るなり、ゆめはあつと声を上げてしまった。

そしてそれが失礼だという事に気付くと、気まずそうに両手で口元を押さえ、窺うように夫人を見つめていた。

「ご……ごめんなさい……私。」

「……………どうかされまして？」

夫人が小首をかしげ、澄んだ瞳でゆめを見つめた。

ゆめはそれを口に出していいものなのか戸惑い、もじもじとした。

夫人はそんなゆめを、穏やかに見つめている。

「きっとあなたの髪の色にびっくりしたんだよ。」

聞きなれた声にゆめが振り向く。

そこには「丸嬰^{まるえい}」が立っていた。

救われたような気がしてゆめはほっとした。

「丸嬰」がぺたぺたと足音を響かせながら、庵の中へと入ってくる。

「丸嬰」はそのままゆめの横を通り過ぎると、夫人の座る長椅子の空いている所に当たり前のように腰を下ろした。

そしてあろう事か隣に座る夫人の、長く編み込まれた髪の毛の束を、むんずとつかんだ。

上品そうな夫人への、あまりに無礼な「丸嬰」の態度に、ゆめが口をぱくぱくとさせていると、「丸嬰」が先程ゆめの感じた驚きを口にしていた。

「忘れたのかい？あんたのこの髪の色は、天人の色だって事をさ。」
「ああ、そういえばそうでしたね。すっかり忘れていましたわ。」

夫人があらあらと手袋をはめた右手を、上品に自分の頬にあてる。
ゆめはそんな夫人をそつと見つめた。

天人の色、話には聞いていたが、ゆめがそれを見るのは初めての事だった。

天人の髪の色はみな、金色に輝き光を放つという。

そしてその輝きが淡い程に、高貴な天人であると言われていた。

「丸嬰」の握る細く長い髪の毛の束は、まさに金色に輝いていた。
しかもそれは銀系のような淡い光をたたえている。

神々しい光を放つ夫人の姿は、まさに天人そのものだった。

ほっそりとした面ざし、柳眉とその下の少し眼尻の下がった碧色の
淡い瞳が、柔らかい雰囲気醸し出している。

服装は襟元や帯を見る限り和装のようにも見えたが、全体として見ると亜装に見えてしまう不思議な白い衣をまとっていた。

——そうだ……亜装は天人が好む衣だって……。

じゃあやっぱりこの人は……。

「ゆめ、コイツはね、こんな髪の色してるけど天人じゃないから。」

親が天人ってだけ。生まれも育ちもばりばりの冥獄っ子の鬼子だよ。

「ゆめの誤解を察した「丸嬰」はそう言って、まだその手に握る金色の髪のをぐいぐいと引っ張った。」

夫人は髪が長い為か、全く痛がる様子も見せず「丸嬰」のその行為を許し、その隣で穏やかに微笑んでいる。

ゆめはそんな二人の力関係がよくわからず、はらはらと気が気ではなかった。

「ゆめさん、と仰るの？」

夫人が隣の「丸嬰」を見つめ、そのあとゆっくりとゆめの方に顔を移した。

見慣れぬ輝きと優しい眼差しを真正面から受けて、動揺しながらもゆめは答えていた。

「あつ……は、はい。はじめまして。

黒ノ赤子の西の指の「極楽貪主」様の御殿で暮らしている「夢ノ中」といいます。

ゆめと呼んでください！よろしく願いますッ！」

ゆめが夫人のその風貌に緊張してか、あたふたとしながら頭をぶんとばかりに下に下げた。

それを見た「丸嬰」がぶつと笑う。

夫人がいけませんよとそんな「丸嬰」をたしなめると、ゆっくりと立ち上がりゆめの所まで歩み寄った。

頭を下げるゆめの前にそつと膝を折り、ゆめの両手にその手を添える。

ゆめが顔を赤くしながらはつと顔を上げると、夫人が優しく囁いていた。

「そんなに固くならなくてもよろしいですわ。

私は貴女とお友達になりたいのですから。」

そう言つて夫人は、その淡く朱を引いた薄い唇で上品に微笑んだ。

——素敵……ぬし様の宴で舞う舞姫様みたいに綺麗。

ゆめはぼんやりとその顔を見つめた。

「「ゆめのなか」とはどういう字を書くのかしら、ゆめ…。
私に教えてくださる？」

夫人のまとう香の香りが、ゆめの心を優しくなでる。
ゆめは少し恥ずかしそうに、その名前を答えていた。

「儂という一字でゆめ、一払いでノ、上中下の中で儂ノ中つています。」

その……私の命がとても儂いものだからだそうです。」

—— やっぱりやだな……こんな名前。

ゆめは改めて口にしてみて、自分の名前に惨めさを感じた。

儂いもの、とてももろく、弱く、ただ成す術もなく、消えていく定め^{もの}の存在。

自然ゆめの目線は下を向いていた。

「そう……素敵なお名前。」

「素敵？」

夫人の言葉に耳を疑った。

ゆめは顔を上げて夫人を見つめる。

そこには穏やかな慈愛に満ちた瞳が、ゆめを捉えていた。
心を優しくくすぐるような淡い瞳。

「ええ素敵ですよ。」

とても綺麗な言の葉です。

儂いものとは、尊くて美しいものの事ですから。

私、とても好きですわ、そのお名前。」

「で、でも、儚いものってとてももろくて、弱くて……そんな……」

—— そんな良いものなんかじゃ……ない。

「確かにそうかもしれませんが。けれどそれは決して悪い事ではないのですよ。」

もろく弱いからこそ、その一瞬の輝きは何よりも強く尊いものとなるのです。」

「ゆめは今その中に在る。」

何よりも輝き、強く尊いものの中に……。

それはとても素敵な事でしょう？」

「自分を誇つていいのよ？ゆめ。」

それはゆめがいつも欲しかった言葉であつた。

淡い存在である自分を認めるその言葉。

それを天人のような夫人が、さらりと口にしてくれた。

それがゆめは心の底から嬉しかった。

夫人に許される事は、まるで世界から許されるような幸福感があつた。

そう思わせる程に、夫人の高貴は色めいていた。

「そう言ってもらえるなら……私も好きになれそうです。」

ゆめは夫人に心からの笑みを返していた。

「…全く。普段のぺらぺらはどうしたんだか…。」

もじもじするゆめにしびれを切らした「丸嬰」が、会話の主導権を握るとさっさと話を進めていった。

「丸嬰」がお題を夫人に投げかけ、夫人がそのお題にやんわりと答える。

時たま「丸嬰」がゆめに質問しゆめがそれに答えると言ったように、互いの事を知る機会を作っていた。

会話はなごやかに流れていく。

「丸嬰」と夫人、一見噛み合わないそうな二人だったが、何だか会話が成り立っているのを不思議な思いでゆめは見つめていた。

「———そうですわ、「マルエイ」だけでなく「ゴクラクドンス」も合わせて私達は深い知り合いですの。」

「えッ……！そうなんですか！」

「そうそう、ここだけの話なんだけどね。」

「ゴクラクドンス」はもともとこの「フジン」の所の下男だったんだよ。」

「えッ！下男??」

あのぬし様が………??下男!!?!?

嘘でしょ??」

「嘘じゃないよ、本当だよ。」

誰だつて下積み時代はあるって事さ…。ね、「フジン」。」

「ええ……。」

「ゴクラクドンス」には本当にお世話になりましたわ。

私、とてもお転婆な少女でしたのでいつも彼を困らせておりましたの。

例えば———」

夫人がくすくすと可愛らしく笑いながら、「極楽貪主」を落とし穴

に落として半年放置してしまい、しまいには泣かしてしまった話を
すらすらと調べのように物語った。

あの無表情の「極楽貪主」が泣いた。

今の有様からはとても信じられない話に、ゆめは興味深々で話に聞
き入っていた。

「……どうかされてみて？ゆめ。」

楽しく談笑していた夫人が、早くゆめの異変に気づき優しく尋ねる。
そんな夫人の言葉に笑いを止め、「丸嬰」もゆめを見やる。

「あ……。」

ゆめは気まずそうに耳に当てていた手を放した。

遠くからかたかたと茶器を運ぶ音が響いてくる。

夫人が優しくゆめを見つめ次の言葉を待った。

「……えっと、何だか耳の聞こえが悪くて…。」

さつきから夫人と「丸嬰」の言葉が、その……名前だけ変に聞こえ
るんです。」

ゆめが申し訳なさそうに呟く。

庵の中に「鎖葉詩」が姿を現し、車輪のついた茶器の台をそつと中
へ押して入る。

ゆめの後ろに立つと静かに茶器の支度を始めた。

「あらあら。」

夫人が頬に手を添え隣で胡坐をかく「丸嬰」を見つめる。

その視線に「丸嬰」が意地悪く夫人を見つめ返した。

「「マルエイ」、貴女ゆめに何かされまして？」

「ええ、されましてよ。」

「丸嬰」が夫人言葉で夫人に返した。

えつと驚くゆめの前をそつと「鎖葉詩」の茶器を運ぶ腕が過ぎる。

「失礼します。」

ゆめは思わず口をつぐむ。

「鎖葉詩」が茶器をそろえるまで誰も口を開かない。

三人の前に茶器が揃うと「丸嬰」ががぶりとそれを一呑みし、手の甲で口元をぬぐうと話を続けた。

「実は来る道の途中であんたに「呪」^{しゅ}をかけた。

「真名」^{まことな}が聞こえないようにする「呪」をね。」

「「呪」って……！やだ、何で勝手にそんな事するのよ！」

ゆめが文句を言うのにも全く動じず、「丸嬰」は取っ手のついた茶器を茶碗のように持ち上げると、「鎖葉詩」に付きつけた。

「「鎖葉詩」！茶ッ！」

「……私は貴女の細君ではありませんよ。」

穏やかに不平を言いながら「鎖葉詩」が「丸嬰」の茶器に並々と茶を注ぐ。

よく見るとしっかりと湯気の立つそれを、また一息で「丸嬰」は飲み干していた。

「だって、面倒臭いじゃないか！」

あんたに合わせて今更「ゴクラクドンス」の事を「極楽貪主」うゝとか

「フジン」の事を夫人ゝとか呼ぶなんてさあ。だからあんたの耳をちよつといじくらせてもらつたつて訳。」

「いじくんナッ！」

ゆめが声を荒げると夫人と「鎖葉詩」がくすくすと笑った。

ゆめははつとして顔を赤くした。

「丸嬰」が意地悪くにやにやとそれを見つめた。

「あんたの為でもあるんだよ？」

「極楽貪主」の真名なんて知つてたら、色んな奴から狙われるんだから。」

「鎖葉詩」にまたもや茶を求めながら、「丸嬰」は夫人の方に体を向けて口を開いた。

「…で、これがこいつの本性さ。普段うるさいのなんのつて…。」

「ちよつ…。「丸嬰」！！」

慌てながらもまだ2人の視線を気にするゆめを尻目に、「丸嬰」がにやにやと舌を滑らせる。

「いつもはとんだお転婆で、きやあきやあ騒いでうるさいの何のつて。きよろきよろきよろきよろ落ち着かなくてぺらぺらぺら喋ってさあ、お喋り鳥みたいな娘なんだよ。」

けど今はあんたの毛色がちよつと違つのと、「鎖葉詩」が色男だからって淑やかぶろうと無理して頑張っちゃって——」

「だまれッ！！」

さすがに我を忘れたゆめが、勢いあまって茶を「丸嬰」にぶっかけていた。

これには「丸嬰」もあつけにとられ、しとんと茶の滴る髪の毛そのままにやにや笑いのまま固まった。

「ふッ……く……あはははははははは！」
「ぷッ……ははははははははッ！」「

夫人と「鎖葉詩」の笑い声に、ゆめははつと我に返った。

見ると夫人は口元も隠さず、大きく口を開けて少女のように笑っている。

後ろで「鎖葉詩」も少年のように、無邪気に笑い声を立てている。

それでも夫人の装いは気品に満ち、「鎖葉詩」の声の響きにも穏やかな上品さが欠ける事はなかった。

「ゆめ、本当に貴女は素敵ですわ！」

「マルエイ」のこんな情けない顔、いつ以来かしら！」

「私は……くっ……初めて拝見させていただきました。」

「光栄です……ははっ！」

「丸嬰」が苦虫を噛み潰したかのような顔をして無然とする。

ゆめはまだ気恥かしさを残しながらも、ふんと鼻を鳴らすと、すとんと席に腰を下ろし「鎖葉詩」に茶を求めた。

「鎖葉詩」がそつとゆめの茶器に茶を注ぐ。

その間も夫人のくすくす笑いは中々収まらず、「丸嬰」がいつまでも笑ってんじゃないよと髪の毛を引っ張り始めていた。

ゆめはそんな二人を見つめながら、そっと「鎖葉詩」が注いでくれ

小さな掴みのついた湯呑に口を付けた。

それは甘い果物の香りを思わせるお茶だった。鼻先を爽やかな香りが抜けていく。

ゆめは思わずふうつと息をついていた。

「素敵でしたよ。」

そつと近づき優しく「鎖葉詩」がゆめに呟く。

——— そつか……今の「鎖葉詩」にも見られちゃったんだよね…。

ゆめは少し後悔した。

けれど上目づかいに見つめた「鎖葉詩」の表情は先程よりもとても打ち解けたものになっていた。

少し上気した頬と唇が何となく艶めかしく艶っぽい。

——— 素敵……か……。

「うん、おいしかった！ありがと「鎖葉詩」！」

ゆめは「鎖葉詩」にっこりと普段通りにほほ笑んでいた。

三

「ふん……随分ご機嫌になったもんじゃないか？ゆめえ……。」

隣りを歩く「丸嬰」が幾分不満げな顔を浮かべている。

そこは白天に朱点煌めく闇の中、二人は壁の様に立ち並ぶ林の間をとぼとぼと帰路に着いていた。

「まあねえ……」。

だって夫人つてすごく綺麗で素敵な人だし。

「鎖葉詩」もすごく大人っぽくて格好良いんだもん。」

「全く……素がばれたからって開き直っちゃってまあ、いい気なもんだねえ。」

この浮気者。」

「浮気者？」

「だってそうだろ？」

普段いっつも「露歩き」く、「露歩き」くって言ってるくせに、ついさっき会った男にころりと参ってさあ。」

「う……それは……」

「はあくん？それはあ？？」

「それはそれ！これはこれ！

だって二人共格好良いんだもん。

や……！どうしよう……！！」

そういうやゆめは「丸嬰」を追い抜いてぱたと駆けだしていた。

「……あの二人じゃ、あんたがどうこうしてもどうにもならんだろ。」

「丸嬰」はぼそりと呟くとそんなゆめの跡を追った。

突如先を往くゆめがぴたりと止まる。

「そっだ……」。

一応お礼言っとくきやなきや。

ありがとね、「丸嬰」！」

突然のお礼に「丸嬰」はきょんとした。

ゆめがそつと振り返る。

少し照れたような顔をしてゆめは「丸嬰」を見つめていた。

「私が地が出せないってわかったから、わざと私を怒らせるような事してくれたんだよね。

だから、ありがと……」。

ゆめはにっこりとほほ笑んだ。

「丸嬰」が苦虫を噛み潰したような顔をして道端に反吐を吐き捨てた。

「……別にそんなんじゃないよ。

あんたがカマトトぶってんのが目障りだっただけさ。」

「ふ〜ん？ほんとお？」

「っ……面倒くさい餓鬼だね！

そんな事どうでもいいだろ？！

ほら！往くよ！」

今度は「丸嬰」がゆめを追い抜いてさっさと往く。

「あ……待つて！「丸嬰」！

私それより本当は謝りたくて！

熱いお茶かけちゃったでしょ？

火傷とか大丈夫かなって——」

「あ〜〜！うるさいねえ！！

あんなただの湯位で、このあたしが火傷なんてする訳ないだろツ？！

ほらもうそんな詰まんない事どうでもいいから、さっさと早足で帰るよ！

日が暮れちまう！！」

「……照れてる……？」

「……張っ倒すよ。」

あ……そうだ、一つ言っておくけどね。

「鎖葉詩」の名前だけは、間違っても茶屋で口に出すんじゃないよ。

「

「……どうして？」

「……知りたければ言ってみな？」

ぽかんとしたゆめを見る「丸嬰」の瞳に光が走った。

毒針を思わせるひやりとした怪光線。

この瞳をする時の「丸嬰」は、とても怖い存在である事をゆめはそれとなく気づいていた。

「……わかった……。」

納得いかなしながらもゆめはこくりと頷き、「丸嬰」の隣りに並び先を指摘した。

——そうだった……ここを通らないと帰れないんだった。

ゆめは「客死隧道」の前でぴたりと足を止めていた。

そこには先程と変わらない日差しと静けさに満たされていた。

一見すると心穏やかになる光景に見えるそこは、何故かゆめにとってとても息苦しい場所として映っていた。

——さっきまでの楽しい気持ちが一気に冷めちゃった。

ゆめはそつと「丸嬰」の小さな手を握っていた。

「丸嬰」は金色の瞳でちらりとゆめを一瞥しただけで、無理にその手を振り払おうとはしなかった。

「往くよ……。下向いてしゃべんじやないよ。」

それだけ言つと「丸嬰」はしっかりとゆめの手を握り締め、竹林の中へと足を踏み入れた。

帰りの「客死隧道」は、急な登り坂になっていた。

足元だけを見つめているゆめにとって、それは永遠のような長さに感じられた。

何と言う事はない苔むしたぼろぼろの石畳を眺めながら、何とも居心地の悪いその竹林の中を、重い足取りでゆめは「丸嬰」と共に進んでいった。

急な坂道とその不穏な気持ちは、自然ゆめの息を上がらせた。

それに合わせて芦の茂みがざわめいているような錯覚に囚われた。

気配はない。けれど動きを感じるそれ。

微かに芦や竹の葉が奏でる音は風に合わせてのものではない。

——客死した亡霊が動いてるんだ……。

ゆめはじつとりと汗を掻いていた。

——早く終わって早く終わって早く……ッ！！

永遠のように思われた隧道は、終わりを見せた。
夕暮れ染まる連なる丘の群れが視界を満たす。

「大丈夫かい？」

ゆめは「丸嬰」に言われるまで、自分がその場で膝をついている事にも気づかなかった。

「あ……。」

言の葉を口にした途端、目の前の地面に滴がぱたりと落ちて散る。
そんなゆめを「丸嬰」は、少し思案顔で眺め呟いていた。

「どうやら、ここはゆめと相性が良すぎるみたいだねえ……。」
「っ……、……。」

——相性なんか全然良くないッ！

ゆめは「丸嬰」にそうとなりつけたかったが、どうした訳かひどく疲労してしまいその言葉を発する事が出来なかった。

「やれやれ……これじゃ日が暮れちまっ……。」
「丸嬰」が浅く溜息をつく。

ゆめの視界が暗くなった。

顔の先にはゆめとさほど変わらぬ、小さな「丸嬰」の背中がある。

「丸嬰」が後ろに手をまわし、ぐいっとなかりにゆめの手を引っ張りあげる。

ゆめの身体は、「丸嬰」の身体の上におぶさった。

「……つしょ。」

「丸嬰」がとんとんと勢いをつけて、ゆめのひざ裏にその両の手を通して立ち上がる。

その様はまるで大の大人が小さな子供を背負うかのように、軽やかなものであった。

「丸嬰」はそのままさくさくと歩き始める。

ゆめは「丸嬰」のその背中と腕の何処にも力を入れた様子がないのに、少し驚きを感じていた。

「歩けるようになったら言いな。」

「……うん。」

「丸嬰」の小さな背中中は、思いのほか安定し、丘を越えている事を全く感じさせない程、揺れを感じる事がなかった。

——「丸嬰」って変なの……。

ゆめはぼんやりと「丸嬰」を感じていた。

一見乞食の様に薄汚れて汚いその髪や衣服は、日溜りと質の良い黒土のような香りを漂わせている。

時にひどく意地悪で残酷な一面を見せる事もあると思えば、先程の夫人のやり取りや今の様に優しい一面を見せる事もある。

その小さな背中中は、とても温かい。

「……「丸嬰」って、……温かい……。」

ゆめはそれだけぼそりと呟くと、まるで大地に包まれているかのような安心感に、すうすうと寝息を立ててしまっていた。

丘の上を一定の速さで動いていた影法師がその長い尾を引いてぴたりと止まる。

一陣の風が丘の草をさらさらとなでていく。

「……そんな言葉は欲しくないね……。」

常にない大人の女性の様な「丸嬰」のその声音は、風と共に彼方へと流れていった。

第一章 第四節

第四節

—

「——でねでねでね！」

歩つてたら目の前にいきなり大きな扉が現れてね！

その両端からこうぴゅーんって鉄の柱がね！！

それで壁なんだって！びっくりしちゃった！

変だけどすごく綺麗なの！！」

ゆめは、その日団樂だんらんの席で、昼間自分が体験した事を口弁師のごとくぺらぺらと語っていた。

皆はまだ食事の最中である。

ゆめは「露歩きつゆある」や「とばねき」におしゃべりで箸はしの進まない事をたしなめられた為、大急ぎで先に食事を済ませたのだ。

今では米粒を一粒のせた頬を紅潮させ、きらきらと瞳を輝かせておしゃべりに花を咲かせている。

「全く……人の背中で茶屋までぐっすり眠りこけてたもんだから、すっかり元気になっちまってるよ。」

「丸嬰まるえい」は胡坐あぐらをかいた太ももに片肘をついて、わずらわしそうに湯をしばいた。

「じくろつさま。」

「悶伽注あか（つぐ）」がその隣で、全く心の色を映さない笑顔をその顔面に浮かべながら、「丸嬰」の湯呑にお湯を継ぎ足している。

「露歩き」は静かに、「とばねき」は興味深げに、「くるり」はぼんやりと、「さき」は胡散臭そうな顔をしてゆめの話に耳を傾けていた。

「——で、その人が何だかいやらしくて素敵なおく。」

ゆめはここぞとばかりに「鎖葉詩」について、説明をした。和装と亜装を混ぜた奇異な装い、そして自分に優しく接してくれた事。

それはゆめが今まで触れた事のない優しさであつた。不躱ないやらしさとは少し違う、女性として見ながら品良く接する仕草。

いやらしいのが素敵とは何だという顔を皆していたが、「紳士」という言葉がない世界で産まれ育つたゆめには、それを表現する言葉がそれ以外に思い浮かばなかった。

他にもゆめは「墮烏苑」の館の内部についても覚えていた限りの事を事細かに説明した。

鯉の扉、朱塗りの燭台、瑪瑙の壁、極楽蝶の籠、そしてその奥に腰かける夫人の事。

「へえ！天人なのかい？その人は！珍しいねえ！！」

「とばねき」は、素直に驚きを見せた。

その驚きが嬉しくて、ゆめはさらにそこでの会話についても事細かにおしゃべりした。

勿論「丸嬰」にお茶をぶっかける一件についても……。

そこに居る皆がながしかの笑いを示した。

「丸嬰」がまたちつと舌打ちをして、湯をしばく。

ゆめも笑いながらその時の「丸嬰」の様子を詳しく話した。

「本当！すつとしちゃった！

で、そこにいる皆もやつぱり笑っちゃって。

「丸嬰」は夫人の髪の毛引つ張って怒っちゃって……あ、夫人は髪が長いから全然痛くなさそうににこにこ笑ってるの……それで「鎖葉——」

ゆめは無意識に「鎖葉詩」の名前を呟きかけていた。

けれどそれはふいに止められていた。

「丸嬰」がゆめの紅潮した頬に指先を押し付ける。

ゆめが何事かと「丸嬰」の方に向き直ろうとすると、その指先はそのままゆめ唇に触れ、尖った爪先が鼻の下肉に触れていた。

「米粒付いてるよ。」

そう言つて「丸嬰」は指先で頬から導いてきた米粒を、ゆめの口の中にそつと押しいれていた。

——「鎖葉詩」の名前だけは、間違つても茶屋で口に出すんじゃないよ。

「あ……。」

——そうだった……危ない……今私言っちゃいそうだった。

「ありがとう……。」

ゆめは一粒の米を噛み下すと、また「墮烏苑」での出来事についておしゃべりを続けていた。

その夜、ゆめは布団の中で音を聞いた。

それが夢だったのか、現^{うつ}だったのか、よくわからない。

ゆめは枕元の床を鳴らすその音を聞いていた。

まるで誰かの足音のような音であった。

けれどそれを足音と言っていていいものか、ゆめには少しわからなかった。

草鞋^{わらじ}とも裸足とも下駄とも違うひどく硬質な音。

ゆめはしばらくそれが自分の枕元を行き来して鳴らす音に耳を傾けていた。

日の登る頃にはその音も止み、ゆめもその事をすっかり忘れてしまっていた。

その翌日、ゆめと「丸嬰」はまた共に「墮烏苑」へと出かけて行った。

「あゝ、たぶん昼前には向こうに着くから弁当はいいよ。」

「丸嬰」は弁当の準備を始めていた「關伽注」にそれだけいうと、さつさと茶屋から出て行ってしまうていた。

「本当にいいの？「丸嬰」！」

あたふたとゆめはその後を追いかける。

「いいんだよ。」

「丸嬰」はわずかに振り返り、されど歩きながらそれに答えていた。ゆめはそつと、その「丸嬰」の隣りに並ぶ。

朝日はすでに温もりを帯びて、ゆめの周りを優しく包み込んでいる。「いいって…お昼前なんて無理だよ。」

昨日全然遅かったじゃない。」

「昨日は昨日だろ？
今日は今日さ。」

「え……？」

だから昨日の事じゃない？」

「やれやれ……」

すっかり貪主どんすの宴ぼけしてるみたいだねえ…。

良いかい？ゆめ。

冥獄は昨日と今日じゃ全然違う。

貪主の御殿みたいな何も変わらない所はまれなんだよ。」

「……わかんないよ。」

「だから、それは今からわかるよ。

きつと昼前には夫人の所に着ける。」

「ふうん……」

(…そんなの絶対無理だよ。)

ほとんど「丸嬰」の言葉を信じていなかったゆめであったが、結局「丸嬰」の言が正しかった事をほんの数刻のちに知る事となった。

「……わかったかい？」

「………うそ。」

ゆめは目を疑った。

すでに目の前にあの「客死隧道きやくしすいどう」の入口が忽然と現われていた。

明らかに昨日より越えた丘の数は少なかった。

決して早足をしていた訳ではない。

しかし結果として目の前に隧道は口を開けていた。

「さっ……早く往こうか。」

「丸嬰」はしっかりとゆめの手を握り、静かな竹林の中へと下りていった。

「なんで……！？

絶対おかしいよ！！

昨日より全然歩ってないじゃん！」

「客死隧道」を下り終えると、ゆめは早速「丸嬰」に尋ねていた。背中にうつすらと汗をかいている。

どうしようもない焦燥感を与える隧道は、やはり気分の良い所ではなかったが、下りは登りの時程苦しくない事をゆめは知った。

そして気配亡き死人のざわめきも、登りの時程気になるものではない事を知った。

どうしてだろうとゆめは疑問に思ったが、それよりも先程から疑問に感じていた事を「丸嬰」に尋ねていた。

「昨日言っただろ？」

「道が呼んでる。」って……。

それが昨日より強くなったからね。
だから早いんだよ。」

「え……でも、じゃあなんで強くなったの？」

「ゆめにもこのこと「縁」^{えにし}が出来たからだよ。」

「えにし……・「くるり」とか「さき」とかと同じあれ？」

「そう……それさ。」

お前は夫人に招かれた。

招かれて見て触れてそのものを口にした。
だからもうすっかり縁が出来たんだよ。」

「丸嬰」は頭の後ろに手を組みながら純白の夜空に視線を向けた。
ゆめも異質な空に瞳を泳がせた。

紅玉の欠片を散りばめたかのような星空は美しかったが、尋常でないその景色は少しゆめに恐怖を与えた。

「冥獄はね、とにかく「縁」が物を言うんだよ。
ここはものすごく広い。」

「縁」があればある程世界が広がる。

でも「縁」を得るのは、実は意外と大変なんだ。

この世界を条件無しで全部行き来してる奴は、たぶんほとんどいない。」

「……「丸嬰」は行けるの?」

「ゆめ」は白夜の闇から隣りを往く「丸嬰」に瞳を向けた。

「丸嬰」はこちらを見ていない。

野性の獣のような孤独の影がその幼い顔に広がりを見せている。

「……行けない。」

「行けないの?」

「「の?」ってお前、当たり前だろ?」

「……当たり前なの?」

「当たり前なんだよ。」

はつきり言ってそんな奴、神様みたいなもんさ。」

「ふうん。」

「そういう条件無しな奴を見た事はあるけどね。」

「あるの?! 神様に??」

「どんな人だった?」

「……そうだね、何かすごい必死な奴だったねえ……。」

「必死??」

「そう、どうしようもないって感じさ。」

世の中何でも掴めるくせにそれが何にも見えてなくて、もう不安でたまらないって感じ。

あれはひどい惨めだったねえ。」

気づけば目の前に古木の門がそびえていた。

両端からゆらゆらと鉄の柵が生えそろつた。

「丸嬰」はよつと勢いをつけて門を蹴り登り、呼び鈴の紐に飛びついていた。

しかし昨日の様に透る鈴の音が響く事はなかった。

紐は何の抵抗も見せず、音も立てずに千切れていた。

「つとあ……！」

「丸嬰」は千切れた紐を握つたまま地面に落下した。

しかし獣のようにくるりと宙で体勢を整えると、すとりと綺麗に地面に着地していた。

「大丈夫？「丸嬰」！」

ゆめはてつとしゃがんでいる「丸嬰」に近づいた。

ゆめが近づいてみると、不思議な事に「丸嬰」は千切れた紐をどこにも持つてはいなかった。

「あれ……今、紐は……？」

「な？」

言つたとおりだろ？」

「え……？」

驚くゆめの前で「丸嬰」がすくりと立ち上がる。

「丸嬰」は軽く膝の辺りを払うと、尖った耳をわずかに動かしゆめを振り向いて呟いていた。

「昨日と今日はもう違つてさ。」

その言葉は、ゆめの心の知らない何かを深く傷つけた。

叫んでみても、「墮烏苑」から誰も出てくる事はなかった。昨日も人気はなかったが、それ以上に気配がほとんど感じられなかった。

——何だろう……目の前に景色があるのに空みたいに見つ白に何も感じない。

「ゆめっ！こつちこつち！！」

ゆめがぼんやり古木の門を見つめていると、「丸嬰」が少し離れた所からゆめを呼ばわった。

見れば「丸嬰」が鉄の柵の中から、こちらに手招きしている。幼女とはいえ、それは人を通す程の隙間は空いていなかった。それにもかかわらず「丸嬰」はすでに中に入っている。

「えッ？「丸嬰」！いつの間に！！何処から入ったのよ？」

ゆめは「丸嬰」のいる柵の前まで移動した。

「丸嬰」はにやにやと笑っている。

それはいつものいたずらな笑みだった。

「勿論ここからさ。」

そついうや「丸嬰」はそのまま鉄の柵に顔を突き出した。

「ひゃっ？！…………ええ？！ちよつと何それ！！」

ゆめはその不気味な光景に目を見開き、後ずさりした。

「丸嬰」はそんなゆめの表情を眺めてにんまりしている。

「丸嬰」の突き出した顔は、鉄の柵にぶつかる事はなかった。

その顔はそのまま柵の外へと突きぬけ、まるで脳天から顎に鉄の棒が刺さっているかのような状態になっている。

「うそお……え……気持ち悪い……！」

痛くないの？「丸嬰」。

「痛くないよ。ほらッ！」

「えッ……やッ……！」

「丸嬰」はゆめの手を掴み、さつと柵の中へと引きずり込んでいた。突如迫る鉄の柵に、ゆめは反射的に瞳を閉じていた。

明らかに柵を越えた位置に顔がある事はわかるのに、あるべき衝撃が訪れない。

ゆめはそつと瞳を開けていた。

「うわ……やだあ……何これ……。」

痛みは全然なかった。

しかしゆめのちょうど胸元辺りに、鉄の棒が突き刺さっているかのように見える状態になっていた。

どうにも見た目が気持ち悪くてたまらないので、ゆめはそのまま柵の中へと体を押し込んでいた。

やはり痛みは感じなかった。

しかし振り返れば見るからに、冷たく硬そうな鉄の柵が並んでいる。けれどゆめの体は柵の内側へと移動していた。

「どういう事？」

ゆめはすつと柵に手を伸ばしていた。

指先は空をさ迷うように、するりと鉄をすり抜けていく。

ゆめに見える世界は、世界として全く存在していなかった。

「これ偽物だったの？」

ゆめは隣りにたたずむ「丸嬰」に問いかけた。

「丸嬰」は鋭利な硝子の植え込みに視線を落とす。

植え込みに堕ちる白夜の闇が、「丸嬰」のその面ざしを仄暗く虚ろに照らしていた。

「昨日は一応本物だったよ。でも——」

「「丸嬰」ッ!！」

「丸嬰」はゆめの目の前で、その鋭利な硝子の植え込みに拳を振るっていた。

その重く鋭い輝きに反して、「丸嬰」の小さな拳はするりと空を描いていた。

「今日は本物じゃないって事さ。」

鋭利な庭をゆめと「丸嬰」はまっすぐ進む。

草を踏みしめているはずなのに、まるで平坦な世界を歩くかのように何も伝わるものが無い。

少し離れた所に館へと続く石畳が墮鳥の木の紐と共にうつすら見える。

けれどもいつまでそちらを眺めていても、墮鳥の木が立ちあがる事はなかった。

——見えてるのに存在しないのがこんなに怖いなんて……。

「「丸嬰」……何か怖い……。」

「だろうね……。」

「「丸嬰」は怖くないの？」

「別に？……結構慣れてるからね、」

「慣れてるの？」

「……夫人との付き合いは長いからね。」

「……これ、夫人のせいなの？」

「いや、ゆめのせいだよ。」

「丸嬰」の鋭く走らせた視線の厳しさにゆめはぴたりと足をとめた。

「私………？」

——なんで………？私、何もしてない……。

「丸嬰」の瞳がぎらりと光る。

ゆめはこの瞳が嫌いだった。

「極楽貪主^{ごくらくくんとす}」とはまた異なる、人ならぬものの放つ邪悪な眼差し。

「丸嬰」のそれは獠猛^{どうもう}な獣のそれに、理性ある邪な者^{よこしま}だけが持つ熱を帯びた残忍さがない交ぜになっていた。

つまり非常に達が悪い。

——絶対「丸嬰」………悪い事たくらんでる……。

たぶん私がすごく嫌になる事考えてる……。

「ほら、往くよ。」

けれど「丸嬰」の冷めた声にゆめは抗う事が出来なかった。

「丸嬰」に差し出された手を躊躇^{ちゅうちゆ}なく、むしろ望むかのように強く握り返していた。

「丸嬰」が意地悪くにやりと笑う。

「……………」

ゆめは何も言い返す事が出来なかった。

何も無い不安から救われる為に、ゆめは恐ろしいけれど確かに存在する「丸嬰」の手に縋る以外に術を見いだせなかったのだから。

三

「夫人ッ！」

薄茶色の泥水のように曇った硝子格子の観音扉を開けると、夫人がそこにいた。

意外と長身な夫人が、すらりと柳の様にしなやかに佇んでいる。

その姿は昨日と変わらず神々しかった。

その傍らには、すっかり地面に叩きつけられた巨大な燭台が散らばっていた。

「夫人……これ、どうしたの？」

ゆめはおろおろと夫人に駆け寄った。

その後を、「丸嬰」がゆつくりとぺたぺた音を鳴らして近づいていく。

夫人は、やんわりと微笑んでいた。

しかしその顔には、何処となく悲しみがにじんでいる。

夫人は、足下の燭台にそつと指を指示していた。

「ッ……………」
「鎖葉詩」ッ！」

夫人のその指の先には、「鎖葉詩」がいた。

髪を乱し、弱弱しく地面にはいつくばる「鎖葉詩」のその身体の半分が燭台の瓦礫がれきの中に埋もれている。

「あゝあ、守るだか何だとか言っというてざまあないね。」

「「鎖葉詩」は私を守ってこうなったのです。」

「へえっ！偉い偉い。」

「ゆめ、手伝つて下さいませ。」

「うんッ……！」

せせら笑う「丸嬰」を無視して、夫人とゆめが「鎖葉詩」の救助に向かう。

ゆめは「鎖葉詩」に覆いかぶさる瓦礫の山に手を伸ばした。
しかしその手は空を切る。

何度も何度も手を伸ばしても空を切る。

「どうしてッ？何でッ？？」

「ゆめ……それは。」

「う……ゆめ……お嬢様？」

「「鎖葉詩」ッ！」

ゆめは膝をつき、「鎖葉詩」の顔を覗き見た。

その上品に落ち着いた顔が弱弱しくゆめに向く。

その顔に眼鏡はない。きつと衝撃で何処かに飛ばされてしまったのだろう。

わずかに朱を走らせる鳶色とびの瞳が直接ゆめを捉えている。

「「鎖葉詩」……。」

心に迫る思いにゆめは涙ぐんでいた。

「待ってて！今助けるからねッ！」

もう大丈夫だからねッ！」

ゆめはまた瓦礫がれきに手を伸ばす。

しかしその手はやはり空を泳いだ。

その手をそつと別の手が優しく包み込む。
しつとりと柔らかい、慈愛に満ちた夫人の手だった。

「夫人ッ……うん。」

「泣かないで、ゆめ。」

貴女がいれば「鎖葉詩」はきつと助けられますから。」

「でも……でもッ……全然掴めなくてッ……」

これじゃ、これじゃ全然「鎖葉詩」がッ……」

「大丈夫です。」

さつ……一緒に「鎖葉詩」の手を握って下さいませ。」

「……はい……ッ……」

「鎖葉詩」の投げ出された右手をゆめが、左手を夫人が両の手で握っていた。

「夫人……「鎖葉詩」を引っ張るの？」

「そうです。」

「……でもッ……それじゃあ「鎖葉詩」挟まってるのに痛いよ。」

体が千切れちゃうよッ！」

ゆめは絶望的に広がる朱塗りの燭台の小山を見上げた。

それはゆめの体をはるかにしのぐ高さを見せていた。

「大丈夫。」

この燭台は幻です。

決して触る事は出来なかったでしょう？

きちんとそれを想えば大丈夫。

ゆめの手が燭台をすり抜けた様に、「鎖葉詩」の体がすり抜ける事を思い描いて？」

「……うん……」

「何か良い姿だねえ……」

あんたが下男の手握って膝ついてるってのは。」

「丸嬰」……後できちんと伺いますからね？」

「おっと……！」

「夫人？」

「大丈夫です。」

さっ……同時にいきますよ？」

—— 大丈夫…… 大丈夫…… 「鎖葉詩」の体はすり抜けるんだ……。

ゆめはそれを必死に思い描いた。

大の男を引つ張るのは、とても力がある。

夫人とゆめは少しずつゆっくりゆっくりと、「鎖葉詩」の体を引きずった。

しかしその重さは、ゆめが思い描いた通り、「鎖葉詩」の重さしかないように感じられた。

その証の様に、「鎖葉詩」の衣服は瓦礫に引つ張られる様子を見せず、徐々に姿を見せていく。

「はい、2人共お疲れ様あ。」

すぐそばの床の上で胡坐をかいている「丸嬰」がぱちぱちと手を叩く。

ゆめは肩で息をしながら、「鎖葉詩」の足がきちんと瓦礫の中から出ている事を確認するとぺたりと座り込んでいた。

隣りで膝をついている夫人を見ると、全然疲れた様子はない。まるで息を乱さず温かい眼差しで「鎖葉詩」を見つめていた。

「申し訳ございません、奥様。」

「いえ……貴方のせいではないわ、「鎖葉詩」。
立てますか？」

「いえ……足の感覚が全くありませんので……。」

「えッ……！」

「まあ……困りましたねえ。」

夫人はあまり困っている様子を見せず、顎先にわずか指先を当てて思案している。

その透き通る瞳が「丸嬰」へと流れていた。

「少し……悪さが過ぎましてよ、「丸嬰」。」

「あたしかい？あたし何もしてないじゃないかあ。」

「何もしてないから悪いのでしょうか？」

「……ふふん。」

「丸嬰」が鼻で笑う。その顔に全く罪悪感や浮かんではなかった。

「相変わらず困った子ね、貴女は。」

そういうと夫人はゆめの方へと視線を流した。

ゆめはゆっくり息を整えながら、そんな夫人の瞳に答える。

「「丸嬰」が何も教えなかったのね。」

「夫人……？」

「あたしは言っただよ？」

間違っても「鎖葉詩」の名前は向こうで言っただよってさあ。
「

「「丸嬰」、それは最低限の事でしょう？」

「ははん！」

「本当に……困った子……。」

——「鎖葉詩」の名前は言うなって……それがどうして……。

「夫人……私、何しちゃったの？」

「墮烏苑」のこの不穩、そして「鎖葉詩」のこの惨状、罪の在りか

は見えなかったが、ゆめは何となく自分が致命的な罪を犯した事を理解した。

先程とは違う心の痛みからはらはらと涙がこぼれおちる。それを抑える事は幼いゆめにはとても出来なかった。

しまいには、わあわあと声を上げて泣いていた。

夫人が困った顔をしてそんなゆめをそっと抱きしめ、その背を優しくなでさする。

「ゆめは何も悪くないわ。

ごめんなさい、昨日私がお話しておくべきだったわ。

「丸嬰」がここまで意地悪するとは思わなかったから。」

「あたしのせいかい？」

「貴女のせいです。」

夫人がにっこりと「丸嬰」に微笑む。

「丸嬰」が少し驚いた。が、すぐにちつと舌を鳴らしてそっぽを向いていた。

「はつきり言いやがったね……。」

「貴女がはつきり言わせたのでしょうか？」

「自業自得です。」

———「すごいな……夫人。

「丸嬰」を丸めこんでる。

激しく感情を溢れさせる自分とは別の、冷静な部分のゆめはそんな事をぼんやりと考えていた。

次第にゆめを支配する激情も夫人の腕の中の優しさに溶かされ、ゆめは落ち着きを取り戻し始めていた。

———「すごく……落ち着く……。」

「とばねき」や「露歩き」の腕の中にいるみたい……。」

ゆめはまどろみかけていた。
そんなゆめの頭上から、子守唄を口ずさむような優しい音色の夫人の
声が降り注ぐ。

「ひどく驚かせてしまったわね。
ごめんなさい、ゆめ。

でも何も怖い事なんてないの。

ここは全て私の作った幻なのよ。」

「まぼろし……？」

「そう……幻。

私はね、ゆめ。

特別な天人の血を引く為に、特別な力があるの。」

「……・力？」

「そう……力。

無から有を創り出す力・

世界を創る力。」

——それじゃまるで……夫人は……

「かみさま……？」

ゆめは涙に洗われた無垢の瞳を夫人に向けていた。
夫人はやはり穏やかに慈愛を見せて微笑んでいる。
その銀系に輝く金髪がまるで後光のように美しい。
どう見てもそれは女神の姿であつた。

「神様にはなれませんわ。

私は鬼子ですもの。」

夫人は、恥じらう乙女のように微笑みかける。
そこに鬼の影はどこにも見えない。

どうしてこんなに神々しい人がこんな所にいるのか、ゆめには全く理解できなかった。

「その証に私の力は完璧ではないの。
無から有を創りだせてもそれは有限のもの。
この世界のように無限のものにはならないの。」

「ゆう……げん……？」

「難しいかしら？」

「そうね……ではこうしましょう。」

ゆめ、昨日戻られてからこの苑の事をあちらでお話しされたでしょう？
「う？」

「……はい。」

「この世界のものでしたら、お話している間も、そのものはきちんとそこに存在しています。」

例えばゆめがお茶屋さんの事をお話しされている間も、お茶屋さんはきつとお茶屋さんとしてあちらにあるでしょう。」

「はい。」

「……けれどこの苑のものは全て存在している事が出来ないの。
ここ以外の別の世界でその言葉が語られるとその分だけこの世界
のものが分かれていってしまうのよ。」

「分かれる……？」

「そう、分かれていってしまう。」

ですから今この苑のものは見えるけれど形はないの。
あちらに言の葉がまだ残ってしまっているから。

「鎖葉詩」が立ち上がる事が出来ないのもそれと同じ事なのよ。」

「立てないのが……同じ……？」

「そう……そしてもしも「鎖葉詩」の名前、「まことな真名」をあちらで発

していたら、「鎖葉詩」は完全にあちらに姿を現していたわ。」
「あ……………」

—— 昨日の夜の変な音…………。
草履でも裸足でも下駄でもない不思議な音。
あれは、もしかして…………。

—— 「鎖葉詩」の足…………音…………？

ゆめは夫人の腕の中で、地面に未だうつぶせに横たわる「鎖葉詩」の方を見た。

「鎖葉詩」は起き上がる事も出来ず、哀しげな瞳をゆめに向けている。

ゆめはその瞳の意味に気付いてしまった。

—— 詰まらない所でしょう？

—— そうだ…………昨日墮鳥の木の所でちょうど「鎖葉詩」こんな目してた。

この館は全部まやかしだって…詰まらない所だって…………。
でも…………じゃあ…………「鎖葉詩」は……………

—— 「鎖葉詩」も…………まやかしなの？

ゆめは「鎖葉詩」をじっと見つめた。
その瞳の奥から感じる意思の光も、苦痛を走らせる面ざしも、とて

も幻のものには見えなかった。

「こんなに……こんなに苦しんでるのに……嘘なの？」

その一言に、誰も答えを返すものはいなかった。

ゆめはただただ「鎖葉詩」を見つめて涙と共に言葉をこぼした。

「こんなに……痛そうで……苦しそうで……哀しそうで、それなのに嘘なの？」

ゆめは夫人の腕の中から「鎖葉詩」に向けて手を伸ばしていた。

「鎖葉詩」の指先にゆめの幼い指が重なる。

そう……重なりすぎる程に重なっていた。

ゆめの指先が冷たい地面を感じている。

「申し訳ございません……。」

「鎖葉詩」が深い影を見せて静かに目を閉じた。

「……ッ！」

そんな……さっきまで触れたよオッ……！」

取り乱すゆめを夫人はそっと包んでいた。

優しく諭すようにゆめに囁く。

「それはゆめが先程まで「鎖葉詩」を幻だと思っていたから。

そして私も「鎖葉詩」に触れる事を望んでいたから。

「鎖葉詩」が別れている二つの世界の存在が、在る事を信じていたから触れる事が出来たの。

でも今はもう――」

「そんなッ……じゃあ「鎖葉詩」はこれからずっと歩けないの？

見えてるのに？ここにいるんだよ？？

なのにずっと触れないの？

苦しい顔してるの？

そんな……そんなの……」

—— かわいそうだよ………。

「大丈夫よ、ゆめ。」

あちらの言の葉がなくなれば「鎖葉詩」もこの苑も昨日の様に戻りますわ。」

「どうすれば……無くなるの？」

「それはあちらでこちらの事を話さなければいずれ……。」

—— 話さなければ………。

そっか………ここのを話しちゃいけなかったんだ。
話しちゃったからこうなったんだ。

「う………わああああああああああん！！」

ゆめは夫人の腕の中で声も涙も枯れ果てるまで泣いた。

ゆめがまだ死を身近に感じるより数千年程前の事、ゆめは世界が不変でない事、そして儚い事の意味を深く知った。

第二章 第一節

第二章

第一節

—

「本当に上手だねえ。ゆかちゃんは鏡も見ないでよくお化粧出来るよ。どうやってるの？教えてよ。」

「えへへわかんない。」

でも何かわかるんだよね。自分の顔がどうなってるのか。すごいでしょ？」

「うん、すごいすごいよ。ゆかちゃんは。」

やっぱり良いなあ好きだなあ。

私のお嫁さんになっておくれよ。」

「えゝまたそれだゝ。やだよ、私。」

私「露歩つゆあるき」が好きなんだから。」

「そんなに良いかなあ。あの人。」

私の方が素敵だと思うけどなあ。」

「素敵って……中身って事？」

「中身も勿論だけど、見た目も。」

「え？」

「勿論こうなる前の話だけだね。」

そう言つてゆめの目の前の青年、「**霆燕**」はその砕けた顎の代わりに嵌めこまれた鋼の顎を手の甲に載せて隻眼の瞳でにつこりと微笑んだ。

「**霆燕**」の顔の中で生まれたままの形であるのはこの瞳だけである。女の様に長い睫毛に縁取られた銀色の瞳には、確かに美しいものがある。

「あゝ、男に迫られてそうなった位だから綺麗だったんだよね、やつぱり。」

「ほつとけ。」

「**霆燕**」は、その場ではらりと衣を脱いでいた。

その様はまるで蕾が花開くようである。

幾重もの艶やかな衣の中から現れた「**霆燕**」の肌は白く輝き滑らかで、思わず息を飲む程であった。

「やだッ！いきなり脱がないでよ！」

「何恥ずかしがつてんの？ゆかちゃん。」

恥ずかしがるものが見えてないんだからいいじゃないの。」

「でも、裸は裸じゃん。」

「そう言つてちらちら見るゆかちゃんはどうなんだろ。」

「ッ！」

ゆめは手近の化粧箱を「**霆燕**」に向けて投げつけていた。

「**霆燕**」はひらりとそれを交わす。

「**霆燕**」はそこから一步も動いていなかった。

一步も歩く事なく数歩離れた所に上体を移動している。

「霏燕」の半身は、七色に輝く銀の鱗で覆われていた。それは緩やかにとぐろを巻き、呼吸するかのようにうねうねと動いている。

背中から走る純白の羽尾ひれがふわふわと揺れていた。

「霏燕」は普段それを二本の足に擬態して隠していた。

彼はこの御殿で「極楽貪主」から舞手最高の栄誉「蝶華鳥」の名を下賜された舞姫の一人であった。

そう、男装で舞う舞手ではあったが、あくまで扱いは「姫」であった。

彼は体の擬態だけでなく、性別も偽っていたのである。

勿論「極楽貪主」はこの事を知っている。

それは「霏燕」の望みであった。

「極楽貪主」はその望みを「興がある」と嬉々として受け入れていたのである。

「どうして姫になってるの？」

「男に興味ない主に仕える身で、男に見られるのが嫌だったから。」

「…？普通反対じゃないの？」

「普通反対じゃないの。」

そういう主に仕える綺麗で無力な男は、他の臣下に慰み者にされるんだから。

こういう場合、主の寵姫の方が断然安全なんだよ。」

以前ゆめの疑問に「霏燕」はそう答えていた。

「ま……もうそんな心配はあまりなさそうだけどね。念のため。」
潰れた臉から顎にかけて手を滑らせながら「霏燕」はそう付け加えていた。

「霏燕」の顔は前の主の客人になされたものであった。

「霆燕」は、空気を震わせ鬼気迫る力強い舞の他に、伸びやかで女性的な美声とそれでいて凜とした涼やかな面ざしで人々を魅了していたという。

その日、主に持て成された客人もいたく魅了されたらしい。

そして「霆燕」は関係を迫られた。

「霆燕」はそれを拒んだ。

「霆燕」は半身を蛇身に変えそれを示した。

それが客人の逆鱗に触れてしまった。

「霆燕」は、名だたる武人であった客人の渾身の一撃で、顎は砕け鼻と片目は吹き飛ばされてしまったのである。

前の主はそんな醜く砕けた「霆燕」に興味を失った。

そしてただ同然で、「極楽貪主」に譲り渡されたのである。

人々に裏切られつくした「霆燕」は、ここで常に人を近付けない孤独の気を放っていた。

普段は無機質な面に隠されたその醜い顔としゃがれた声、何より以前にも増して怨念を孕んだ凄味のある舞に、誰もが近寄る事を恐れていた。

しかしゆめは違っていた。

勿論怖いとは思った。

けれどゆめは自分が「極楽貪主」の「お気に入り」である事を知っていた。

いくら怖い舞姫とはいっても、自分を傷つけはしないだろう。

ゆめはこれまで話に聞くだけで、噂の「舞姫」の素顔を見た事が無かったのである。

という訳で、誰も普段近づかない「霊燕」の住む一郭に忍び込み、そこで今の様に衣を脱いだ「霊燕」の肢体に直面したという次第であった。

その時、「霊燕」は蛇身ではなく足を生やした人体に擬態していた。

「う・…わあゝああん。こわいゝゝおとこおおゝゝ…。」
幼いゆめは、驚きのあまり泣き出してしまっていた。

「ちよっ…待ッ!…私が悪いのか?!」

そんなゆめを見た「霊燕」は、取り乱した。
あまりにゆめが泣いて泣きやまないの、とりあえず蛇身に半身を変えてそれを隠した。

別にゆめは男だから怖かった訳ではない。

予想以上に崩れたその顔に恐怖し、ついでに予想外だった性別を口にしていただけの事である。

はつきり言つて余計怖さを増したその姿はさらにゆめの恐怖に火をつけ、ゆめはわんわんと泣き続けた。

!

清流のせせらぎのような音色に、ゆめはびたりと泣きやんでいた。
目の前で蛇身の「霊燕」がほんと一つ咳払いをしている。

「きれい……今のあなた？」

「うん、幸い喉は潰れなかったから、震わす位なら今でも出来るんだ。」

ゆめはぱちぱちと涙の滴を弾きながら、大きく瞳を見開き目の前の異形の男を見つめていた。

「霊燕」が少し居心地悪そうに身体をよじらせ、一つ残された綺麗な瞳でそんなゆめを見つめ返していた。

「……別に怖くないからさ。」
こうして「霰燕」とゆめの密かな友情は、芽生えていったのであった。

「でも何で私なの？」

「私じゃなくても……ほら……例えば「さき」とかさ。」

「私より全然綺麗だよ？」

「何か最近よく色んな護兵に告白されてるし。」

「「さき」……？」

あゝ「先逝^{さきゆき}」ちゃん？」

んん「先逝」ちゃんねえ……」

「霰燕」はゆめの質問に答えながら、その裸体をするすると部屋の半分を占める深い湯殿の中に沈めていった。

「霰燕」の鱗は、日に一度は綺麗な水をこうして泳がないといけならしい。

そうしないと身体の具合が悪くなり、病気にかかってしまうそうなのだ。

その為、「霰燕」の部屋には「浮魂癒^{ふたまゆ}」の湯が常に引かれていた。この事も御殿のほとんどの者が知らなかった。

「霰燕」はまるで魚の様にすいすいと湯の中に身体を走らせる。

孤を描き、一跳ねし、また空中で孤を描くと盛大に飛沫を散らせて湯の中へと身を躍らせた。

一呼吸置いて「霰燕」の頭が水面に洗われる。

その肌は、桃色に温かく染まっていた。

「確かにぞくつとする程綺麗だよねえ。」

でもそれって気持ちのいい綺麗じゃないんだよね。」

「どういう事？」

「私が臆病だからなのかなあ。

あの子の綺麗は、私には怖くて駄目なんだよ。

ゆかちゃんは怖くない？」

「霊燕」は下半身の動きだけで水平に泳ぎながら、ゆめにそう投げかけた。

ゆめも、それにうんと頷く。

「確かに……「さき」はちよつと怖いかも。」

「でしょ？」

それにあの子「死人」でしょ？

子供作れないじゃない？

私子供は欲しいから。

やっぱりゆかちゃんが良いんだよね。」

「またそういう事言う。」

「だって言つとかなないと、誰かに先を越されるかもしれないじゃない？」

それは嫌だし悲しいでしょ？

今を別にどうこうとは言わないよ。

私はゆかちゃんが大きくなるまでずっと待つてるから。

私が好きだって事、ずっと覚えていてくれると嬉しいな。」

「ふうん、覚えてるだけだからね。」

「うん、今はそれだけで十分。」

そういうと「霊燕」は優雅に水面を滑っていった。

本当に気持ちよさそうに泳いでいる。

耳をすませば綺麗な鼻歌まで聞こえてきた。

「霊燕」の鼻歌は、ただその音色だけで美しかった。

まるで極楽蝶を間近にしているかのような至福感に満たされる。

ゆめはそつと脱ぎ捨てられた「霊燕」の衣の所まで行くと、その中にすっぽりと収まりころりと横になってその音に耳をすましていた。

「その声、皆が聞いたらきつと「霊燕」の事好きになるのになあ。」
「やだよ。」

怖がられてる位で十分。

下手に好かれても良い事なんてないもの。」

「うゝゝん、そおかなあ。」

「そうなの。」

ゆめはそうは思わなかった。

けれどそれで実際醜く崩れた「霊燕」に、それ以上強く言う事は出来なかった。

「霊燕」はするすると湯殿を滑り、その縁に両手を乗せる。

その醜悪な顔を支えるその手は、そこだけが嘘のように美しく際立っている。

「さ……そろそろお帰り。」

夕餉の時刻はもうすぐだよ？」

「うん……。」

ゆめはのそりと起き上がった。

そつと遠くの床の上を見つめると、そこに先程投げた化粧箱が壊れて中身を散らしている。

「あ！ごめん！壊しちゃった。」

片づけるね。」

「いいよ。そんなの幾らでももらえるし。後で侍女にでもやらせるから。」

あ、大丈夫そうなのは持つていってもいいよ？」

「えッ！本当??」

ゆめはきらきらと瞳を輝かせて「霊燕」の方を向いた。

「霊燕」の瞳が、嬉しそうに柔らかく微笑む。

それは親しみに満ちた光があった。

でも何か、「露歩き」がゆめに向ける優しい瞳とは違う。

ゆめは、少し気恥ずかしくなるのを感じていた。

「ごめんね。」

本当は新品をあげたいんだけど、そうするのはぬし様に申し訳ないから。」

「うん、わかってるよ。」

もらえるだけで嬉しい。」

それに新品なんて持ってたなら、皆にどうしたのって言われちゃうもん。」

ゆめは床に散らばる化粧道具を丁寧に選り分けていった。

そつと袖から可愛い巾着袋を取り出す。

「わあ、可愛いね、それ。」

ゆかちゃん作ったの？」

「ううん、素敵な人からもらったの。」

「素敵な人ツ??」

「女の人だよ。」

すごく素敵な人なの。」

「へえ！誰だろ？」

「……それは、秘密。」

「え……?」

「秘密なの。」

ゆめはそれだけ言うにつこり笑って、「**暉燕**」の部屋を後にしていた。

「おい！待てよッ！」

ゆめは、突然の男の怒声にひっと肩をすくませて、植え込みの中に身をひそめていた。

「霏燕^{しゅうえん}」の部屋からの帰り道、人に見つからないようにと植え込みの中を移動していた時の事であった。それはあと少しで、皆の住まう悲愴^{ひそう}殿の東屋に辿り着くという所で出来事であった。

——まさか、私じゃないよね？

誰かに見つけられたとは思えなかった。随分身体を低くして移動している。

これまで一度も、人に見とがめられた事はなかったはずだ。

「そんな態度取っていいと思ってるのか？」

「離して。」

——「さき」？！

ゆめは聞き覚えのある冷めた声に、そっと茂みの隙間から声のした方を覗き見た。

そこには建物の壁に向かって立つ大柄の男の背中が見える。

その装具を見るに、おそらく護兵なのだろう。

その無骨な手は小さな細く青白い腕を握っていた。

血の気のないその色、そして見える衣の色。

顔は見えなかったが、男と壁の間にいるのは確かに「さき」であった。

——え？……「さき」！！どうしたの？？

ゆめははらはらとその様子を見守っていた。

男が怒声を上げて「さき」に向かって吠えている。

どうやら「さき」は男に告白されたらしい。

けれど「さき」はいつもの冷たさで、そっけなくそれを袖にしたようだ。

それが男の癢に障ったのだろう。

煩わしそうに何度も離してと呟く「さき」の腕を、首を縦に振るまでは頑として離す気配を見せないでいる。

——何、あいつ！最低ッ！

「さき」嫌がつてるのに……。

ゆめはすくりと立ち上がっていた。

茂みがかざりと音を立てる。

驚いた男が、びくりとゆめの方を振り向いていた。

ゆめは構わず大声を上げる。

「助けて「露歩き」い~~~~ッ！！

「さき」が襲われてるよ~~~~ッ！！」

「おまッ……が……ぐッッ！」

ゆめに気を取られた男は、「さき」の腕を離していた。

その間隙に「さき」は男の獲物を奪い、それで膝裏を挫き膝をついた男の首の急所に強烈な一撃を叩きこんでいたのであった。

「ひッ……！」

ゆめは土煙を上げて倒れる大の男に驚き、後ずさりした。と、その背が何かに行きあたる。

見上げるとそれは「露歩き」であつた。

「「露歩き」いゝゝ。」

遠くで「とばねき」が「さき」を探す声が聞こえる。

「くるり」は場所がわかつているのだろぅ。

向こうからまっすぐ駆けてくる姿が小さく見えた。

「大丈夫か？」「さき」。

「露歩き」が「さき」に問いかける。

「さき」はつまらなそうに鞘に収まったままの男の獲物を、地面に叩きつけた。

得物は地面に深く突き立ったまま、倒れずその場で直立している。

「別に。」

「さき」はすたすたと男の体をよけてゆめの方へと近づいて行った。

「「さき」……。」

「有難う、ゆめ。」

お陰で楽に倒せた。」

「う……うん。」

「さき」が他人にはほとんど見せない優しい瞳を、青白い顔の中に浮かばせる。

しかしそれはほんの一瞬だけの事で、すぐまた不幸を刻みつけたか

のような深刻な暗い瞳に戻ると、皆の暮らす東屋に向けて歩き始めていた。

「……にしても、ここまで来ると困ったねえ。「さき」の美貌もとくあえぬし様にお伺いを立ててみるかい？」

夕餉の席で「とばねき」が心配そうに「さき」を窺う。

ちなみに夕餉は御殿内に幾つか点在する台所で作られたもので、ここで暮らす者達は特別な者でない限り、自分たちでそれを取りに行き自分の部屋で食べお膳を元の場所に戻す事になっていた。

「さき」は膳にほとんど手を付けず、すでに箸を戻している。

俯きがちに膳を見て頬に影を落としていた睫毛がゆっくりと持ちあがり、刃物のような怪しい煌めきを放つ瞳が「とばねき」を捉える。幼いながらもすでにその面ざしには艶があり、質素なその装いに反して妖しい華のような危険な美貌を匂わせていた。

——確かにこれは困るよね……。

私だつてどきつとしちゃうもん。

ゆめは隣りに座る「さき」をちらちらと眺めていた。

「別にいい、「とばねき」。

そっちの方が煩わしい。」

「でもこんな事が度々あったらあんたも困るだろう？」

あんたは確かに強いさ。

でもね……あんたは女の子なんだよ。

いつ……間違いがあるか……。」

「間違い……ね……。」

「さき」が口の端を上げてゆっくりと笑んだ。

それはとても挑戦的で暴力的な何とも不気味な笑みであった。

しかしそれは酷く危険である事がわかるのに、抗えない蠱惑的な魅力がにじみ出ていた。

まるで極楽蝶を狂わす「蛾禍^{がくじよ}蝶」の華のように……。

——うん……「さき」のは怖い。

「さき」の綺麗は攻撃する為の綺麗なんだ……。

「靈燕」じゃなくても、これは皆怖いんじゃないかなあ……。

ゆめは、ちらちらとそんな「さき」を眺め、そして「露歩き」に目を向けた。

「露歩き」は膝に腕と箸を持った手を置き、静かな瞳で「さき」をじっと見つめている。

——「露歩き」ってすごいなあ……。

本当のお父さんじゃないのに、私達を大切にしてくれて「さき」の事も全然

そういう目で見ないんだもん。

やっぱり……かっこいいなあ……。

ゆめは娘とは思えない熱い視線で「露歩き」をぼんやりと眺めてしまっていた。

そんなゆめの瞳を「露歩き」が捉え、ゆめがそれに驚くと同時に「露歩き」は「くるり」の方を眺めていた。

ぼんやりとしていた「くるり」が、「露歩き」の視線に気づきその透き通った瞳で「露歩き」を捉えたのを確認すると、「露歩き」は「さき」に視線を向けていた。

「私の側に常にいるというのは……」「さき」には難しいのだろうな。

「

「うん。」

「さき」がそっけなく「露歩き」の質問に答える。

「露歩き」はそんな無愛想な「さき」の態度に慣れたもので、特に表情を変える事もなく静かに次の言葉を紡いでいた。

「ではもし何か助けを覚えた時、ゆめか「くるり」にそれを伝えなさい。」

それは嫌か？

「……嫌じゃない。」

「さき」がそっけなく、けれど納得したというように静かにうなずく。

それを確認すると「露歩き」はゆめと「くるり」に視線を送り二人に向けて言葉を発した。

「二人共、必ずどちらか一人は私の側にいるように。」

それは難しいか？

ゆめは「くるり」に視線を送った。

心がそのまま透けて見えるような「くるり」の瞳の意味を、ゆめははつきり理解出来ていた。

「出来るよ。」

ゆめは「くるり」の分も、「露歩き」に答えていた。

「露歩き」はそれを確認すると腕と箸を持ち上げていた。

「明日から始めよう。」

その「露歩き」の言葉で、「さき」の問題はとりあえず解決を見せた。

「有難う、「露歩き」。じゃあとりあえず明日からそうしてみよう

ね。」

「とばねき」がそれを受けて話をまとめる。

こうして「さき」と「くるり」以外のものが皆、食事を進め始めた。ゆめは思わず笑ってしまいそうになるのを我慢し、お椀で隠しながらせつせと中の煮汁を掻き込んでいた。

—— やったあゝ明日から「露歩き」の側にずっといても良いんだあ。

視線を感じたゆめは、ちらりとそちらへ視線を向ける。

それは「さき」であつた。

不機嫌な顔をしているが決して責めるようなものではない。

ゆめにはそれが穏やかなものである事がよくわかつた。

—— 良かつたね……。

「さき」の暗い瞳は、確かにそうゆめに伝えていた。

三

「そうだね……好きだからだろう。」

ゆめは、意外な「さき」の答えに頬を染めた。

「さき」が不機嫌そうな顔を向ける。

「どうして赤くなるの？気持ち悪い。」

「だっ……だつてだつて、「さき」が私にそういう事言つと思わな

かつたんだもん!!

うわあ~~~~、何かびっくりい。

わあわあ~~~~、すっごい嬉しい。

え~~~~、どうしょあ~~~~!!」

ゆめは両の手を頬に押し当ててきやあきやあと顔を振った。

「さき」が煩わしそうに目の前に広がる小さな池に目を向けた。

ここは「悲愴殿」に近い「慟哭塔」の最下層。

その欄干に寄り掛かりながら、ゆめと「さき」はおしゃべりをして
いた。

ちなみにこの「慟哭塔」は御殿の周囲を見張る為の建物で、一番上
の層には今「露歩き」がその任について周囲を警戒していた。

「うるさいな、もういい?」

「あつ……ごめんごめん、」さき」。

でも嬉しくって……」

ゆめはまだその余韻でにこにことしながら、離れようとする「さき」
を引きとめていた。

ゆめは先日の「さき」の優しさについて尋ねていた。

「さき」は自分が他人に構われる事を極めて嫌うが、同じ位他人に
構う事も嫌っていた。

そんな「さき」がどうして自分の喜ぶ事をしてくれるのか疑問に思
った。

そしてその質問に対して「さき」が返した答えが、先程の意外な言
葉だったのである。

「本当はゆめのような人間は、一番煩わしくて嫌いなはずなだけ
ど……。」

「え~~~~!!酷いッ!」さき」い~~~~。

それを言うなら私もだよ?!「さき」ちょっと怖いんだもん。」
「でも……私はゆめが好きらしい。」

池に反射された木漏れ日が、「さき」の顔をゆらゆらと輝かせている。

黒い艶やかなほつれ毛がその白い頬をくすぐる様に流れていた。

光に照らされて不吉の薄らいだ穏やかな「さき」は、いつもとは違う静かな美しさがあった。

「「縁」の力のせいみたい。

ゆめが喜ぶと安心する。」

「っ……「さき」い……!」

「っ……ゆめ……!」

感極まったゆめは、「さき」に飛びついていた。

「さき」は勿論それを嫌がった。

けれどその抵抗は、大の男を叩き倒した者の力にしては、とても非力なものであった。

「さき」の性質としてそれは振り払うべき煩わしいものであったに違いない。

けれど、今の「さき」を「さき」たらしめる「縁」の絆が、その性を和らげていた。

「さき」はしばらく抵抗を見せていたが、どうにでもすればいいというように、抱きつく「ゆめ」を無視してまた池の煌めきに瞳を落としていた。

——「さき」ってとても冷たい。「くるり」もあまり温かい子じゃないけど「さき」はもっともつと全然冷たい。

でもこうしてぎゅうってすると、ほんの少しだけだけど内側が温か

いのがわかる。

ゆめは「さき」の感触に心を澄ませていた。

おそらく「さき」もゆめの感触に心を澄ませていたに違いない。
ささやかな水面の煌めきが、二人の感覚を研ぎ澄ましていった。

——このろくそくの炎みたいな温かい感じ……「さき」のこの
感じ、大好き。

「ゆめは、温かい。」

「さき」が静かに呟いた。

「「さき」もあつたかいよ。」

ゆめは心地よさそうに呟いていた。

「さき」からはほのかに甘い香木のような香りがする。

それはこうして身体を寄せていなければ気づけないような、ささやかな香りであつた。

一人夕暮れに佇むような、懐かしく切ない想いにさせる不思議な香り。

「私のこの死んだ体が……？」

「さき」が優しくゆめの腕を自分の身体から引き離す。

ゆめはそんな「さき」の腕に自分の手を重ねながら、わずかに首を横に振った。

「うん、「さき」もほんの少しだけあつたかいんだよ。

ろくそくみたいに小さいけど、でもちゃんとあつたかさがあるんだよ。」

「「さき」は気付いてないみたいだけど。」

そう言っただけで「さき」に向かってにつこりと微笑んでいた。
「さき」はぼんやりとした表情で、ゆめを見つめ返していた。
まるで「くるり」のような心静かな面ざしであった。

「そう……。」

それだけというと「さき」は、ゆめの身体から離れ、そつとその細い指先を欄干に載せて、目の前の池を越えて遠く彼方を眺めるようにして固まった。

（「「さき」の温かさは……「さき」の持つてる心の優しさなのかもしれない。）

ゆめは「さき」の横顔を見つめてふとそんな事を考えていた。

「ねえ……「さき」。」

「何？」

「「さき」は誰かを好きになった事ってある？」

「異性の情の事なら、ない。」

「え……！ そうなの？！ 嘘だあ……！！」

「さき」美人なのに……！！」

「美人とかそういう問題……？」

池をなでて温かい風が二人の元へ流れってきた。

その風は「慟哭塔」に当たるとそのまま天空へ消えていった。

「さき」はその流れを追うように空へと顔を向けた。

冥獄のはるかはるかその上に、「さき」の存在した前世が今も在る。

「もしかしたら……。」

「え……？」

ゆめは巻き上げられた髪の毛を整えながら、「さき」の呟きに耳を傾けた。

「さき」の瞳ははるか空高くを見つめている。

その先に何かの想いをたぐるように……。

「もしかしたら、時を重ねていれば、そういう情を抱いたかもしれない者はいた……。」

本当に、たまたまその考えに至ったというように、「さき」は何の感慨も示さず呟いていた。

ゆめは口を開きかけた。

だが、「さき」の次に見せた表情と言葉に、口をつぐんでいた。

「それも随分昔に死んだけど。」

「さき」はまた、その小さな身体に闇をまとい、憑かれた瞳に酷く近寄りがたい不機嫌を匂わせた。

四

——「露歩き」にも……たぶん大切なものがある。

ゆめはそれを何となく知っていた。
幼い頃、ゆめは「露歩き」にそれを人として無邪気に尋ねた事があ

った。

「露歩き」は静かな瞳で、そのような人はいないと告げていた。告げていたけれど、時折見え隠れする「露歩き」の決意のような姿勢は己の為だけのものではないように感じられた。

それが人ではないにしても、確かに何かがある、そう感じさせる姿勢。

静かに、ひた向きに、悟りを目指す苦行人のように黙々と生きる「露歩き」…。

「露歩き」は、自分の目的の為に、ぬし様に従ってそんなぬし様の命だから私達を大切にしてくれてる。少しは、好きになつてくれるかもしれない。けど……

本当に大切なものの為に、大切にしてくれてる…。ただそれだけのような気がする。

聞きたい……でも……

そんな事言われたら嫌だから……怖くて聞けないよ。

「そうだね……「露歩き」は何かの為に頑張ってる。

昔「丸嬰」もそんなような事言ってたよ。」

皆の衣を干すその手を止めて「とばねき」がぼつりと呟いた。

ゆめは昔「とばねき」が「露歩き」の事を好きだった事を知っていた。

けれど、いつの間にやらそうした雰囲気は消えていて、ゆめ達の側に「露歩き」と共にただあるだけの日々が続くようになって随分と

久しい。

「「とばねき」は「露歩き」の事好きだったよね？」

「な……何だい？藪から棒に！！」

ちよっ……よしとくれよ！誰かに聞かれたら恥ずかしいじゃないか！」

「とばねき」は、慌てて干しかけていた「露歩き」の衣を取り落としていた。

生乾きの衣が地面の泥を吸っている。

「ああ！もう！ゆめがいきなり変な事言うから！！」

しかもよりによって「露歩き」のじゃないかあ。勘弁しとくれよ！」

「とばねき」はたつたとまだ泡水を残しておいた盥の所まで行き、せつせと泥を落とし始めた。

「そんなに慌てる事？」

三人に一人は「露歩き」の事好きって皆言うのに」

「そうだけど…私が嫌なんだよ、そういうの。」

「あ……！結構本気で好きだったんだ！」

「ッ……ゆめ！！……はあ……全くこの子は……」

「とばねき」は朱を薄く引いた唇でやんわり微笑むと、赤らんだ両の手で泡を落とした衣をきつく絞りあげた。

「とばねき」はゆめ達がようやくよちよち歩きが出来るようになった頃、ぬし様の命を受けてゆめ達の元へやってきた。

それまでの「とばねき」は下女のような仕事をしていたという。

「とばねき」はこの御殿に住む下男下女の間に産まれた。

つまりこの御殿で生まれ育った人間であった。産まれも育ちも御殿暮らしという者は実は結構少ない。

そんな「とばねき」は何でもそつなくこなす事が出来ていた。

護兵のように一通り武を修め、舞姫楽師のように一通り芸を修め、それでいて両親の様に一通りの御殿の用を足す事が出来ていた。ただしそれは一通り、特に突出して出来るものなかった「とばねき」は、両親の様に大多数の下女の一人として埋もれていたのだった。

しかしある日突然ぬし様よりお呼びがかかった。

御殿の主、「極楽貪主」は全ての御魂を理解していた。

一見大多数に埋もれているような者でも、「極楽貪主」から見れば気心の知れた友の様に、その者の在り様が一つ一つわかるらしい。

男一人で三人の娘を育てる事は骨が折れる。

そう、判断した「極楽貪主」は「とばねき」にその命を下したのであった。

美人ではあるが、際立って美しい感じはしない。

大多数の中の美人といった感じであろうか……。少し時間を置いたら忘れてしまうような。「とばねき」の美しさには、その能力同様埋もれてしまうものがあつた。

ただ太めのきりつとした眉と、ぱっちりとしてやや吊りあがった瞳が勝気な印象を人に与える。

実際、「とばねき」ははきはきとした女性であつた。

「まあね……昔はちょっとそんな感じもあつたけどさ……」

まるえい
「丸嬰」に聞いたんだ。

「露歩き」はそういうの無理だつて。」

「無理？」

「……うん。」

「そついうのって？　どういふのが無理なの？」

「……う…それは…そのお……。」

「とばねき」は珍しくもじもじと齒切れを悪くした。
若干頬が赤らんでいる。

ゆめはそんな「とばねき」をじいつと凝視していたが、軽く溜息をつくと「とばねき」から視線を反らしていた。

途端、「とばねき」が息を吐く。

それと同時に「とばねき」は呟いていた。

「……………なんかさ……不老長寿の代償なんだって。

長く生きる代わりに、その……………次の世代に血を残す事が出来ないとか……………」

「なんで……………「露歩き」は永く生きたいのかな？」

「さあ……………そこまでは……………」

おそらくそれが「露歩き」がぬし様に魂を差し出した理由だろうし……………」

そんな事本人とぬし様位しか知らないんじゃないかねえ……………」

——「露歩き」の理由……………」

長く、永く生きて「露歩き」は何をしたいんだろう……………」

——私はそれを知る事が出来るのかな？

——私はそれを知るまで生きている事が出来るのかな？

第二章 第二節

第二節

—

「あら、もうそんな時期ですね。」

夫人がわずかに唇を紅色の茶で湿らせると、寂しげな光りを瞳に灯してゆめを見た。

その隣に控える「鎖葉詩」の顔色にも寂しさが滲む。
二人のそんな表情を見ていると自然ゆめも寂しい気持ちになってきた。

そこは「墮烏苑」の屋外に設けられた小さな石造りの建物。

お椀形の丸屋根を五本の円柱が支えている。

円柱の隙間は吹き抜けになっており、そこに朱の縁取りを施した黒色の御簾が下げられていた。

御簾の隙間から差し込む硝子細工の植え込みの光の反射と、「蛾禍^{がか}」に魅^{じよ}せられてその周りを狂ったように舞う数匹の極楽蝶で、建物の中は淡い幻のような光で満たされていた。

「寂しくなりますわ。」

「つ……でも、すぐだよ！」

また何百年かしたらまた必ず来るからッ！！
だから待ってて！！」

「ええ……。」

夫人がやんわりとゆめに微笑んだ。

夫人の雰囲気には人の心をほっと柔らかくするものがある。

寂しそうにしているも、悲しそうにしているも……。

おそらく本人の意思にかかわらず不思議と人を慈愛で包み込む人のだろう。

それが本人にとって必ずしも幸せな事であったのか、それは定かな事ではないが……。

「私も実はそろそろではないかと考えておりましたの。ですから用意しておきましたわ。」

「用意？」

ゆめがきょとんとした顔をしていると、「鎖葉詩」がおもむろに建物の外へと出て行った。

夫人はにこにこ微笑んでいる。

しばらくすると黒塗りに貝殻で細工を施した箱を持って「鎖葉詩」が建物の中へと入ってきた。

その唇に淡い頬笑みを湛えている。

「鎖葉詩」はゆめと夫人の囲む丸い卓の上にその箱を置くと、そつと蓋を外してみた。

「少し大きめに作ったのですけれど……。」

「わあ……！」

ゆめは箱の中のものを見て、思わず喜びの声を上げていた。

箱の中には紅色を基調とした着物が綺麗に折りたたまれていた。

夫人がそつと手を伸ばし、箱の中から着物を取り出す。

全体的にゆめの知る衣の形をしていたが、袖が細く作られていたり
と何処となく亜装を思わせる造りが所々に見られた。

「これを私に？この前も巾着もらったのに……。」

いいの？」

「ええ。」

ゆめはそつと夫人の持ちあげる衣に触れた。

光の具合で見た事もない草花の刺繍が綺羅綺羅と浮かび上がる。

さわり心地の滑らかさと布の織り込み方もゆめの知るものと微妙に異なっていた。

ゆめは羽のように軽いその衣をふわりと自分の身にまとうてみた。

「素敵……」。

ありがとう、夫人。

これ御殿でも着るね。」

「ですが言の葉を失うと消えてしまいます。」

「鎖葉詩」がそつと小さく囁く。

「えっ！」

「嘘です。」

それは夫人自ら手を添えてお造りになられたものですから。

そのような事はございません。」

思わず全裸を想像し赤面したゆめに「鎖葉詩」が艶をたたえていたずらに微笑む。

そんな「鎖葉詩」の袖にそつと夫人が手を触れた。

「いけない子ね。」

「申し訳ございません。」

ゆめは衣の香りを胸一杯に吸い込みながらそんな二人のやりとりを眺めた。

甘い蜜の様な温かい香り。

ただ在るだけで温かく優しい夫人。

実はちよつと子供っぽい所もある大人な「鎖葉詩」。

幸せな空間、幸せな時間。

「最後にまた聞かせて下さいな、ゆめ。」
「はい！」

ゆめは御殿で覚えた極楽蝶の歌を華の様に歌い上げた。

幸せに心を満たされたゆめの声色は、自然と温かい色に透き通る。何の伴奏も無い一人唄ではあったが、ゆめの可憐な声はそれだけで十分魅力的であった。

夫人も「鎖葉詩」もそつと瞳を閉じてその声色に心を澄ましている。儚い夢のような時はゆるゆると過ぎていった。

新しい衣を収めた箱を大事に抱えながらゆめは茶屋への帰路についた。

敷き詰めた石畳にゆめの小さな足跡が響く。

ゆめの履く布靴も夫人に手ずから教わって作った亜装のものであった。

鼻緒のいらぬこの靴は履きやすく、ゆめはとても気に入っている。

——また皆におかしな格好になったねって言われるかも…。

ゆめは皆の目が丸くなる様を想い浮かべながら「客死隧道」へと入って行った。

不自然な葉ずれの音、静かすぎる木漏れ日の優しさ。

けれどその時のゆめにとって、それは小さな不安でしかなかった。

昔の様に不幸のどん底に一人落とされたような暗闇を感じる事は今ではない。

坂道を登っていく事にも、昔よりは大きくなったゆめにとってそれ程大変な事ではない。

それはほんの一瞬で終わってしまっていた。

目の前に夕日に赤く燃える草原がどこまでも広がる。
ゆめは皆の待つ茶屋を目指して駆けていった。

二

「綺麗な赤だねえ。ゆめによく映える衣だよ。」

「へえ！また良いものもらってきたじゃないか。」

良かったじゃん、ゆめ。」

「へへへ。」

ゆめは茶屋に戻ると早速皆の前で夫人にもらった衣を披露していた。

「ほほ、これはこれは珍しい衣ですね。」

数日前からすでに訪れている「滅歌^{めっか}」が、黄色く濁った脂っぽい眼を大きくさせてゆめが夫人からもらった衣を見た。

何となく手にとって見たそうな感じがするが、その衣以外汚く汚れた「滅歌」に手渡すのは何だか嫌でゆめはそれとなく自分の手元に引き寄せていた。

食人種「シシ児^げ」の一系である「滅歌」は、装飾には非常にこだわりのあるがその中に包まれた己の身には全く関心が無かった。

いつ身体を清めたものか、何ともいえない垢の匂いが鼻につく。着飾りたいのか、そうでないのか今いち判然としない老婆である。それに何と言ってもゆめは「滅歌」が自分を見つめる時の瞳の色が好きになれなかった。

どう見てもそれは食べ物を見る時の瞳である。

部屋の隅で腕を噛みしだいている「滅歌」の兄、「滅宵^{ほろよい}」よりはそ

の瞳の色は幾分理性で弱まっているが、そのような視線を向けられているのは嬉しい事ではない。

詰まる所ゆめはこの自分達の後に茶屋を訪れる一行が好きではなかった。

——後から来る人達も「ちかはもん静波紋」みたいな感じの良い人達だったら良

かったのに……。

ゆめは自分達が茶屋を訪れた時よく先に訪れている行商人「静波紋」の事を想い浮かべた。

「静波紋」は、行商奴隷故に人型ながら四足で歩く奇異な風体をしているがそれを除けばとても気さくな人物だった。

相としては幾分上に見える。

藍の始め（外見年齢四十代前半）といったところであろう。

四足の奴隷となって随分久しいらしく、その手足は獣の様に固く曲がりきっている。

本来手であった前足は、彼の主人によって全ての指が第一の関節まで切り落とされていた。

それ以外は、淡い緑色を基調とした、おそらく所属する店を示しているであろう独特の刺繍の施された上品な衣をまとう明るい男であった。

その広く長い背の上には、沢山の色とりどりの怪鳥がくつろいでいる。

それが「静波紋」の商売品でもあり、手の使えない自分の身の回りの世話をしてくれる大事な相棒でもあった。

「静波紋」はこの怪鳥達を茶屋を越えた別の世界に届ける為に定期的に旅をしているらしい。

「静波紋」が高く細い音の口笛を吹くと、尾の長い怪鳥達は器用にお茶運び、器用に「静波紋」の衣を着せかえ、器用に喉を鳴らし

て歌を歌った。

「届けた後の帰りはどうするの？」

奴隷は板間に上がる事はない。

いつかゆめは土間でくつろいでいる「静波紋」にそう聞いた事がある。

「静波紋」はその相にしては無邪気な瞳でゆめを見ると、ぴゅっと口笛を吹いて一匹の怪鳥を自分の雲の様にふわふわとした頭の上に止まらせた。

あまり綺麗な鳥ではない。

小麦色の羽毛の所々に黒の混じった大きな鳥である。

その両脚の五本の鍵爪は細く長くまるで人の指の様に一種異様だ。しかしその紫の瞳の色だけは際立って美しかった。

「「九^くの果^か」がずっといるから大丈夫さ。

「九の果」は本当にずっと俺の相棒なんだよ。」

「九の果」と呼ばれる鳥は、「静波紋」の言う事がわかるのか（おそらくわかるのだろう）「静波紋」の頭の上で「けえ」と一声鳴くと驚くゆめの懷に飛び込み、ぼすんとその膝の上で丸くなった。

「ちょうど君達の「縁」みたいな存在だね。

お互いがお互いを支え合って生きてるんだよ。」

——「縁」……私を世界に繋ぐ大事な絆。

お互いがお互いを支える大事な絆。

——お互いがお互いを……。

—— お互い……

「ゆめ！とりあえずご飯だから箱に畳んで入れときなよ。」

「あ……あ、うん！」

「とばねき」の声で現実に引き戻される。

そこには「静波紋」ではなく「滅歌」がいた。

ゆめはそつと箱の中へ衣を戻し始めた。

「滅歌」が名残惜しそうにその手元を眺めている。

—— まただ……。。

ゆめは箱のふたを閉じると、それを奥の間へと持って行った。
そつと自分達の荷物の所にそれを置く。

—— 「静波紋」の前でもそうだった。

たぶん今もきつと私ぼうつとしてたんだ。

—— どうしてだろう……。。

「お互い」って言葉を聞くと、いつも胸が苦しくなる……。

第二章 第三節

第二節

—

「それじゃまた待ってます。帰りみちも頑張つて。」

茶屋の前で「あかつく關伽注」がゆめ達一行を見送る。

「めっか滅歌」と「ほろよい滅宵」はそこにはいない。

「くそ關伽注」によればどうにも腹が減つてしょうがないという事で、朝早く「狩り」に出かけたらしい。

そんな二人の下男である「ぐそ愚鼠」だけは、無言でわずかに震えながら盆を持ち、「くそ關伽注」の隣りに立っていた。

そこを動かない所を見ると、とりあえず見送っているようだ。

「あんたも元気でね、「くそ關伽注」。

まあどうせあんたは変わんないだろうけど。」

「そうですよ。あたしはちっとも変わりません。」

「変わらないの間違いじゃないのかい？」

「まあそうとも言えますけどね。」

「丸嬰」と「くそ關伽注」は軽く軽口を叩いて、お互いにしばしの別れを告げていた。

「關伽注」は幼女の「丸嬰」とさして変わらぬ背丈の小男であつた。相はいまいち判然としない。

枯れ木のようにこけているのか、それとも老いているのか、何とも形容しがたい様相をしている。

常に笑顔をたたえるその面は、まるでそういう面であるかのようにその顔に張り付いている。

決して人に温かさを与えるものではない無感の微笑み。

細い三日月を描くその両の眼は、^{まなこ}わずかに光をみせるだけで線を引いたかのように黒い。

その言動から初めてその残忍な性格が見え隠れする、生きているのか死んでいるのかはたまたそこに在るのかすら疑わしくなるヒト、それが「關伽注」であつた。

長閑な田園風景はいつの間にやら深淵の虚に包まれた白い砂漠へと転じていた。

まだ夜を迎える時刻ではない。

けれどここは先程とは異なる世界。

永遠に夜の明ける事のない絶望の世界。

足元の白い砂がゆめ達の歩みを遅らせる。

どうもこここの砂はわずかだが遺志を持つかのようにまとわりつく。

——あ……心が抜ける……。

「くるり！」

ゆめがそう思った時、背後で「とばねき」の声がした。

ゆめには振り向かなくてもそれが何を意味するのか分かつていた。そう、どうも「くるり」はこことの相性があまり良くないらしい。

「丸嬰」の言葉を借りれば「相性が良すぎる」という事なのだろうが……。

見ればやはり「くるり」が膝をついていた。

「大丈夫かい？ほら、お乗りよ。」

「とばねき」が慣れた様子で「くるり」をその背に背負った。

「くるり」はいつもこの砂漠でこうなる事がわかっているのだが、決して始めから誰かの力を借りてここを越えようとはしない。自分に出来る精一杯まで必ず自分の足で歩いていた。

——ぼうつとしているようで、結構頑固な子なのよね……。

ゆめは再び歩みを始め「露歩き」の隣りに並び、そんな事を一人こちた。

——どうして私はここじゃないんだろう……。

色の無い無音世界は「くるり」のように気分が悪くなる事はないが、どうにも自分の心が良く見えてしまう。ゆめは自分の心に問いかけていた。

——ここも「客死きやくし隧道」と同じ……。

生きてるものが何もない不自然な所。

——どうして私はあそこなんだろう……。

——誰にもみとられず、思われず、供養もされず……。

——客死……。

「今日はこの位にしよう…。」

「露歩き」が砂漠の真ん中でその日の終わりを告げた。

この寂しい世界「無き原」は数日をかけて越えていく。

その間一度膝をついた「くるり」は、目的地に辿り着くまでほとんど自分の力で歩く事が出来なかった。

今も昏々と眠りにについている。

「とばねき」はふうつと息を吐いて「くるり」をそつと冷たい砂の上に下ろした。

女の「とばねき」が、子供一人を担いで何日も歩き続けるのは骨が折れる。

「大丈夫か？」「とばねき」。

「なあに言ってるのさ、」露歩き」。まだ一日目だよ。

いつもの事さ。」

衣の襟元をばたばたとはためかせながら「とばねき」はからからと笑った。

いざという時の為に「露歩き」は「くるり」を背負う訳にはいかない。

「とばねき」も一通り武を修めていたが、この何が起こるかわからない冥獄の旅路で数人を守りながら戦う事は、とても難しかった。

「露歩き」にしても決して楽な事ではないであろう…。

—— 幾らなんでもちゃんと動ける護兵が一人っていうのはどうなんだろ…。

ぬし様もせめてあと一人位護兵を付けてくれればいいのにな。

・・。

どうせ宴休みなんだし…。

ゆめは、朗らかながらも多少疲れを見せる「とばねき」を見てそんな事を考えていた。

「あゝゝ疲れたゝゝ。

眠い眠い。」

「丸嬰」が白煙を巻き上げて砂の上に大の字になる。
そしてそのままがああといびきをかいて眠ってしまった。

———そうよ！

「丸嬰」が「くるり」を背負えばいいのよ！

私の事だって全然なんて事ないみたいに背負えてたもの。

「疲れたゝゝ」とか言ってるけど、絶対私達より疲れてないもん。

ゆめはじつとりとした視線を「丸嬰」に送りながら、数種の干豆の塊をかみ砕いて茶屋の水で流しこんだ。

茶屋のすぐ近くで「閼伽注」が耕している菜園で採れたものである。甘くも辛くも無い、粉っぽさだけがやけに残る素朴な干し豆。

大しておいしいものではなかったが、茶屋の水と一緒に少し食べるとそれだけでお腹はきちんと膨れた。

———お腹が減るって、すごく面倒。手水てみづとかも一々あるし…。

「生人」も「さき」みたく食べ物がいらないればいいのに…。

ゆめは俯きがちに隣りに座りこむ「さき」を見た。

白い砂の光の反射が「さき」の死に顔の美しさを鋭く引き立てている。

まるで人の形をした芸術品のようだ。

——「さき」は良いなあ…。

「ゆめ」。あたしにも豆くれるかねえ。」

「あ、うん。はい！」「とばねき」。

闇の世界の夜は静かに更けていく。

二

数日が過ぎた…。

暗黒の世界は次第に蒼みを帯びていく。

夜から朝へ、絶望から希望へ、彼岸から此岸へ転じるように。

次第に光を帯びる天空の下を歩いていると、自然進む一行の心持にも光が差してきていた。

「んん、晴れてきたねえ。」

もうすぐ無き原も終わりじゃん。

ってまだここからが長いんだけどさ。」

そう…奉公先の茶屋からぬし様の御殿まではまだ半分も行っていない。

この後、「髪切り山」を越え「言霊河原」ことだまがわらを渡り、「不命の森」を抜け、広大な褐色の平野を行ってやっと御殿が見えてくるのだ。

しかしこの無音無色の無き原は、身の危険こそ一番ないがこの旅路の中で最も精神に応える土地柄であった為に皆気持ちとしては半分

を終えたような気分になっていた。

「あゝ、早く「言霊河原」まで行きたいよお。
このままじゃ「滅歌」になっちゃう。」

ゆめは一人声を上げた。

茶屋を出てから身体を清めていない。

身体と衣の間に薄皮を纏まとっているかのような不快感がある。
喉を潤し顔を洗う程度の清水なら「髪切り山」でも手に入れる事が出来たが、この不快感を取り除くに足る量の水を得るとなると、やはり「言霊河原」まで行かなければならなかった。

——旅の途中だから仕方ないけどさあ……。
女の子なのに臭いとか嫌だし……。

ゆめはこの頃になると「露歩き」から距離を置くようになっていた。
勿論体臭を気にしての事である。

おそらく、いや間違いなく「露歩き」はそんな事を気にする事はなかったであろうが、ゆめの乙女心がそれを許さなかった。

「……いじらしい。」

そんなゆめに気付いた「さき」が微かに笑う。

「ほつといて！」

ゆめはふいつと「さき」から視線を反らした。

一行は進む。

「無き原」を越え、「髪切り山」への道を往く。

「髪切り山」は、非常に強い風が常に吹いている。この風をまともに受けると命がない。

あまりに強く刃のように研ぎ澄まされた風だからだ。

腹に受ければ間違いなく一風で真つ二つになつてしまふだろう。

山肌にはこの風で斬られた刀傷の様な痕が縦横無尽に刻まれている。風と風が、風と山肌が、常に衝突し音を鳴らす。無き原とは異なる騒音の世界。

身を低くして、風向きを読み、山肌の窪みを利用しながら慎重に進んでいかなければならない。

しかし山肌の影にいる限り、決して風の太刀を受ける事はないのでそれ程気を張る事もなかった。

夜はその山肌の窪みの奥で、わずかに生える山草や清水で暖や食を済ませた。

遠く山吹雪を聞くかのように、「露歩き」は窪みの入口で外を見張り、他の者は焚火を囲んで眠りに落ちる。

「もう大丈夫だよ、ゆめ。いつも悪いね。」

「本当？本当に大丈夫？」

ゆめは「とばねき」の足に軽く按摩を施していた手を休めた。

指を通して伝わる「とばねき」の足の筋は、熱を帯び固く膨らんでいる。

人一人を背負い、小休止を入れるとはいえ一日中それで斜面を登るのだ。

疲労していない訳が無い。

毎度の事ではあるが、その度に「くるり」の目方は確実に増えている。

今回は特にその重さが堪え、大変そうだという事をゆめはその身体
の筋と表情から認めていた。

「本当だよ。」

ゆめだつて疲れてるんだから。

明日もあるしさつさとお休み。」

「……うん。」

ゆめは按摩で痺れた指の筋を軽くもみながら俯いた。

後ろでわずか衣擦れの音がする。

見ればそれは「さき」だった。

「そう。ゆめはもう寝た方がいい。

随分と疲れてる。」

「とばねき」の按摩なら私がする。」

「えっ……」「さき」が??「さき」がするの?。」

「私がしてはおかしい?。」

「うん、面白い。」

ゆめと「とばねき」は同時に答えていた。

途端「さき」の眉根が険しくなる。

ゆめと「とばねき」は二人顔を見合わせてくすくすと笑っていた。

「お前達……」

「だつてえゝねえ?。」

「ああ、らしくないよねえ。」

「ふん……」

「さき」は顔を険しくさせたまま、そつと「とばねき」の足にその手を伸ばし丁寧な按摩を施していった。

「あゝ、冷たくて気持ちいいねえ……」

「死んでるからね。」

「さき」はいかにもつばを心得ているといった手つきで、「とばねき」の固くなった足の筋を解していった。

見ているだけでそれがとても気持ちよさそうな事がわかる。

「いいなあ。」

「ゆめはやらないよ。」

「けちッ!。」

「さつさと寝たら?。」

私はあまり睡眠がいらなから。気にしないで。」

「……うん。」

「ありがとう、「さき」。」
ゆめは、「さき」が「とばねき」を優しく労わる姿をぼんやりと眺めながらいつの間にか眠りに落ちていた。

三

「髪切り山」を越えてしばらく行くと、そこに「言霊河原」が広がっていた。

浅く川幅の広い河原が目の前に広がる。

ここ「言霊河原」には無数の火の玉が水面を幽々（ゆうゆう）と流れていた。

今現在、日の光を受けたそれらは内に秘める陰の力が弱まり全くの無害である。

まるで色鮮やかなしゃぼんの玉が幾つも流れているかのように見えるその様は長閑な雰囲気醸し出している。

けれど夜ともなるとそこはとても危険な河原に変じていた。

暗闇の中水面を照らして揺ら揺らと流れていく火の玉達。

ある御魂は触れるものを焼き殺し、ある御魂は触れるものに凍傷を与え、ある御魂は触れる者の魂を道ずれに川の流れへと引きずり込んでいった。

「さあ！身体洗うぞお。」

ゆめは河原が見えると、目をきらきらさせて宣言した。

「そうだね。」

「とばねき」がやんわり微笑む。

見通しも良く昼間は無害なこの「言霊河原」は、ゆめ達一行のこの旅路で一番の休憩所であった。

ここで身体と衣を清め、川魚を食べて腹を満たし半日ほど日が傾くまでのんびりと過ごすのだ。

「とばねき」も「くるり」を下ろして久々に息がつけるに違いない。

「疲れてる所すまないが、頼む。「とばねき」。」
「わかつてるよ。」

「「丸嬰」も……頼む。」
「ん？あたしもかい？」

「丸嬰」が少し驚いた顔をして己を指差した。

「ああ、「とばねき」は疲れている。」

悪いが「丸嬰」も注意を払っておいてもらいたい。」

「ふうん？」

「丸嬰」は半眼で「露歩き」を捉えながら、ぽいぽいとその場で衣を脱いでいった。

全く恥じらいというものが無い。

あつという間に全裸になり「露歩き」に対峙していた。

「心配ならあんたもこっち向いて、一緒に入って皆に目を配ってればいいじゃないか。」

昔みたいにさ。」

「私は別に構わないのだが……。」

そこで「露歩き」は「とばねき」とゆめに目を映した。

「い、いやあ……それはもうやっぱりちょっと……。」
「絶対駄目！！」

「とばねき」とゆめは、頬を赤らめそれぞれの思ふ所を口にしていた。

「露歩き」が（この通り）と言わんばかりに、「丸嬰」を見つめる。

「べつつに気にするもんじゃないと思うけどねぇ。」

「丸嬰」ははあと溜息をつく、一人河原に脱ぎ捨てた衣を持って入って行った。

「「露歩き」……。」

「先に行つてきなさい。」

私はここで背を向けて火を熾している。」

「うん。」

ゆめは「とばねき」と共に衣を脱いで河原へと入つて行つた。

「丸嬰」はまるで童女のようにきやつきやと水の中を跳ねまわっている。

あれで本当に注意を払えているのか疑わしい。

「さき」はまだ河原に入らず、眠り込んでいる「くるり」の隣りに座つてその様子を眺めている。

「とばねき」が身体を洗っている間、「くるり」を見ていてくれるという。

気遣う事が嫌いな「さき」も「さき」なりに「とばねき」を案じているらしい。

大丈夫大丈夫と「とばねき」は笑っているが、今回ばかりは荷が重いようだ。

——次奉公に行く時はもう「とばねき」じゃ「くるり」を背負えないかも……。

ぬし様に言つてみよう。

ゆめは衣を丁寧に洗いながらそんな事をぼんやりと思った。

透き通るようだった水の流れの中を衣から染み出した汚濁が流れていく。

見ていてゆめはげんなりとした。

——私つてこんなに汚なかつたんだ……。

旅の最中に汚れた外気が染み込んだだけではないその穢れ。ほとんどがゆめ自身から染み出したものである。

生きる為に身体が動いている事の証。

けれどその証はゆめの瞳に大層醜いものに映っていた。

――「生人」って……汚い。

――ヤダナ……

「「とばねき」……そこ、離れなッ！」

「丸嬰」の突然の厳しい声にゆめははっと我に返った。

「とばねき」の方を見ると、「とばねき」はぼかんとした顔をしている。

見た所何も「とばねき」に異変は起きていない。

それは「とばねき」にしても同じ事のように、膝下位の水かさのその中を不思議そうに見渡していた。

しかし遠目に見ればよくわかる。

何故か「とばねき」のいる流れには火の玉が流れていない。

皆その流れに身を任せると勝手に弾けて消えていく。

それだけは確かに不可解なことではあった。

「いいからその流れから離れなッ！」

こっちおいでッ……

「とばねき」はしぶしぶ衣を胸元に抱いてその場から離れ「丸嬰」の元まで訪れた。

「丸嬰」の瞳は何やら厳しい。

「何だって言うんだい？」

「丸嬰」の元を訪れてそう発言する「とばねき」を無視して、「丸

「丸嬰」はいきなり「とばねき」の足をひつつかみ、水の中に素っ転ばした。

途端、飛沫と火の玉が宙を舞う。

「とばねき」の手から離れた衣が川の流れに身を浸す。

が、「丸嬰」がその小さな足でしゃりと音を立てて衣を踏みしめ、それが流れていくのを防いでいた。

「つばあ！べへッが……かはッ……」。

ちよ……ちよっと！！いきなり何すんだい？！

悪ふざけにしちゃ随分とひどいんじゃないのかい？！

危うく火の玉飲み込むとこだったじゃないかッ！！」

両肘を水底に付け、顔だけ水面に突き出した状態で「とばねき」が「丸嬰」に文句を言った。

それでも「丸嬰」はどこか厳しい面持ちで両手で「とばねき」のふくらはぎを持ち上げたまま、その足の様を凝視している。

「あたしの足が何だっけ言うんだい？」

何やら冗談とは思えない「丸嬰」の表情に、「とばねき」はその無理な姿勢のままに質問を投げかけていた。

そんな二人の元にゆめは近寄った。

「丸嬰」の掴む「とばねき」の足を見つめてみる。

何という事はない、年相応に水を弾く張りのある健康的な足である。その何処にも特に気になるものは見られない。

けれど「丸嬰」はしばらくじっとそうしていた。

銀髪から滴る滴がその睫毛に落ちても瞬きすらしない。

「「丸嬰」？」

ゆめがそう呟いた時、「丸嬰」は「とばねき」の足からその手を離していた。

「とばねき」がゆっくりとその足を水面に浸す。

「丸嬰」は呟いていた。

「良くないものが入ったね……。」

——良くないもの？

「……何だい？あたしに何が憑いたんだい？」

「とばねき」も幾分真剣な面持ちで「丸嬰」に問いたです。

目に見える物だけが世界の有様ではないのが、冥獄の常である。

星の数程にありとあらゆる呪怨が散りばめられているのが、冥獄の常である。

この中ではその闇を最も知る「丸嬰」の言葉に、「とばねき」は自然緊張せざるをえなかった。

「とりあえずそれだけで何か出来るというものじゃないよ。ただそれは呪いと呼ぶ。」

「つまり……「呼怨」の類かい。」

「そうさ。」

あんたの足に染みついたのは何かの「花魂水」だ。
あたしらで言う所の雄の精液みたいなもんだよ。」

「いずれそれと対になる雌が惹かれてやってくる。」

「魄子」を植え付けにね。」

「「魄子」……。」

「卵さ……。」

「丸嬰」の瞳がぎらりと一瞬ひらめいた。

それだけいうと遠く上流に目を映す。

「まさかここで産卵する種がいたとはねえ……。」

それともたまたま尿と間違えて垂れ流しでもしたのかねえ。」

「そんな事より……「丸嬰」!!」

ゆめは「丸嬰」に詰め寄った。

「丸嬰」はゆめに目を転じて何事かと不可解な顔をしている。

「何だい？ゆめ。」

「何だいじゃないわよ!「丸嬰」!

「とばねき」はこのままで大丈夫なの？」

「だから言ってんだろ？とりあえず大丈夫だって。

勿論呪いを呼びはするけどね。」

「呼ばないようには出来ないの?!」

「勿論出来ない事もないさ。」

「本当?!」

ゆめの表情は一瞬華やいだ。

「とばねき」の表情にも希望がにじむ。

けれど「丸嬰」の次の言葉で一気に二人の表情は硬くなった。

「いますぐその両足を切ればいい。」

「そんな……。」

「そりゃ困るよ。まだ御殿まで歩かなきゃならないんだから。他にないのかい？」

「そう。だから今の所ないんだよ。

今足を切らなきゃ身体全体に「花魂水」が回って、「呼怨」の温床になっちまうんだけどさ。

それだって御殿に戻って何回か貪主の湯を借りれば、次第に薄まってくるだろうしねえ。

完全には無理だけど、あの中にいる限り、十分大丈夫だよ。」

「そうかい……。」

「とばねき」は幾分沈んだ面持ちで己の足をそつとなでた。

変化が目に見えてわからないので実感がわかないのだろう……。それでも冥獄に生き、呪いの恐ろしさを知る「とばねき」は、わず

かに不安をその表情に滲ませた。

「本当は茶屋の湯があれば一番良かったんだけどねえ…。あれが一番効くんだけど。」

今度からはちよつと取つといた方がいいかもね。」

そういうと「丸嬰」はそつと「とばねき」の肩をぽんぽんと叩いて励ました。

「まあ次の奉公でちゃんと取れるんだし良いじゃないか。

世の中には、一生呪いと付き合つてじめじめ生きてかなきゃなんない奴だつてごまんといえるんだからさ。」

「うん、そうだね。」

「つて訳で大丈夫だから、「露歩き」。

とりあえず岸边に戻んな。」

「えッ・・・!」

「ひッ・・・きゃア!!」

そう……気づけばそこに「露歩き」が神妙な面持ちで佇んでいた。

四

ゆめ達一行はいつもより早く「言霊河原」を後にしていた。

「呼怨」の匂いは次第に強くなる。

昼も夜も関係なく対を求める「呼怨」。

「丸嬰」の言によれば、なるべく同じ所に留まらず早く御殿の中に入ってしまった方がいいのだそうだ。

という訳で一行は「言霊河原」で軽く眠りを取ると、一路「不命の森」へと足を運んでいた。

「不命の森」は、昼でも薄暗く日のあまり差さない森であった。

乱生する多種多様の草花の間に杉林が何処までも広がり、遠方は淡い霧に溶け込み果てが見えない。

常に獣の気配が纏わりつき、隙あらば喰らってやろうとしているのが肌に染みて伝わってくる。

賢い獣になると罾を仕掛けている事もあるので用心が必要になる。

「不命の森」自体はあまり大きな所ではない。

二日ばかりで抜ける事の出来る森である。

常の旅路であつたなら、「言霊河原」と「不命の森」の間の畦道で一晩明かし、朝早い内に森に入り、出来るだけ森での夜の時間が少なくなるようにするのだが、今回は「丸嬰」の提案で時間帯より出来るだけ距離を稼ぎ、なるべく早く御殿に戻る事が優先される事となった。

「そんなに大変なものなの？」「丸嬰」。

「とばねき」に憑いた「呼怨」って……。」

ゆめは「くるり」を背負う「丸嬰」の隣りに近づいた。

なんと「くるり」を背負う事を「丸嬰」が買つて出たのである。

「いいよ。そんな。」

別にそれであたし自身が今どうこうなってる訳じゃないしさ。」

「丸嬰」の突然の申し出にそう「とばねき」は返したが、「丸嬰」は軽く首を振って答えていた。

「今一番命が危ないのはあんたなんだよ。」

そのあんたが「くるり」を背負つてたらいざという時動けないだろう？

それに狙われてるのがわかってるのに、あんたはその危険に「くるり」も晒すのかい？」

その「丸嬰」の何ともし難い言葉を射た言葉に「とばねき」はしょんぼりと従った。

「すまないねえ」と何度もわびる「とばねき」に「丸嬰」は子供らしくない何とも大人びた笑いを口元に湛えて呟いていた。

「別にどって事無いさ。

あんたにはこの旅で結構世話になったりもしたしね。

そのお礼だと思ってくれればいいさ。」

そう言つて「丸嬰」は「くるり」を軽々とその背に背負うとさくさく歩みを進めていたのである。

「そこが厄介なところなのさ。」

ゆめの質問に「丸嬰」が応える。

全く息が乱れていない。

「くるり」を支える腕のどこにも力をかけている様子が見られない。やはり「丸嬰」にとつて「くるり」一人を背負つて進む事は「別にどって事無い」もののようだ。

「くるり」の寝顔もどことなく穏やかに見える。

きつとゆめの感じた安心感と同じものを「くるり」もその背に感じているに違いない。

「厄介つて……？」

「「呼怨」で身を結ぶヤツ等は本当にピンからキリまでいるからねえ。」

軽く足で潰せばそれで終わりの様なヤツもいるし……。

命が幾つあつても齒が立たない様なヤツもいるし……。」

「丸嬰」は前を往く「とばねき」に目を転じる。

「とばねき」は今や一行の真ん中を歩っていた。

「露歩き」が先頭を歩き、その後ろに「とばねき」、そしてその後ろを「くるり」を背負う「丸嬰」とゆめ、最後に「さき」が歩いていた。

「わからないから厄介なのさ。」

「丸嬰」が静かに呟いた。

遠くどこかで獣の咆哮が響き渡る。

その後を追うように、また別の沢山の獣たちの叫びが闇に包まれた森の中を木霊した。

この「不命の森」では夜でも獣の動きが活発だ。

闇を纏う事を得意とする邪な獣達が、時に己の糧とする為に、時に己の力をひけらかし他の命を玩ぶ為に、狩りを行う。

命を戯れに翔る習性を持つ事は、冥獄に生息する獣達の本能の一部であった。

「でも、予感がする。」

「「とばねき」のはあまり良いものじゃない。」

突然銃声が閃いた。

遠くで何かが倒れる音がする。

それまでざわざわと騒がしかった森の音が一瞬止み、また遠くでかさかと小さく蠢く音が聞こえるようになった。

見れば「露歩き」の肩口から細く煙が立ち上っている。

左手で肩口から真っ直ぐ前方に向けて銃を構える「露歩き」。

皆は緊張してその場に立ち止まった。

「「露歩き」……？」

「露歩き」のすぐ後ろの「とばねき」が銃を構えたままの「露歩き」に声をかける。

「露歩き」はまだ銃を構えたまま何も言わない。

「ねえ……っ……ひゃッ！」

「露歩き」は「とばねき」の言葉の途中でまた前方に向けて銃弾を撃ち込んでいた。

ゆめは目を凝らしてみたが、その先の闇の中に何も見えない。

「露歩き」はまだ前方に銃を構えている。

一体何があるというのだろうか……。

「ねえ……丸——」

ゆめが「丸嬰」に声を掛けた時、「丸嬰」は「露歩き」とは正反対の方向、ゆめ達が今歩いてきた道をじっと睨みつけていた。見れば「さき」も後方を向いている。

「どうし——」

「挟まれてる。」

「みたいだねえ。」

「さき」がわずらわしそうにぼそりと呟いた。

「丸嬰」は何故か嬉しそうにぼそりと呟いた。

ゆめはどちらに注意を払って入ればいいものか、分からなくなった。よくわからない、けれど不穏な空気の放つ不安にゆめのその小さな胸に恐怖が芽生える。

「弾が効かない……。」

「露歩き」が静かに呟いたその時、闇の中に白いものが浮き上がった。

そこには「もと」は可愛らしい顔をしていた女性が立っていた。

何故「もと」というと、その額と胸元に風穴が空き、どろどろと黒い血を流している為である。

につこりと微笑んでいるようだが、額から流れる黒血で鼻と唇はてらてらと塗れて薄気味悪い。

顔以外の姿形も不吉である。

全身が毒々しい赤と黒の羽毛に包まれている。

胸元から首にかけて走る赤と黒のぶつぶつと突起した斑点模様が本能的に怖気を引き起こす。

一見人型の様に直立しているが、その腕は翼で足も大きな黒い鍵爪の付いた鳥の様な形をしていた。

「だってお兄さんんん、それからつぽの弾じゃないいいい……。」

甲高く語尾を震わせ、まるで鳥が鳴くかのように目の前の血濡れの妖女は言葉を発した。

顎^{あご}を一定の感覚で前後させる不思議な動き。

どこを取ってみても、不吉であつた。

「わたくし達姉妹は魂が淡いいいい、ですから肉を撃ってもあまり意味はないのですよおおおほほほほおほ——」

——姉妹……？

ゆめがその言葉を頭の中で巡らしている時、後方から同じように甲高い笑い声が聞こえてきた。

「おほほほほほほほ。」

呪いに勝てるは呪いだけけけけけk。」

闇の中にでっぷりとした巨体が浮かび上がる。

こちらにも鳥の形をした妖女であつた。

ただ前方の妖女と異なり、橙と黒の羽毛に包まれている。

首の肉はたるみ乳房は淫らに垂れ下がり、丸い腹がまるで孕むかのように前へでっぷりと突き出している。

何とも重そうな体つきをしていたが、その鳥の様な二本の足は跳ねるように軽やかにゆめ達との距離を詰めていた。

「ああ……あああ、たまらないいいいいいい。」

何とかぐわしい「花魂」の香りいいいいいい。」

巨体の女は天を見上げてばさばさと身体を震わせた。

「妹よおおおお、わかってますねええええええ。」

怨みっこなしの早い者勝ちですよよよよ。」

「わかってますわかってますよおおおお、お姉さまあああああ。愛しい愛しいお姉さまああああああ。」

姉妹の喉を鳴らす咆哮が、超音波のように耳の中を掻きまわす。

そういえばこれまで纏わりついてた獣達の気配が幾分遠くなっている。

どうやらこの姉妹を恐れて逃げたらしい。

そう、この姉妹は生き物とは違う…。

生き物の形を纏った――

「呪いそのものだね…。」

「丸嬰」がぼそりと呟いた。

今やゆめは「丸嬰」のそばに張り付いている。

「さき」もじりじりと引きさがり、今や反対側の「丸嬰」の隣りに控えている。

物理攻撃が効かないとあつては下がらざるをえない。

「呪いが意志をもってるんだ。」

生きる為に在るんじゃない。

呪う為に在るヤツ等だね。

元は誰かが起こした呪いなんだろう。

身を結ぶ為に他人の御魂を喰らうんだ。

喰らわれた御魂は輪廻する事すら叶わない。

それが何度も身を結び、今の形を作ってやがる。」

「ちょっと性質が悪いね…。」

「どうすればいいの?」

ゆめは齒の根があわないう唇を何とか動かして「丸嬰」に尋ねていた。
「丸嬰」は小さく溜息をついていた。

「とにかく逃げるしかない。」

そう「丸嬰」が呟いた途端、「露歩き」は前方の血濡れの妖女に何発も鉛玉を撃ち込み、「丸嬰」は「丸嬰」で後方の太った妖女に、気合いのようなものを叩きつけていた。

二匹の呪いがそれぞれの後方へゆつくりと倒れる。
その倒れる間隙に、ゆめ達一行は前方に向けて全速力で走りだしていた。

「「露歩き」！間違ってもその銃剣であれを斬るんじゃないよッ！それが一気にぶっ壊れるからねッ！」

「「とばねき」！あんた長いほうの太刀「露歩き」に貸しときな！あんたはとにかくアイツ等に対峙しちゃいけない。
逃げる事だけ考えとくんた。」

「丸嬰」が全く息を乱さず走りながら、皆に指示を出す。
上空から怯える獣達の鳴き声が降ってくる。

視界の横を流れるように過ぎていく杉林。
同じような木が後ろへ後ろへと流れていく。

まるでそれは変わらぬ景色のようで、本当に前進しているのか、御殿に向かつて走れているのかわからなくなってくる。

背後から怪鳥の甲高い耳障りな鳴き声が聞こえてくる。

その声は近づいたり遠のいたりして、全く距離感が読めない。

もしかしたらわざとそのようなにして、ゆめ達一行を玩んでいるのかもしれない。

おそらくこのままこの森を走り続ける事が出来たとしても、この森を抜けるのにあと半日はかかるだろう……。

それまであの物理攻撃の効かない呪いを相手に、逃げおおせる事は

ひどく難しい事のように思えた。

——それでも、もしそうなら……。

ゆめは少し前に行く「とばねき」を見た。

物ごころついてすぐ自分たちの所にやってきた「とばねき」。

母親の様な姉の様な優しさでゆめ達をこれまで育ててくれた「とばねき」。

側にいるのが当たり前だった人間が消えてしまいかもしれない。

死んでしまいかもしれない。

ゆめは突如生々しく思えてきた死の恐怖にぞっとした。

——そんなの……ありえないよ。

やだよ。

「とばねき」がいなくなるなんて……。

そんな事考えちゃ駄目！

そう思っても恐怖で滴る頬の涙を止める事は出来なかった。

命を追われる恐怖……。

これまでに幾度か味わった事はあったが、今感じているものの比ではなかった。

何がどこで間違ったのか……。

もしあの「言霊河原」をあと半日遅く訪れていれば……。

もしあの「言霊河原」で「とばねき」があの流れの所にいなければ……。

もし……もし……もし……。

——もしあの「言霊河原」のあの流れに身を浸しているのが

「私」だったとしたら。

——追われていたのは……「私」だったかも知れない。

突如「露歩き」が走りながら斜め上空に向けて弾丸を放った。
がさがさとか何か黒い影が飛沫を散らして落ちてくる。

この森に住まう獣らしい。

「露歩き」は走りながら空中を落ちてくるその射止めた獣を銃剣で突き刺した。

獣は絶叫とともにもやのように消えていく。

と同時に「露歩き」の持つ得物の銃身が煌々と明かりを灯す。

「そのまま走れ。」

皆に静かに告げると「露歩き」は一人その場で振り返り、銃を構え
後方の闇に向けて弾丸を放っていた。

これまで「露歩き」が放っていたただの鉛玉の弾とは異なり、それは鋭く黄色の尾を引いて闇を貫いていく。

「いああああああああああああああアアアアア」

遅れて怪鳥の何ともいえぬ嘆きが響いてきた。

「露歩き」はさっさと踵を返し皆の進んだ方向に向けて走り出す。

「あああああああ、お姉さまお姉さまあああああああ。

よくもよくもおおおおおおおおおお。」

闇の中から怪鳥の苦しむ声と呪う声が響いてくる。

呪いの吐く呪詛は、ぞくぞくと身体の筋をなでていく。

「魂は効くようだ……。」

逃げる一行に追いついた「露歩き」は、涼しい顔で皆に告げる。

「しかしあれを狩るには、とても多くの魂がいる。」

ここにいる獣の魂は軽く色も薄い。

もっと重く激しい怨みの色を持つ魂をぶつけられれば有効なのだが

……。」

「私を使う？」

「さき」が薄く口元に笑みを浮かべる。

「それはしない。」

「露歩き」も薄く口元に笑みを浮かべてそれに答えた。

そして「露歩き」はゆめを見た。

「まだ走れるか？ゆめ。」

そう、この中で一番体力が続かないのは「生人」のゆめだった。

先程からずっと走り続けている。

ほとんど全速力だ。

怪鳥達は、おそらくこの程度の速度に追いつく事など容易い事だろう。

しかしこれまでそれをしなかった。

ゆめ達を侮り、玩んでいたからだ。

けれど、傷を負った彼女らがこれからもそうとは限らない。

——私が皆の足手まといになってる……。

「わ……わたし……。」

「ゆめ……私の背に乗って。」

息乱さぬ死顔の「さき」がゆめに告げる。

「うん。」

どうしようとかそういう感情はゆめの中に芽生えなかった。

ゆめは「さき」の固く冷たい背の上に乗る。

「さき」は先程までと変わらず、いや先程までよりさらに早い速度で走り始めた。

とてもその容姿の少女の速度とは思えない。

脇をすり抜ける黒い木の影が一瞬で過ぎていく。

皆が「さき」のその速度に合わせる。

合わせるというより、さらに速度を上げ、互いに競いさらに速度を引き出すかのように加速して行った。

皆……すごい。

ゆめは速度が速すぎて息を吸うのもやっとである。

しかし幾分か経ち余裕が出てくると髪をはためかせながら、背後を窺った。

ゆめはぞつとした。

すぐ後方までその恐ろしく早い速度を保ち二匹の怪鳥が迫つてきて
いる。

「姉」と呼ばれていた黒と赤の怪鳥は、左腕が見当たらない。

おそらく先程の「露歩き」の弾丸で吹っ飛んだのであろう。

瞳は真つ赤に光り、縦に細く瞳孔が引かれている。

相当怒っているようだ。

それからしばらくの間、疾走劇は続いた。

「露歩き」は疾走しながら、獣を捕えその魂を相手に撃ちすえる。

けれど獸を捕えるという事前動作が入る為か、怪鳥に動きを読まれてしまい中々うまく当てる事が出来なかった。

「い……くええええええええええええええええ。」

数十発撃ち込んだ所で、「露歩き」の弾丸が巨体の怪鳥の足を貫いた。

避ける動きを読んでの攻撃である。

とてつもない速さで疾走していた怪鳥は突如体勢を崩したために、まるで鞠のように跳ねて後方の闇へと消えていった。

「おおおおお、よくもよくもおおおおおおおお。」

もう一匹の怪鳥は吹き飛んだ妹に構わず、そのままの速さでゆめ達一行を追いかけてきた。

しばらくすると巨体の怪鳥がばっさばっさと羽を鳴らして飛んでく
るのが遠くに見えた。

姉妹はケエケエケエ鳴きながら、ゆめ達の後を付け回した。

「埒が……明かないな……。」

「こつちがあれらと呼んでるからね。」

……にしても、「露歩き」。さすがのあんたでも息が上がってきた
ようだねえ。」

「私は……人だ……仕方がない。」

「まあね……」「さき」はどうだい？」

「……ッ……は。」

「……あんたも完全な「死人」じゃないからねえ。
そろそろ疲れもするだろう。」

「「さき」……。」

「……黙ってて……。」

——「とばねき」は……。

ゆめがそう思った時だった。

「くるり」を常に背負い、疲れを見せていた「とばねき」。

熱を持ち足の筋を固くさせていた「とばねき」。

普段は休みをきちんと取る「言霊河原」でも満足に休めなかつ

「露歩き」がそつと上向きに「とばねき」を返す。

「とばねき」は額に玉のような汗を浮かべて苦しそくに目を閉じていた。

先程まで全力で走っていたにもかかわらず、その頬と唇は全く血の気が見られない。

寒そくに小刻みに身体を震わせている。

「もう駄目だね……。」

「丸嬰」がぼつりと皆の頭上に絶望的な言葉を落とした。

「とばねき」が薄く目を開ける。

虚ろながらもその瞳は、終わりを告げた「丸嬰」の方へと向けられていた。

「駄目って……そんなッ！」

早く御殿に行つてぬし様をお願いしてッ……それでッ……!!」

「無理だよ、もう呪いが始まつてる……。」

そう言つて「丸嬰」が指差した「とばねき」の足はまるで中で何かが蠢くようにぐねぐねと波打った。

「あああアッ！」

「とばねき」が苦痛に悲鳴を上げた。

「露歩き」の腕の中で必死にもがく「とばねき」。

ゆめは恐怖でただ震える事しか出来なくなっていた。

「と……とばねき」……。」

「丸嬰」に背負われていた「くるり」が重たいその臉をゆっくりと開く。

「「とばねき」、「とばねき」……。」

「起きたかい? 「くるり」。

しっかり見ておいた方がいい。

あんたの育ての親の最期だからね。」

そう言つて「丸嬰」は「くるり」をその背から下ろした。

「くるり」も「とばねき」の危機を察したのだろっ…。

起きてまだぼんやりとしているようだが、すぐにもがき苦しむ「とばねき」の手を取り「とばねき」の名を呼んでいた。

ゆめには出来なかった。

「とばねき」が苦しんでいるのは悲しい、堪らない。

けれどそれ以上にその聞きなれない悲鳴と顔色は恐ろしくてならなかった。

「死」は、怖い…。

少しすると「とばねき」の旅装としてすっかり足に巻いていた布がびりびりと破けていった。

その下から「とばねき」の素肌が露わになる。

そこには気味の悪いものが浮かんでいた。

赤と橙の斑点模様である。

ちょうど先程の怪鳥の羽の色の様だ。

それが「とばねき」の健康的な肌の上に禍々しくぼつぼつと浮かび上がってくる。

小指ほどの大きさになるとそれは弾け空へ舞った。

「ああああああッ！」

「とばねき」の悲鳴と「とばねき」から弾け産まれた怪鳥の耳障りな産声が奇妙に重なる。

耳を覆いたくなるような絶望的な声だった。

ぽつぽつ、ぽつぽつと「とばねき」の肌の上に踊る斑点模様。そして弾け、飛んでいく。

新たな呪いをばらまきに…。

「露歩き」……今の内に殺してあげた方がいい。」

「丸嬰」が残酷な言葉を静かに呟く。

「露歩き」は表情を変えずに澄んだ蒼色の瞳を「丸嬰」に向けた。その間も「とばねき」は呪いが弾けるたびに悲鳴を上げている。みるみる足の骨が露わになってきていた。

「何言ってるんのッ?!

「丸嬰」!!

そんな事したらやだよッ!

かわいそうだよッ!」

「このまま呪いに食われる方が酷いさ。

そしたら「とばねき」の魂は永遠に呪いの輪廻から抜けられない。永遠に他人を食い殺し怨み怨まれていくんだ。」

「そんなっ……でも……

でも殺すのも駄目だよ……。

そんなの……。」

「「とばねき」はもう確実に死ぬんだ。それは変わらない。」

「丸嬰」の言葉一つ一つが皆の胸を貫いた。

獣の気配が何処にもない。

呪いを恐れて身をひそめてしまったのだろう。

「あと出来るのはその魂の在り方を選ぶだけさ。」

「丸嬰」が「とばねき」を見下す。

「とばねき」は肩で小刻みに息をしながら「丸嬰」を見つめ返していた。

「完全に呪いの輪廻に堕ちるか……」「露歩き」の得物の一部になるか、どちらかさ。」

「とばねき」の瞳にはまだ弱弱しいながらも光りがあった。己の強い意志を秘めた理性の光。

「とばねき」はわずかに微笑んでいた。

「お願い……。」

「とばねき」は自分を抱える「露歩き」にそれを求めた。

「露歩き」はそつと「とばねき」を地面の上に下ろす。

そして脇に置いていた得物に手をかけ、それを持ちゆっくりと立ち上がった。

「え……」「露歩き」……うそ……やだよ……。」

手を伸ばそうとするゆめの腕を「丸嬰」が引きよせていた。

反対の手で「くるり」の腕も掴み「とばねき」から引き離す。

「丸嬰」はそのまま数歩「露歩き」と「とばねき」から距離を置いていた。

刃を伴う細みの銃。その柄を逆手に握る「露歩き」。

その切っ先の下に横たわる――

「ごめん……ね……。」

死を見せる「とばねき」。

「いや、……や……やだッ！やだよッ！やめてよ」「露歩き」！やめてよッ……やめてえーッ……！」

「露歩き」の得物が「とばねき」の心の臓を貫いた。
一瞬苦悩の色を見せる「とばねき」。

けれどその姿はもやの様に消えてしまった。

あまりに一瞬の儚い最期。

そこには呪いで穢れた「とばねき」の両の足と衣のみが残された。

宿主を失ってもまだ汚らわしく、そこに残された魂の残りを貪り喰らい呪いは産まれ空へ逝く。

小さな鳥が空へ逝く。

耳障りな亡き声を遺して空へ逝く。

「不命の森」の夜が明ける頃には、そこに「とばねき」の衣と二本の足の白骨が残るばかりとなっていた。

五

ゆめ達一行は御殿を目指した。

皆走り続けたので疲れていた。

しかしそれ以上に皆「とばねき」の死に憑かれていた。

「露歩き」が先頭を進む。

その手に「とばねき」を宿した得物を携えて。

その隣をゆめが進む。

その手に「とばねき」の骨と化した左足を抱えて。

その後ろを「丸嬰」に背負われた「くるり」が進む。

その身体に「とばねき」の纏っていた衣を纏って。

その隣りを「さき」が進む。

その手に「とばねき」の骨と化した右足を抱えて。

それはそのまま葬列のようであつた。

ゆめ達は御殿に着くと「とばねき」の両親の元へまっすぐに向かった。

この時期まだ「極楽貪主」は眠りにについている。

ゆめ達にとつてそれは大事であつたが、「極楽貪主」からすれば下女の一人が命を落とした事など小事である。

起こす事は憚^{はば}られた。

幾つもの建物を過ぎ、二人の元へ向かう。

まだ眠る御殿はまるで「とばねき」の喪に服しているかのように静かだつた。

「ここで待つていなさい。」

そついうと「露歩き」は一人下男下女の住まう一角に進んでいった。しばらくすると「露歩き」に伴われた二人の男女がこちらに急ぎ向かつてくる。

わずかに老いた「とばねき」の両親だつた。

今にも感情が破けてしまいそうな必死の形相、両手を前にさ迷わせ、求めたくないその事実を求めている。

ゆめは震える手で「とばねき」の骨と化した左足を差しだした。

「さき」は冷たい手で「とばねき」の骨と化した右足を差しだした。

「とばねき」の父親は、「とばねき」の左足を受け取つた。

「とばねき」の母親は、「とばねき」の右足を受け取つた。

あまりに変わり果てた姿にしばし二人はまじまじとそれを見つめている。

丁寧、優しく、骨の形を指でなでる。
そこに「とばねき」の面影を求めて…。

ふいに視線を上げた「とばねき」の母親の瞳が、「くるり」の纏う
「とばねき」の衣を捕えた。

「とばねき」の衣、「とばねき」の左足、交互に見ていたその瞳に
は、絶望の色が満たされていく。

感情は、弾けた。

「とばねき」の母親は、しかと「とばねき」の左足を抱きしめて、
絞り出すように泣き声をあげた。

人の理性に満ちた声音ではない。

感情そのままの、獣の咆哮に近いそれ。

ゆめはその声に恐怖した。

「とばねき」の父親がそれを^{いた}労わる。

その表情は、信じられない事実を受けとめつつある事を告げていた。
歯をきつく食いしぱり、瞳に厳しさと悲しみ、そして悔しさがにじ
み出る。

「とばねき」の母親は、「とばねき」の父親の腕に身を投げ出して
泣いた。

しばらくその背を労わっていた「とばねき」の父親も同様に声を絞
り出してその死を嘆いた。

「――ッ。」

誰もその死に声をかける事の出来る者はいなかった。

静かな御殿に二人の悲しみが声を上げる。

けれどそれはこの世界の中ではとても小さな声で、その死もとても
小さな出来事で…。

まだ眠る御殿はやはり何処までものどかで、何処までも平和だった。

第三章 第一節

第三章

第一節

—

「とばねき」の死から三千五百余りの月日が流れた。
黒の赤子の西の指、そこで「極楽貪主」の「呆蝶宴」ほうちようえんは変わる事なく続いていた。

「とばねき」の死を今この瞬間、悼いたむものはすでにいない。
ある者は忘れ、ある者は知らず、ある者は時折思い出しその記憶を懐かしむ、それはすでに過去の記憶の中に埋もれていた。

「ゆかちゃん？」

「霏燕」ひえんの声に、ゆめはふと我に返った。

そこは「霏燕」の住まう御殿の一角。

初めて出会った頃と、ほとんど変わらぬ姿をしている。

ここ御殿の建物は、自ら朽ちる事を知らない。

多少の傷なら数百年後には消えてなくなる。

樹木のように生きる、けれど決して成長する事のない「不変」を基調とする不思議な建物であった。

ゆめは「霊燕」に視線を映す。

「霊燕」も初めて出会った頃と、ほとんど変わらぬ姿をしていた。変体術を心得ているからという訳ではなく、本当に成長が緩やかな種なのであろう。

しかしその砕けた顎は決して治る事なく、変わらず醜く歪んでいた。

「どうしたの？ ゆかちゃん。

元気ないね。」

「ん……久しぶりに、「とばねき」の事思い出してたんだ。」

「「とばねき」？ ……えっと……誰だったかな？」

「霊燕」のその表情には嘘が無かった。

二千年程前のゆめだったらそこで絶交していた事だろう……。

しかしゆめはそれを小さなため息一つで許していた。

それだけ時が流れたという事なのであろう。

——私もう……今では「とばねき」の顔をはつきり思い出せない……。

時の流れはゆめの心の傷を確実に癒してくれたが、同時にゆめの心の記憶も薄れさせていた。

ただの下女の一人である「とばねき」は生前姿絵などを遺した事はなかった。

特に文字を遺すでもない。

変わりゆく人々の心の中で「とばねき」の色は確実にあせていつていた。

——ごめんね……「とばねき」……。

もう……よく思い出せない。

「ねえねえ、ゆかちゃん。」

それで誰なの？その「とばねき」って人。」

「……「露歩き」位私が好きな人。」

「えっ！……何その人！」

何処の人？いつの間にそんな人が……ねえ！」

「……「霏燕」には教えない。」

ゆめはいつと歯を出して「霏燕」に答えた。

「霏燕」が幾分傷ついた顔を見せる。

何となくおかしくなつてゆめは笑つた。

——そう……もう今では笑つてしまえる。

私の心、随分変わっちゃつた。

ここはいつも同じような感じの所だけど、それで

も私は変わつていく。

——いつまで私は変わつていくんだろう……。

「ねえ、ゆかちゃん。」

「何？「霏燕」。」

「私のお嫁さんになつておくれよ。」

「またそれ言う。」

「……本気だよ。」

「霏燕」の声から余裕が消えている。

長年「霏燕」を見てきたゆめにはすぐにそれがわかつた。

ゆめもその表情から笑いを消した。

「何かあつた？「霏燕」。」

「……………あつた。」

私はもうすぐここを出ていかなければならない。」

「えッ！何で…！」

「……………飽いたのだって、私の事。」

かすれた声が「霊燕」の喉元から紡がれる。

隻眼の美しい瞳に惑いはなく、それはもう覚悟を決めた色を見せていた。

ゆめはただ何も言う事が出来ず、息を飲んだ。

——飽いた……………。

それはよく「極楽食主」が呟く言葉であつた。

そう呟かれた物や者は、それ以上ここにいる事は叶わない。

何処かに売り渡されるか、御魂を食われるか、そのどちらかだった。

——シハ、コワイ

「……………それじゃ…どうなるの？」

不安げなゆめに対して「霊燕」は瞳だけで優しく微笑んだ。

「命はあるよ、ただ売られてしまうだけ。」

「そ、そっか…。」

ゆめはほつと胸をなでおろした。

視界が突如陰りを見せる。

ゆめがふと顔を上げるとすぐ目の前に「霊燕」の顔があつた。

「「霊燕」……………」

「だからね、私のお嫁さんになってほしい。

私と一緒に生きてほしい。」

「お願いだ。」

.....私、本気で告白されてる

目の前の「霆燕」の瞳は真っ直ぐゆめの瞳を捕えている。
全くぶれないその瞳は、明らかに本気である事を告げていた。

「わ.....私は.....」

.....「霆燕」は好きだよ。

ちよつとだけど、男の人として好き。

勿論一番は「露歩き」だけど.....

でもこんなに本気で思ってくれてんだし.....

「霆燕」となら幸せに

「縁」.....。

「縁」を断ち切って??

「さき」や「くるり」を置いて??

「霆燕」の為に今までの私を捨てて?

「縁」に生きてる私が「縁」を捨てる?それは

.....

それは一度死ねという事?

シハ、コワイ

「わかった、ごめんね。」

「え.....」

気づけば目の前の「霊燕」はその手を伸ばし、しっとりとした指先でゆめの頬を拭っていた。

「あ……。」

ゆめは泣いていた。

心は酷く静かなのに、涙だけは流れている。

心のとても深い所が傷ついた証であった。

そしてそれは一つの事実を示していた。

ゆめはどうあっても「霊燕」と共に生きる事は出来ない。

「ううん！待って！

違うの！「霊燕」の事泣く程嫌いとかじゃなくて……。

私、私「縁」で結ばれてるから……。

だから、皆と別れるのは……出来なくて……。」

「うん、わかった、大丈夫。

困らせてごめんね、ゆかちゃん。」

ゆめは両手で顔を覆って泣いた。

そつと優しく「霊燕」の腕がゆめを抱く。

常に歌姫を演じている「霊燕」の衣は、女性のように優しく甘い匂いに満たされていた。

けれどその衣の下から感じる腕の感覚は力強く、それが男性である事を告げていた。

「ごめん……。ごめん……ね。」

「大丈夫、私が無理を言ったただだから。

ゆかちゃんは「縁」で生きてるのだから、それは仕方ないよ。」

「そう……仕方ないよ。」

「霊燕」のかすれた声は、その心の色そのもののようにゆめには思えた。

「「霏燕」……。」

「あ、ゆかちゃん。」

私の事は嫌いではないんだよね？」

「勿論だよ！大好き！」

「ではさ……。」

「一度だけ、接吻してもいい……？」

「霏燕」は泣きぬれたゆめの顔からその手を引き離しゆめの顔を覗き込んだ。

突然の事にゆめは瞳を丸くした。

そしてその言の葉の意味を悟り頬を染めた。

「霏燕」がやんわりと瞳で微笑む。

「……それは……。」

「お願い。」

私にこの気持ちの想い出だけくれないかな。」

——想い出……。――

「恥ずかしくないよ。」

ほら、私の顎は鉄で出来ているし。

冷たいだけで何も感じない。」

「本当に残念だけれどね……。それでも……。」

「強い気持ちを私の心に遺しておきたい。」

——心に遺す……。

「うん……。」

「うん、わかった……。いいよ。」

「有難う……。」

そういうと「霊燕」はその醜い顔をゆめの顔に近づけた。

ゆめの唇に冷たい鉄の感触が染みわたる。

しばしそうしていた。

ゆめがそつと目を開くと、「霊燕」の綺麗な睫毛が目の前に広がる。

「ッ……！」

何となく気恥ずかしくなったゆめから、その時の終わりを告げていた。

「霊燕」が静かに瞳を開ける。

「温かった……。有難う。」

「そ……。そう？でも……。」

言葉が続けようとするゆめに対し、「霊燕」がゆっくりと首を振る。そして自分の胸元に手を添え、しゃがれた声できちんと呟いていた。

「うん、とても温かくなった。」

これで私は次の所でもきちんと生きていける。

この気持ちは決して忘れない……。」

「忘れない……。」

——気持ちは忘れない……。

——「とばねき」の顔はもうはつきり覚えていない。

——でも私も気持ちは忘れてないよ。

「とばねき」が髪を梳いてくれた時のあの気持ち。

「とばねき」が一緒に添い寝してくれた時のあの

気持ち。

「とばねき」を本当に怒らせてしまった時のあの
気持ち。

——一つ一つは弱いけれど小さな小さな温かい気持ち
が積み重なって、ちゃんと私の中にも生きてるよ。

「元気でね、「霊燕」。」

「うん、ゆかちゃんも元気で……。」

「きつと幸せになっておくれ。」

その言葉を遺した「霊燕」は、次の宴休みの間にひっそりと車に揺
られて見知らぬ地へ向かったという。

二

私が私を呼んでいる。

怖い私、死を纏った私。

必死の形相で私を掴もうとする。

私はそれを必死で拒絶する。

掴まれたら私も死んでしまう。

だから私は逃げる。

どこまでもどこまでも逃げる。

——
けれどどこまでもそこは真っ暗で。
進めば進む程にその深い闇に堕ちていく感覚が
広がって……。

——
私の形が消えていく。

——
消えるのは怖い。

——
消えたらそれは死んでしまふと同じ事。

——
消さないで、消さないで。

——
誰か私をツ——————

「ゆめ……？」

「さき」の冷たい声にゆめは目を覚ました。

息が荒い。まるで全速力で走り抜けたかのような疲労感がゆめを襲った。

とてもこれまで寝ていたとは思えない。

「どうしたの？ ゆめ。」

宵闇の光に照らされて銀髪が白く輝く「くるり」の頭もすぐそばで様子を窺っている。

そこでゆめは今自分が寝ていた事、そしてここは御殿の中の一つの寝殿である事に思い至った。

「ひどくうなされていたな…。

大丈夫？」

「さき」のひんやりとした手の平がゆめの額を覆う。

ゆめはその気持ちよさに心を澄まして瞳を閉じた。

「怖い夢だったの…。」

「どんな夢？」

幾分優しく「さき」が先を促した。

ちなみにこの一室には「くるり」と「さき」しかない。

「露歩き」は隣りの部屋に床を敷いていた。

しかしおそらく今のやりとりを聞いている事だろう…。

「私が私を殺そうとするの…。」

ずっとずっと追いかけてきて、でも逃げて…ずっとずっと逃げて…。

「そしたら起きて、ここだった…。」

ゆめはぼんやりと夢から覚めるまでの事を「さき」に語った。

「さき」がゆめの額からその手を離す。

その動きと同時にゆめは瞳をそっと開けていた。

「「とばねき」が死んでからしばらく見ていた夢だな…。」

「…うん。」

ゆめは小さくうなづく。

そう、「とばねき」が死んでからしばらく、ゆめはこの自分にとり殺されそうになる夢に何度も何度もうなされていた。

しかしそれもしばらくしたら見なくなっていたのだが…。

——そう…見なくなったのに…。
今頃、どうして？

「夢は夢だ。気にするな。」

「夢は…夢…。」

「ゆめ…。」

ゆめと「くるり」がぼつりと呟く。

「もう寝よう。」

もうすぐ奉公も始まる。

今休んでおかなければ良くない。」

「うん…。」

皆がそれぞれの床に戻った。

静かになった夜の寝室は動揺するゆめの心の熱を静かに冷やしていた。

——もうすぐ奉公…。

ゆめはあの長閑な茶屋を想い浮かべた。

そしてそこに至るまでの奇異な道筋を…。

今回はまた「丸嬰」が来るという…。

そして前回とは違う護兵が来るという…。

「とばねき」以降、護兵が変わるのは毎度の事であったが、これまでのようにただ「くるり」を運ぶ為だけに共に旅した大して力のない護兵達とは、少し違うらしい…。

ゆめもその者を数百年前の護兵の優劣を決める「決戦」で見た事があった。

——そう…。「露歩き」を負かした人…。

「相」はゆめ達よりほんの少し上位の黒髪の青年。

黒と赤を基調とした武装を纏い、腰に二刀の刀を差していた。

御殿に来てそこまで時が経っていないにもかかわらず、すでにぬし

様の御殿守りの任を授かっている。

利口そうな顔つきをしていたが、何となくそれを奢っている所があるように見えて、ゆめは何だか面白くなかった。

———
なんかやだな……。

「相」の近い男の子って……。

———
でも……強さは本物らしいから……。

きつと今回の旅は……安全……よ……ね

ゆめは次の旅に想いを馳せながら夢も見ない深い眠りへと落ちていった。

三

———
何だろう……。

少し熱っぽいかも……。

困ったな……。

明日にはもう旅なのに……。

ゆめはぼんやりと宴休みを迎えようとする御殿の中をさ迷っていた。ぬし様が宴休みを宣言して早二十日。

何百年と続けてきた「呆蝶宴」の片づけを終えた者達が、ようやく自分達の身の振り方に取りかかる時期である。

大体の者がぬし様の末の湯をもらいに湯殿「浮魂癒^{ふたまゆ}」へと向かっていく。

そうして湯を浴びた者達は大体が眠りにつく。そのまま次の宴まで

目覚めない者から途中起きて里へ帰る者など身の振り方は様々だ。とりあえずあと少ししたら完全に静けさに満たされる。その前の最期のにぎわいを御殿は見せていた。

——最近よく眠れなかったから調子悪くなっちゃったのかな。

そういうのすごく旅に影響するし……。

ゆめは視線を上に向けた。

そして斜め先の小さな塔に目を向ける。

それは「露歩き」が護兵の任についている「慟哭塔」……。

——「露歩き」に言わなきゃ……。

ゆめは一人覚束ない足取りで「露歩き」の元へ向かっていた。

「大丈夫か？ ゆめ。」

「慟哭塔」の最上層に足を踏み入れると、すでに心配そうな表情をした「露歩き」が得物を携えて立っていた。

おそらくゆめがそこに向かうという意思を持った時から、「露歩き」はその視線を感じていたのであろう。

「うん……ちょっと。」

最上層に上がるまでに随分息が上がってしまった。

けれどこの疲れはそれだけのものではない。

少し熱っぽいような、だるいような……。

ゆめは少しふらつきその場でたたらを踏んでいた。

——あれ……？

ゆめの足の裏がわずかに滑る。

床が濡れていたようだ。

ゆめはわずかに足の裏を上げる。
そして視線を下げてそれを見た。

それはまるで……

まるで朱い血のような……

何もない。

砂ばかり。

目の前に私がいる。

倒れ伏した私。

今にも死にそうな……

苦しそう。

私も同じ。

苦しいよ。

だからね、こうして手をつないで……

そうすれば少しは……

怖くないから……。

「ッ……！」

ゆめが気づくと、そこはいつもゆめ達が寝起きしている御殿の一角の建物であった。
布団の中に横たわっている。

——何だろ……今の。
全部夢？

ぼんやりと布団の上で座るゆめの耳に、かすかな衣擦れの音が流れ込んできた。

それは、幼い頃からよく聞いた調子の衣擦れの音――

ゆめはそつと立ち上がると、襖を開けて縁側を見た。

そこには己の得物の掃除をする「露歩き」の姿があった。

「大丈夫か？」

――「大丈夫か」……じゃあ、さっきやっぱり……

「うん……」

ぼんやりとする頭で何が起きたのか振り返る。

「慟哭塔」、「露歩き」、そして足元の赤い、赤い――

それが何かは多くの人々と御殿暮らしをしているゆめにもわかって
いた。

しかしそれが自分に訪れた事が全く信じられなかった。

自分の意志を越えて顕れた「生人」の証。

確実に変化を見せた自分の身体。

確実に変化し、死へと向かう自分の身体。

そこでゆめは己の衣が先程までのものと違う事に気付いた。

「露歩き」は何も言わない。

刀身を外し、銃身を獣脂で磨き上げている。

「「露歩き」が着せかえてくれたの？」

「いや、すぐに「さき」が来て、「さき」が替えた。」

「……「さき」は……？」
「……またどこかへ行った。」
「そう。」

—— だけど…… あれは「露歩き」に見られたんだよね……。

ゆめはすごく惨めな気分になった。

一方「露歩き」の声音や動きに変化は見られない。
いつもと変わらない後ろ姿をしてそこにいる。

その時ゆめは「露歩き」の瞳の色が気になった。

今その顔を見るのはきまらなかった。

けれど「露歩き」の中に、そうした色が見られるならそれもいいと思った。

そつと「露歩き」の隣りの縁側に腰を掛け、そのままぱたりと横に倒れ込む。

そして「露歩き」の顔をそのまま見上げてみた。

「露歩き」の瞳の色は、いつもと変わらぬ蒼眼だった。

さざ波の様な静かな蒼、そこにはそれとわかる感情の色は見られない。

決して無感情な訳ではない。

凜とした意志の強さや優しさはある。

確実に生きる光はある。

けれどただそれだけ。

ありのままの心の色は、そこにほとんど見られなかった。

—— あんな事があったのに…… 全然…… 変わらない……。

ゆめは何となく腹が立った。

「「露歩き」は……」

「露歩き」の手の動きがぴたりと止まった。

「露歩き」の瞳が、見上げるゆめの瞳をとらえる。

「「露歩き」は、私が女だからとかでときどきしてくれないんだね。」

「露歩き」の瞳がわずかに開かれた。

驚いたような表情。

驚く、それは気付いていなかったという事。

ゆめはその表情にさらに腹が立った。

腹が立って涙が出てきた。

——私が女の子に見えないんだ……。

涙にぬれた瞳が熱を持つ。

自然「露歩き」を見上げるゆめの瞳の色は責める色を帯びていた。流れ落ちる涙もそのままに、「露歩き」を睨みつける。

「露歩き」の瞳がわずかに揺らいだ。

揺らぎ、そして色はわずかに乱れた。

一つ瞬きをする「露歩き」。

瞬きを終わると、またいつもの静かな瞳に戻っていた。

けれどしばらくしてから次に紡ぎだされた「露歩き」の言葉には、いつもと違う色が含まれていた。

「昔……姉上の障りを私が見た。

だから動揺が少ないだけで……。」

別にゆめが女に見えない訳ではない。」

「姉……上？」

初めて聞く「露歩き」に関わる者の事。

「「露歩き」にはお姉さまがいるの？」

ゆめはつい今まで腹を立てていた事も忘れて、「露歩き」に尋ねていた。

「露歩き」は、一つ頷くと空を見上げた。

空を、「さき」がそうするようにその先にある現世を想う表情を浮かべて……。

懐かしさ、哀しさ、「露歩き」の持つ心の色をその表情にほんのり浮かべて。

「地獄の様な酷い世の中だった。

ここはいつも平和だから、その事をすっかり忘れてしまつ。」

「地獄……？ここがそうなのにごより地獄？」

ゆめの疑問に、「露歩き」が静かに笑んだ。

嬉しくて笑う良い意味でのものではなかった。

ゆめに向けられたものでもなかった。

けれど、少し心を開いたような「露歩き」の横顔にゆめはとても嬉しかった。

「「露歩き」のお姉さまは何てお名前なの？」

空を見上げていた「露歩き」の瞳がゆめをとらえる。

「露歩き」は己の衣の袖を泣きぬれたゆめの顔にそっと近付けた。優しく、その頬を流れる涙をぬぐう。

ゆめの顔を拭い、ゆめの瞳が閉じている間に、「露歩き」はそつと小さく呟いていた。

「「星呼^{とっし}」と言う……。」
「としこ……。」

瞳の色を見なくても、紡がれた言葉に込められた心の色は、十分に伝わった。

ゆめは確かに「露歩き」の心の色を見た。

「露歩き」の衣が、ゆめの顔からそつとはなれる。
その時に見た「露歩き」の瞳の色はいつもの静かなものであった。

「良い名前だね。」

ゆめは、心から微笑んでいた。

第三章 第二節 一

第二節

—

「無き原」の中で「くるり」が意識を失った。

それはいつもの事で、それが来るとゆめはああもうすぐ茶屋だ位にしか考えていなかった。

けれどその時の「くるり」は少しいつもと違っていた。

音が聞こえると言い出して、しばらくするとふらりと倒れる。

これはいつもの事だった。

その「くるり」を「露歩き」が背負う。

ここで何やら「丸嬰」と新しく付いてきた護兵の「堯湖^{たかこ}」が言い争い。

——いつもより安全で快適な旅が出来ると思ったのに…。

あの「堯湖」って人、本当何の為に来たかわかんないじゃない…。

口調の割に、やけに子供っぽさの抜けない「堯湖」に、ゆめは少しうんざりとした眼を向けた。

——顔はまあまあだけど、何か子供っぽいよね。

私の好みじゃないな。

どうでもいいけど…。

そんな事を考えながら、ゆめはそっと隣りを往く「くるり」を背負った「露歩き」を見上げた。

「そんな細い腕の娘の重さなんてたかが知れてる……」
「かあ……」。

やっぱり「露歩き」って良いなあ……。

「どうかしたか？」

そんなゆめに「露歩き」が言葉をかける。

「ううん。」

ゆめはゆっくりと首を振る。

「何でもないよ。」

ただ、「露歩き」が好きなだけ……。

その時だった。

「露歩き」の背の上で「くるり」がわずかに身をよじる。

すでに眠りに落ちていたかと思われた「くるり」の動きをゆめは不思議に思った。

肩口が小刻みに震えていた。

「「くるり」？本当に大丈夫か？」

「露歩き」が背中に向けて尋ねる。

「……ん、大丈夫。大丈夫だからそのまま早く行って……」。

「くるり」は「露歩き」の背中に顔を押し付けたまま絞り出すように答えていた。

どうしたんだろう……「くるり」。

心の色が随分暗い感じがする。

何かに怯えてる？

ゆめは辺りを見渡した。

やはり何も無い。

黒と白の無音の世界。

「露歩き」と瞳を通わせる。

「露歩き」の瞳はとりあえず先へ進もうと言っていた。

「くるり」以外の他の者にも何の変化も見られない。

ゆめ達はそのまま進む事にした。

しばらくするといつものように「くるり」は寝息を立て始めていた。そう、いつもの旅路の様に……。

だからゆめはその時の違和感をすぐに忘れてしまっていた。

ゆめはそれが自分に訪れた変化のように、「くるり」にも訪れた変化のしるしであるとは、この時思いもしなかった。

茶屋を訪れるとそこにはゆめの苦手な一行がいた。

何千年と時を経ても一度しか会った事のない、けれど決して忘れる事のなかった一行。

さすがにその名は忘れてしまっていたけれど。

しかしその姿形、空気に醸す雰囲気は忘れようも無かった。

小柄な、子供とも成人ともつかない背丈の四つの影法師

頭の上に四角い平皿のようなものを載せている。

その下の身体の部分、頭からつま先にかけては一切が暗色に呪字の刺繍の施された外套で隠されていて全く様子がうかがえない。

軌跡に獄彩の蛆虫が湧く者、どす黒い血だまりを作る者、悲鳴を上げる白炎を立ち上らせる者、猛禽を思わせる無数の金色の眼球を生み出す者などがいた。

それはある一定の時を置けば煙のように消えてしまう軌跡ではあったが、それでも気持ちの悪いものである事には変わりがない。彼らがいると、あまり広くない茶屋の地面が蛆と血と悲鳴と炎と眼球で彩られてしまうのである。

言葉が通じない事も不気味さを深めていた。

一応言語を操るようだが、ゆめ達の耳にはそれが言葉として伝わらなかった。

何となく耳の奥の筋がひっぱられるような、ちょっとした違和感程度の感覚。

それが言葉だとわかったのは、そんな影法師達とぱくぱくと口を動かしておそらく話をしている「闕伽注」を見てからだった。

本来そのような用途であっているのか不明であるが、彼らは器用に膝を折り頭の上の盆に湯吞を載せてもらうとせつせと奉公に励んでいた。

「ひいッ!!」

当然のごとく、そんな惨状の茶屋を見た「堯湖」は奇声を上げて狼狽した。

その横を「くるり」を背負った「露歩き」が、何食わぬ顔で通り過ぎ、地獄絵図と化した地面を踏みしめていく。軌跡は時を経るまで実体と化している。

「露歩き」の足の裏は、蛆を潰し、血に濡れ、炎を舐め、眼球を碎いていった。

「うッ……ぐええ……」

「堯湖」が口元を押さえて呻く。

そんな「堯湖」の後ろから、いたずらな瞳を輝かせた「丸嬰」が不

意打ちとばかりに「堯湖」を地獄絵図へと突き飛ばした。

「ひぎやああア~~~~ツ!!」

無様にも受け身も取れず顔面から地面に潰れる「堯湖」。

身体の前面を余す事なく穢れで汚して、嫌悪と恐怖でのたうちまわった。

—— 本当にこの人護兵？

ゆめはそんな「堯湖」を冷めた目で見下した。
ふっと隣りで冷たい息を吐く「さき」も同様のようである。

—— どうしてこんな人が、「露歩き」より強かったりしたんだろ？

訳わかんない。

「丸嬰」は、地面に這いつくばる「堯湖」を橋げた代わりに踏みしめ板の間に上がっていく。

ゆめと「さき」もそれにならない、「堯湖」を踏みつぶして板の間に上がった。

ゆめ達は旅装を解くと、囲炉裏の周りに腰を下ろした。

「丸嬰」と「閼伽注」が久々の邂逅を喜び合っている。

まだ陽が傾き始めた位の時刻なので、茶屋を訪れる旅人は多くいる。

「閼伽注」は「丸嬰」に視線を向けたまま、器用に湯呑に湯をいれると、影法師の頭の上にコトコトと湯呑を載せていった。

ちなみに「堯湖」はここにいない。

茶屋の裏手からは水を使う音が聞こえてくる。

いずれ消える幻とはいえ、口の中まで汚辱にまみれた「堯湖」はそれまでそれを放置している事が出来なかった。

口をすすぐには、あまりに長い。

防具や衣擦れの音、そして激しい水音から察するに、旅の垢までそのまま全部落としているようである。

——私だってさつさと身体洗いたかったのに。

女の子より先に身体洗うなんて、最っ低。

この時にはすっかりゆめの中で「堯湖」の評価が限りなく低いものへと化していた。

「ふう〜。すみません。

お先いただきました。」

しばらくすると、すっかり爽快な顔をした「堯湖」が茶屋の中へと戻ってきた。

何気にちやつかり新しいものを身に纏っている。

小脇に防具と綺麗に洗った衣まで抱えている。

左耳の脇に結んだ「守り結び」から、綺麗な水がぽたぽたと垂れている。

ゆめはそんな「堯湖」を思いつきり睨みつけた。

とにかく現在の「堯湖」の存在全てが憎くてならなかった。

「あ………。

すみません。」

「ふんッ！」

ゆめは思いきり「堯湖」から顔を背けた。

「堯湖」は、まるで家庭に居場所のない残念な夫のように、こそこそとした動作で床の間に上がった。

「ああたかこさんでしたっけ？」

いどの奥のまがった所つまり建物のよこにね。もの干しありますから。

それほしてきてください。」

「あ、どうも有難うございます。」

初対面なるもぎこちなかった自分の窮地を救ってくれるかのごとき、

「関伽注」の物言いに「堯湖」は素直に感謝を示した。

「関伽注」はそんな「堯湖」にいつものゆったりとした笑顔で答える。

「いえいえ。お礼はいいですから早くして。」

水がばたばたれるでしょ？すぐきたないですから。

ついでにあなたもあたま乾くまで外のかべに立っててください。」

「……え。」

歯に衣着せぬ「関伽注」の発言に「堯湖」は絶句した。

「関伽注」はなおもやんわり言葉をつなげる。

「ああた目駄めあたし駄目みたい。」

たかこさんあたしあなたの事大嫌いです。

初めてあつたのにごめんなさい。

でも初めてできらわれるあなたもあなた。」

「さつさとあたしの見えないところにきえてください。」

結局新参者の「堯湖」は「関伽注」に何も言い返す事が出来ず、その言に従った。

どうやら本当に横の壁に突っ立っているらしい。

「容赦ないねえ、あんたも。」

「丸嬰」が、どちらかという溜飲が下がったような顔をして「関

伽注」に向けて呟く。

「だってむりなものは無理です。あれはないです嫌いです。」

本当に何がそこまで無理なのか、若干同情を催しそうになる「閼伽注」の物言いではあったが、まあゆめにも分からない事はなかったので、特に何も言わなかった。

「まあ確かにあんたの苦手な類だよねえ、あれは。」

「丸嬰」はその「閼伽注」の極端な毛嫌いがわかるのか、うんうんと頷いて「閼伽注」に干物を求めている。

「ゆめ、身体洗ってきたら？」

そう呟いたのは「さき」だった。

「うん！あ……そうしたいけど、でも……。」

ゆめは外の様子を窺った。

おそらく井戸の角を曲がった所に「堯湖」が木偶の坊よろしく立っているに違いない。

そんな無防備な所で行水する気には、年頃の乙女として到底なれなかった。

ゆめがこの時「堯湖」に抱いた感情は限りなく殺意に近いものであった。

「「閼伽注」、薪は足りてるか？」

突如「露歩き」が「閼伽注」に向けて発言した。

「んーそうですね。すこし欲しいです。」

干物を選びわけていた「閼伽注」の言葉を聞くと、「露歩き」はすっと立ち上がった。

土間に立てかけてある巨大な冥鳥「鴛^{だこう}吽」の鍵爪で造られた鎌と簡素な薪負いに手を掛ける。

「いきます?」

「閼伽注」が能面の笑顔をそちらへ向ける。

「露歩き」は物言わず一つ顔を動かした。

そしてゆめの方へ顔を向ける。

「ゆめ。」

私はこれから「堯湖」と共に「厭山」に薪を取りに行ってくる。

その間に水を使いなさい。」

「え!これから!?

でも着いたばかりで「露歩き」も疲れてるし!」

「問題無い。」

「ありがとう、「露歩き」。」

「……気にするな。」

それだけ言つと「露歩き」は面に出ていった。

外で「堯湖」と何やら話している声がする。

しばらくするとざりざりと音を立てて茶屋から離れていく気配が伝わった。

「あれはいいです。すきです。素てきです。

「露歩き」さんはいい。」

「閼伽注」がうんうんと頷いている。

そこにはゆめも激しく同意だった。

—— やっぱり「露歩き」大好き。

【中置】「厭山（よづさん）」にて

「すみません、露歩き様。」

「何がだ？」

「外で聞いてました。」

「ゆめ」や…僕に気を使って下さったんですよね？」

「堯湖」は申し訳なさそうに隣りに行く露歩きに呟いていた。
その黒髪は今だ水を含んでいる。

時折ばたりとその黒衣に染みを残した。

「問題無い。」

それに「堯湖」が謝る必要もない。」

「でも、僕が……」

「「堯湖」は何もしていない。」

「閼伽注」はああいうヒトだから、「堯湖」は何も悪くない。
気にするな。」

「露歩き様……」

「堯湖」は恋する乙女のように潤んだ瞳で露歩きを見上げた。
露歩きはその瞳に柔らかく微笑むとまた前を見て先を目指した。

「「堯湖」……」

「はい！何でしょう！？」

露歩き様！！」

首をぴんと伸ばして嬉しげに露歩きの方に顔を向ける「堯湖」、まるで忠犬である。

「私をそのように呼ぶ必要はない。」

私はお前の主君ではない。

敬意を示すのは貪主様だけでいい。

相や年数こそあるが、護兵の格も力も私より上なのだから。」

「……そ、そんな事ないですよッ。

格はッ……その……ちよつと縁があつてたまたまで……。

力だつて、その、僕が毎回勝っている訳じゃないですし！

好きなんですッ！あ……憧れなんです！！露歩き様がッ！！」

「……ッ！」

露歩きはまさかの「堯湖」の恥ずかしい文句に、声を上げて笑つてしまった。

露歩きがここまで本気で笑う事は珍しい。

おそらくゆめ達もここまで笑つた露歩きを見た事がないはずである。久々に笑いのたがが外れてしまつたらしい露歩きは、せきをする程に笑つてしまった。

「堯湖」を馬鹿にしてのものではないらしい。

あまりに素直で予想外であつた為である。

確かに少しおかしい事を言つたと感じた「堯湖」は、そんな珍しい露歩きを隣りにとりあえず露歩きが治まるまで控える事にした。

「お……面白い男だな、「堯湖」は……。

そ……そういう事は、好いた歌姫にでも言いなさい。」

露歩きがまだ幾分せき込みながら「堯湖」にそれだけ言つた。

その後に続いた「堯湖」の「でも本気なんですッ！」という言葉がまた露歩きのつばに入ってしまった中々会話が続かなかつた。

「どうして私に憧れる？」

御殿には他にも沢山腕の立つ護兵がいるだろう。」

「僕は腕が立つ事だけには憧れません。

僕は露歩き様の御心に惚れたんです。」

おそらくこの「堯湖」という男、根っからの馬鹿、もとい真面目な男なのであろう。

これまた聞きようによつてはおかしな文句を発している事にも全く気付いていない。

露歩きは少し興味を持った。

——この男、面白いな…。

「戦に身を置く者は少なからず強さに惹かれるものだが、「堯湖」はそこに惹かれないと言うのだな。」

「はい、ただ強いだけでは非道な暴力にしかありません。

その力とどのように向き合っているかが僕にとっては重要なんです。

」

「堯湖」の瞳には真つ直ぐな強い光りがあつた。

若者特有のただ希望にあふれたものではない、そこに何かしらの宿命的な負の強さを感じた。

しかし露歩きにはその意味する所がわからなかった。

「堯湖」はさらに言葉を続けた。

「露歩き様は、露歩き様はすごいです。

手合わせで分かりました。

とても力のある方です。

けれどそれでいて奢りがない。

上の者にも下の者にも分け隔てない。

自分より力のある人からも一目置かれている。

僕はそんな仁徳のある人間になりたいんです。」

「私はそんな神人みたいな人格者ではないよ。」

「そんな事、そんな事ないです！」

気づいていないだけです！皆言ってますよ！

ですから今回御一緒出来てすごく嬉しかったです。」

「貪名様付きの護兵にそこまで言われるとは光栄だ。」

「本当ですよ！」

「……とりあえず人格者になりたいのだったら、「丸嬰」との関係を改める事から始めた方が良い。」

「う……それは……くっ。」

「堯湖」がひどく苦しそうな顔をした。

まるで親と子、どちらの命を取るかといったような究極の選択を迫られているような表情である。

「僕にはまだ難しいようです。」

しばらく悶絶していた「堯湖」ではあったが、結局そこに落ち着いた。

「そうか……。」

その答えに露歩きは静かな瞳で答える。

「だからやはり難しいですね！」

「何がだ？」

「呼び方です！僕にとってやはり露歩き様は憧れなんです！

僕に出来ない事が出来る人、やっぱり僕にとって「様」なんです！」

玩具に喜ぶ童のように頬を高揚させて恥ずかしい発言をやはり続ける「堯湖」。

露歩きはこれ以上の会話は難しいと感じ、一つ溜息をつくと呟いていた。

「好きにしなさい。」

「はいっ！」

「堯湖」の表情は喜色に満ちた。

尻尾がもしあるとしたらきっと大振り三昧だった事であろう。

「何か、寂しい所ですね……。」

「厭山」に着くと「堯湖」は一言漏らしていた。

薄い霧を纏う空気は何処となく冷たい水気があり、心の奥の悲しみを誘う。

「堯湖」の乾き始めていた髪の毛と衣は、小雨に降られたかのように湿り始めていた。

茶屋の前の田園が嘘のように、そこには刃物のように鋭利で鈍く光るごつごつとした岩山が広がっていた。

その間をもう成長する事を放棄したかのような、細く節くれだった栄養のなさそうな黒木が突き出している。

そんな気持ちの塞ぐ荒野を、決して晴れる事を思わせない暗雲立ち込める鉛色の重い空が文字通り蓋をしていた。

「あの茶屋の薪はここで取る。」

露歩きは薪負いを下ろすと「堯湖」が持っていた鎌を受け取った。

鎌といっても草や細木を斬る様な小さな小さなものではない。

巨獣の胸を易々と両断出来そうな大鎌である。

露歩きがそれを振りかぶると、露歩きの前にある黒木ががしやがしやと細かな音を立て始めた。

幾本もの枝が露歩きの方へ向きを変える。

おそらく威嚇しているのだろう。

振りかぶった状態で露歩きがしばし制止する。

黒木もある程度臨戦態勢が取れると、その形のまま制止した。

「堯湖」はごくりと生唾を飲み込んだ。

まるで手合いのようである。

両者は同時に動いていた。

露歩きが振り上げた大鎌を反動と力で振り下げる。

黒木が水面下の得物を狙う怪鳥のように素早い動きを見せて一斉にその枝を露歩きに向けて飛ばしていた。

振り切った大鎌は普通そのままの軌道で緩やかな弧を描く。
しかし露歩きの軌道は違っていた。

前方から襲い掛る枝を流水を優雅に泳ぐ魚のようにひねりを効かせながら根幹を目指して振り切っていく。

軌道に微妙な筋肉の緩急を加えているらしい。

あの大鎌をそのように扱える事は並大抵の力ではない、妙技である。
「堯湖」はぞくりと鳥肌が立つのを感じた。

奇妙な事に露歩きに斬られた箇所から黒木は血しぶきを上げた。
鈍色に色を添える。けれどそれはあまりに生々しく凄惨な光景だった。

あと少しで根幹、という所で何故か露歩きは鎌の動きを止めた。
ほとんど紙一重の所である。

そこで露歩きは後ろに一足飛びに退いた。

気づけば感動する「堯湖」の隣りに息一つ乱さず戻ってきていた。

「え…？あ、どうかしましたか？！

あと少しで木を倒せたのに。」

「それでは意味が無い。」

「え……。」

それだけ言つと血濡れの大鎌を「堯湖」に預けて、露歩きは手ぶらで黒木に近づいていった。

手ぶらと言つてもその背には露歩きの得物である銃剣を負っている。
しかし「堯湖」は露歩きが全く警戒を解いている事をその空気から察していた。

「露歩き様！危ないです！！」

「動くな、「堯湖」。」

慌てて露歩きの元へ行こうとする「堯湖」を露歩きは言葉で制した。黒木は今や常態に枝を戻し静止している。

露歩きに刈り取られた枝の断面から絶え間なくぼどぼどと赤い滴をたらし続けていた。

露歩きは黒木の根幹近くで膝を折り地面に手を伸ばした。

血だまりに浸された黒い枝をぽつぽつと拾い始める。

その様子はやはり何処までも無防備そのものであった。

今もし黒木が臨戦態勢に入ったら確実に後頭部を貫かれてしまうだろう。

「堯湖」ははらはらとそれを見守った。

露歩きはそんな「堯湖」の心配をよそにせっせと自分が斬り落とし枝を拾い集める。

それが全て取り終わると小脇に抱えてまた「堯湖」の所へ戻ってきた。

「あれは殺気を持って根幹を狙わない限り、こちらを攻撃しない。こうやって薪を集める。」

「そ…そうだったんですか。」

「堯湖」はほつと胸をなでおろした。

そこではたとそれに気付く。

「襲いかかるのは根幹だけですか？」

でしたら始めから枝を狙って切り落とした方が……。」「

「それだと意味が無いらしい。」

そう言つて露歩きは「堯湖」に己の刈り取った枝を見せた。

切り口からぼたぼたと血が垂れている。

まるで生き物のそれだ。

「「閼伽注」が言うには、この血濡れの状態でないと駄目なのだそうだ。」

黒木は攻撃に移る時にしか、血を巡らせないらしい。

だからこのような方法を取る。」

「へえ…。」

「やってみなさい。」

「はいっ！」

「堯湖」は己の愛刀を両手に構えると黒木に対峙した。露歩きは少し離れた岩上に腰かけその様子を眺めている。

「慣れた得物の方が易い。」

そう言っていると露歩きは「堯湖」から大鎌を受け取っていた。

「堯湖」が少し不思議の色をその面に滲ませた。

それに気付いた露歩きが「堯湖」に説明を加える。

「私の銃剣の刃で斬る事が出来るのは御魂だけだ。だからもしあれを斬ると命を刈り取る事になる。

木の命を弱めては新たな枝を伸ばさなくなってしまうからな。」

「堯湖」は露歩きの背に負われた銃剣に目を転じた。

銃身の背に刃を付けた細身の銃剣である。

一見すると、とてももろそうな印象を与える得物。

けれどそれは「堯湖」の愛刀のように命を宿す特別なものである事を、「堯湖」は薄々感じていた。

そもそも人から奪う事はあっても与える事をほとんどしない「極楽貪主」がわざわざ下賜した得物であるというから、使用の面倒な得物でも持つに値する特別なものであるう。

「堯湖」は己の得物を手に携えて黒木へ向かった。

「堯湖」の目の前の黒木はがしやがしやと音を立て始める。

まるでからくりのようにがくがくと動きその鋭利な枝先は「堯湖」に狙いを定めていた。

「堯湖」は根幹を斬る勢いで黒木の間合いに飛び込んだ。

一斉に「堯湖」目指して枝が動く。

「堯湖」には目や耳にはつきりそれとわからなくても、その枝の中を流れる血潮や音を感じ取る事が出来ていた。

そこから枝の軌道と己までの距離を読み、自分から一番近い順に次々と枝を落としていく。

その様は先程の露歩き同様、流線を描くかのような動きであった。

「そこまでだ、「堯湖」。」

露歩きの静かな戒めに「堯湖」は黒木からすつと離れた。

黒木は半分近くの枝を失くしてそれぞれの傷口からどろどろと血を流している。

確かにこれ以上傷つけては、血が無くなってしまふかのように思われた。

「やはり「堯湖」は腕が良い。とても飲み込みが早い。」

「えっ……あ、本当ですか?！」

あ！ありがとうございます!！」

「堯湖」はほくほくとした顔でぺこりを頭を下げる。

露歩きは内心かなり驚いていた。

「堯湖」の衣に返り血が全く見られない。

これはある一定以上の護兵ならば可能な芸当である。

実際露歩きも容易に出来る。

露歩きが驚いたのは別の所であった。

「堯湖」がおもむろに鞘に収めようとする刀、その刀にも一切血の穢れがなかったのである。

――刃が届く前に風圧ですでに斬り捨てている…。

露歩きも意識すればそれは可能であった。

しかし「堯湖」のそれはおそらく無意識のものである。
見る限り露歩きの前だから自慢しようとかそういった類のものではないようだ。

つまり……

——常態でこの技量……。

恐ろしい才能だ……。

露歩きは斬り捨てた枝木を拾い集める「堯湖」を見つめた。

——むしろ「決戦」の時より筋が良い。

おそらく斬る対象に情けをかけていないからだろう。

あの時は自らそれを戒めていた感がある。

やはり、「堯湖」は……。

——強くある事を恐れている。

——それでいて才能は余りある。

しかしそれを支える精神は酷く幼く弱い。

——危ういな……。

「今日はもうその位でいいだろう。」

まだ備えはあるようだし、あまり多く持ちかえっても血が乾いてしまったら使えない。」

「はい！」

「堯湖」は薪負いに自ら刈った薪と露歩きのものを載せながら素直にそれに応えた。

「堯湖」はせつせとかがみ込むと、持ちかえる準備を整えた。その両手は、黒木の鮮血で穢れていく。

当然の事だが、「堯湖」の瞳に後悔や苦渋の念はない。その様が露歩きの想像を掻き立てていた。

——情けを捨てたらこの男、「堯湖」はどこまで強くなるのだろうか。

「出来ました！露歩き様！」

「堯湖」の声でふと意識が現実に取り戻される。

見ればにつこりと笑った「堯湖」が薪負いを背負ってこちらに見せていた。

声音、仕草が何とも素直で邪気がない。

「詮ない事を考えた。」

「え？」

「何でもない、帰ろう。」

日暮れ前には帰れるはずだ。」

「はい！」

「堯湖」と露歩きは「厭山」を後にした。

それから何度か二人はこの地を訪れる事になる。

その度に色々な話をし、打ち解け、露歩きは「堯湖」から恋愛相談等もされてしまう事になるのだがそれはまた、まあ別の御話である。

第三章 第二節 二、三

二

「じゃあ行ってくるね。」

ゆめは朝食を終えて身支度を整えると、早速「墮烏苑」へと旅立った。

「え？あ、何処へ？」

「堯湖」が何やら騒いでいるが、とりあえず無視してゆめは往く。変わらない田園風景が目の前に広がる。

本当にそこは変わらない。

誰も手入れをしている訳ではないのに、茂る草むらの高さは全く変わる事がなかった。

何処から流れてくる温かい風に皆同じように揺られて波を見せている。

まるでどれも全く同じものであるかのように。

生き物の気配と音はあるのに、ゆめはこれまで一度も生き物の姿をそこで見た事が無かった。

ゆめが成長したからであろうか？

いや、きっとそれだけの事ではないのだろう。

「客死隧道」の入口は数個の丘を越えた所で目の前に開いていた。

極めて静かな、何もない気配に満ちた蒼の道。

ゆめはいつものように足を踏み入れていた。

え。

ゆめは一瞬突風を感じた。

しかし周りの景色にその証は見られない。

ゆめにのみそれは起きた。

わずかに両脚が後ろへ下がる。

まるで異物を排除しようとするかのように…。

それだけだった。

ゆめがしばらく様子を見てみてもそれ以上そこに何か変化は起きそうにない。

ゆめは不思議に感じたがとりあえず道を下り始めた。

茶屋からここまでの道に比べて、やけにそれは長く感じた。

実際これまでの下りより幾分長い。

全く出口の光が前方に見られない。

足元を流れていく不揃いの石畳に生じた苔の濃淡。

次第に濃緑と葉の奏でる音の中に溶けていくような感覚。

ゆめは不安を感じた。

懐かしい焦りと恐怖に心と身体が満たされていく。

——足元の石だけを見て歩くんだ。

初めて訪れた時「丸嬰」が言った言葉。

あまりに終わりを見せない道程にゆめは禁忌を破りかけていた。

思わず今来た道を見上げようと意志を持ったその時。

そこに一つの遺志を感じた。

幾つ歪に溢れる不自然な静けさ、その中で唯一「個」を持つものの存在。

それは明らかに自分に向けられている。

それがゆめに何を遺そうとしているのか定かではない。
けれどゆめは言い知れぬ恐怖に包まれた。
生きたまま棺に納められたかのような絶望感。

「ッ……………」

ゆめは一目散に駆け下りた。

後ろを振り返る余裕などそこにはなかった。

自分のすぐ後ろは全て死に満たされている、そんな恐怖に囚われた。

気づけばゆめは隧道を抜け、きちんと敷き詰められた石畳の上を疾走していた。

息をしていたのかも忘れるほどに、己を見失っていた。

次第に減速し、とぼとぼと歩きそのままぺたりと座り込む。

石畳の冷たさが、熱を持った身体と心に心地良い。

ふと見上げた先の異色の星空は、得物を狙う獣の瞳のように冴え冴えと赤くゆめを捕えていた。

「お待ちしておりました。ゆめお嬢様。」

数千年時を経ても変わらず艶に満ちた「鎖葉詩」が佇んでいた。

髪型、服装、容姿、初めて会った時と寸分たがわぬ「鎖葉詩」の姿。けれど時を経て訪れる度、ゆめはそれを新鮮な思いで見つめていた。昔は遠く見上げる先に垣間見ていた「鎖葉詩」の面ざしも、次第に近づきより鮮明に見えるようになってきている。

紡がれる言の葉も、ゆめの成長と共に広がりを見せていた。

ゆめの変化は自然世界の変化に繋がっていた。

「また少し変わられましたね。」

墮鳥の並木道を通りながら、隣りに行く「鎖葉詩」が頬笑みを湛えて呟く。

「どんどん綺麗になられていく。」

そう呟く「鎖葉詩」の周りを墮鳥の羽が彩る。

黒の花弁は「鎖葉詩」の落ち着きある美しさを際立たせていた。

「そう……かな。」

ゆめは謙遜した。

しかしゆめ自身も少しそうではないかと感じていた。

鏡を見なくても思い描ける己の顔。

今も化粧は鏡も見ずに済ましている。

けれど鏡を見て化粧をし綺麗になった自分を確かめる事が好きになつていた。

希望に満ち明るく華のある自分の顔。

勿論御殿の歌姫や舞姫、「さき」には及ばない美しさではあったけれど、自分の中で今最高の自分の姿でいられる事にゆめは喜びを感じていた。

その喜びはさらにゆめの生きた美しさを光らせる。

ゆめはそこに生きている事を実感していた。

「もうすぐ可愛いらしいとお呼び出来なくなりそうですね。」

少し残念です。」

「……そしたらなんて呼んでくれる？」

「鎖葉詩」は館の扉をそつと押し開けた。

久々のゆめの訪問に扉の鯉達も喜びを見せ、沢山の飛沫を散らして鮮やかな水玉を木枠に鳴らして歓迎している。

いたずらな瞳を見せるゆめに「鎖葉詩」は柔らかに頬笑みを見せた。

「それは勿論——」

「御美しいですよ。」

さらりと快く女性を讃える事の出来る「鎖葉詩」。

「露歩き」には見られない、明らかに愛を向ける「靈燕」ともまた異なる男性質。

ゆめはこの心くすぐられるような会話を交わす事が好きだった。

例え、「鎖葉詩」が偽りの存在だとしても……。

——それでも、この気持ちは本物だから。

心のこの気持ちは私の中に今在って。

とてもそれが嬉しいから……。

「有難う、「鎖葉詩」。」

ゆめも柔らかく微笑んで「鎖葉詩」に返していた。

昔のようにただ色のある言葉に慌ててしまう事のない、大人の淑やかさをゆめも身につけつつあった。

三

「いらっしやい、ゆめ。」

そう言つて椅子を離れゆめに近付いてくる夫人。

夫人も変わらず清らかな神々しさに満ちていた。

落ち着きのある面ざしも、その中で瞳の輝きだけが少女のように純粹である事も何も変わりなくそこに在る。

そつと蝶の羽のような優雅さをもつてゆめを包み込む夫人の腕。

以前はちようどお腹の辺りに顔が来ていたのに、今は胸の辺りに顔が当たる。

温かく柔らかいその内側からは、とくとくと落ち着いた命音が刻ま

れていた。

「また少し大きくなれたようね、ゆめ。」

「はい、でもまだ夫人のようににはなれないみたい。」

「良いですよ、このようにならなくても。」

私は女性にしては背が高い方ですし。」

「えゝ、でも格好良いよ。」

そうすれば――」

ゆめは口元に手を添える。

それを見た夫人が少しかがみ、ゆめに耳を寄せてその呟きを聞いた。

――私が接吻してあげるかしてあげないか決める事が出来るでしょ？

それを聞いた夫人は「まあ」と声を上げて綺麗に微笑む。

「それはとても格好良い事ですわね。」

「何がですか？一体。」

ゆめの真意の読めなかった「鎖葉詩」が二人に問いかける。

ゆめと夫人は顔を見合わせてくすくすと笑い合った。

「秘密。」

それを受け「鎖葉詩」がわからないと言った顔をするのを見て、またゆめと夫人はくすくすと笑い合った。

「ゆめ、とても綺麗になられたわね。」

先程の御言葉もありますし…。

素敵な恋をされたのかしら？」

「うん、少しだけ。」

ゆめは「霏燕」との別れの時を思い浮かべた。

触れる冷たさに温かく震えた心、それは確かな優しい恋の思い出だった。

ゆめの表情に穏やかなものが浮かぶ。

そんなゆめを夫人は夢みるような瞳でしっとりと見つめていた。

ちなみにここはゆめが初めて訪れた折通された屋敷の中庭の小さな庵。

「鎖葉詩」は茶器の準備をしにここを離れていた。

「夫人はどんな恋をしたの？」

「私、ですか？」

夫人が少女のような驚きを見せて、己の頬に片手を当てた。
よく夫人が見せる可愛らしい仕草である。

「した、というか……今もしていますわ。」

少し桃色を頬に灯した夫人がゆめを見つめる。

「ずっとずっと、想い待っているの。」

少し困ったように微笑む夫人。

けれど幸福色の温かい空気を醸す夫人。

ゆめにはそれがわかつていた。

夫人が、悲しんでいる事を。

夫人は例え悲しくてもそれを雰囲気で醸す事が出来なかった。

それが夫人の不幸だったのかもしれない。

思えば夫人は現在未亡人である。

未亡人になる為には、夫を亡くさなければならぬ。

そこには恋を知った程度のゆめには到底理解する事の出来ない、何かしらの悲劇があったのかもしれない。

「あ……。」

「謝らないで、ゆめ。」

それでも私は幸せなのですから。」

「ずっとこうして、恋をしていられるのですから。」

そう言つて夢見る瞳で、ゆめの瞳に答える夫人はとても美しく、その心は穏やかなように見えた。

温かいだけではない、嬉しいだけではない、辛い事も、苦しい事も、悲しい事も、全てを含めて愛は幸福だと言える夫人。

——夫人のような強くて綺麗な人になりたいな。

ゆめは確かにそう思った。

そしてもっと恋をしたいと思った。

自分を強く、そしていつまでも美しく在れるような素敵なお恋を…。

その日の帰り道。

「客死隧道」にやはりゆめは一つの遺志を感じていた。

けれど夫人と言の葉を交わし、強くありたいという想いと幸福に満たされたゆめの意志に、いつの間にかそれは色を失い消えていた。

第三章 第三節

第三節

—

何となく、ゆめは気づいてしまった。
自分が恋をしているからかもしれない。
自分が恋をしている男を見た事があるからかもしれない。
いや、そういうものがなくてもこの人物に関してはわかってしまっていたかもしれない。

「堯湖^{たかこ}」である。

旅路では周りの環境と危険に目を配り移動していた為かあまり気にはならなかった。

そもそも「さき」は美人なのでよく人からちらちら見られている。

「堯湖」のそれもその程度のものだと思っていた。

しかしこの平穏閑閑な狭い茶屋暮らしの中では、それが目に見えてはつきりと映ってきた。

——この人、結構本気だ。

本人は周りの目に気づいていないのだろうか？
気づいていないのだろう。

「さき」を見る時の好意の色が丸わかりである。

「さき」は気付いているに違いない。

だが関わり合いになる事が面倒なのか、特に何らかの行動を示さず完全に無視を決め込んでいるようだ。

「ねえ、「さき」気づいてるよね。」

「……何が？」

「「縁」の私にとぼけたって駄目だよ。」

「わかつちゃうんだから。」

「……それもそうね。」

「さき」が微かに苦笑する。

黒曜石のような鋭さを秘めた美しい瞳がゆめを捕えた。

「それに対して「さき」はどんな感じなの？」

「あいつ、邪魔……。」

消えてほしい。」

「うわぁ……最悪だね。」

ま、わかるけど。」

本人がいないのを良い事にゆめと「さき」は散々な事をお互い口にした。

ちなみにこの時「堯湖」は例のごとく「露歩き」と「厭山」に薪狩りに出ていた。

前の一行のいなくなった今、それはゆめ達一行の、ひいては「露歩き」達のほぼ毎日の仕事となっていた。

「すごいよね、「堯湖」。」

何か今までの人以上に何も見えてないっていうか。

「さき」の事何も知らないのにさ。

つまり顔だけで見てるって事でしょ？

最悪よね。」

「……。」

「「さき」？」

「勘違いしてる……。」

「え……？」

うん！そうだね、勘違いしすぎ。」

「え？」

「ん？」

ゆめと「さき」の会話が思わぬ所で途切れた。

そしてゆめは自分の意味する所の勘違いと「さき」の意味する所の勘違いに何か違いがある事を感じた。

「さき」はいつも以上に怨みがましい顔をしてゆめから視線を反らしていた。

「さき」を知るゆめにはその表情の意味がわかる。

墓穴を掘った時の表情であつた。

「「さき」……「堯湖」と何かあつた？」

「何も……。」

頑なな態度の「さき」。

それは否とゆめに告げていた。

けれどこうなってしまうと、「さき」は絶対答えてくれない。

ゆめはこの先の追及を諦める事にした。

しかし、一つ気になる事があつた。

「「さき」……まさか……」

「「死人」と「生人」の違いわかる？ゆめ。」

「え……？違い??」

冷たくて、死んでるって事？」

いきなり振られた「さき」の質問に、ゆめはあわてて答えていた。

答えて見て少ししっくりこなかった。

確かに「さき」は「死人」だ。

けれどゆめ達と変わらず動いている。

「さき」に関して言えば、違いなど体温の有る無し位のように思え

る。

ゆめは、うん？と首をひねった。

そこで「さき」は静かに答えていた。

己の胸に手を当てて――

「そう、死んでいる。

身体だけでなく考え方や心も……。

死んだその時から固まって決して変わる事は無い。」

「ゆめ達の影響で多少揺らぎはあるけれど、愛情なんて根本から変わる様な大きな感情が死んだこの心に芽生える事は絶対ない。」

「絶対にね。」

そう呟いた「さき」の凄惨な顔、その身体に纏わりつく瘴気。

その時ゆめははつきりと、「さき」と己の世界の違いを感じた。

二

暫くすると「くるり」が目を覚ました。

今回は幾分早い目覚めである。

ゆめはそれを「墮烏苑」で夫人と機織りをしている時に感じた。

己の心に「くるり」の心の色がほんのり寄り添う感覚を受ける。

少しだけ重くなった自分の心に、ゆめはひゅっと息をわずかに乱し、小さく息を吐いていた。

苦しさは全くない。

むしろそれが訪れた後、心がやっと完全になる充実感にゆめはしばし満たされた。

「くるり」ですか？」

夫人がやんわりと尋ねる。

訪れて数日の内に、突然ゆめが息を乱す事を夫人は何度かの訪問で気づいていた。

「うん、今起きたみたい。

ちょっといつもより早いかな。

でももう元気そう。

良かった。」

「そうですか、良かったですね。」

器用に隣りでかたかたと糸を織り込みながら夫人が答えた。

ちなみに今回ゆめは夫人から衣の造り方を習っている。

いつものように、夫人はこれからさらに成長するだろうゆめに合わせて衣を作ろうとしていた。

けれどゆめはそろそろ自分で衣を作ってみたいと思っていた。

それを夫人に言った所、では一緒にという事になった次第である。

けれどこれが中々うまくいかない。

夫人曰く、独特の「天人織」というものらしい。

「稚蟲ちぢゅう」という冥獄の虫の糸を使用しているから、そういう事は起こらないが、本来空を舞う事の出来る誣を模様にして編み込んでいるらしい。

天界に縁の無いゆめには骨が折れた。

しかし時間はおよそ三百年とある。

気長に、ゆつくりと、ゆめは夫人に手ずから教わりながら、自分の為の衣をせつせと織り始めていた。

夫人の機織りは、もうすぐ十分な量の織物を造り上げそうな状態になっている。

どのようにそうしたのであろう。

単純な織物から始めているゆめにはそれが、あとどれ位修練を積み
ば自分に出来るようになるものなのか全くわからなかった。

純白の織物である。

けれど完全な純白という訳ではないらしい。

光の辺り具合で淡色の文様が浮かびあがる。

そこにはこの「墮烏苑」で見る草花や知らない鳥の文様が施されて
いた。

「綺麗…。

私もそういうの出来るかな？」

「ええ、きつと出来ますよ。」

そうそう、「丸嬰」もこの位のものでしたら出来ますから。」

「え！「丸嬰」出来るの！！

じゃあ頑張んなきゃ。」

ゆめはせつせと自分の織物に集中した。

夫人が愛娘を見つめるような温かい視線を送る。

ゆめの奏でる機織りの音は、墮烏の木の音の中に緩やかに織り込ま
れていった。

「ゆめ、お帰り。」

茶屋に戻ると、やはりそこに目覚めた「くるり」がいた。
ぱたぱたと駆け寄ってくる「くるり」。

「くるり」はぎゅっとゆめを抱きしめた。

肌のぬくもりをしつかりと確かめているらしい。

「「くるり」もおはよう。」

今回は早かったね。」

ゆめは「くるり」の頬に自分の頬を当てた。

存在の淡い「くるり」。

ぬくもりもとても淡く、頬をくすぐるその銀髪もとても柔らかくゆめに触れていた。

人の形をしているけれど、淡く薄い何色にも染まっていない透明な存在。

それが「くるり」に対するゆめの感覚だった。

ゆめの視線が「くるり」の肩越しに見える縁台に腰掛ける「死人」へと移る。

少し前の朝方、戸を開けて外に出てみたら朝日を浴びてもうすでにそこに座っていた「死人」。

朝一で来たにもかかわらず、茶屋の湯が全く受け付けず、後から来た者達にどんどん先を越されて今に至っている。

この「死人」も存在感はなかったが、「くるり」の存在感の感覚とは少し違っていた。

どう言ったらいいのだろうか？

「くるり」の存在感の淡さには、まだ可能性があった。

これから生まれるもの、これから満たされるべき淡さがあった。

けれど「死人」のそれは、失ったものの虚しさがあった。

「さき」にもそれは見られる。

けれど「縁」に生きる「さき」よりもそれは酷く深かった。

もう終わったもの、決して戻る事のない果てがそこにあった。

これが「終わり」だと、まざまざと執拗に、ゆめにそれを見せ付ける。

シハ、コワイ

ゆめは、この手の平を醜く火傷し、虚ろな視線で遠くを見つめる「死人」の存在が嫌いだった。

その日の夕餉の席で「くるり」の「無き原」行きが「丸嬰」によって発表された。

「丸嬰」によればあそこに行つて「話をする」という。誰と話をするのだらうとゆめは思った。

あそこには人どころか、物すらまともに無かつた。

しかし「丸嬰」は目的地を「無き原の山」だと言つた。

そして、あそこで何かを感じ怯えていた「くるり」にはその山というものが見えていたのかもしれない。ゆめには全くわからなかつたけれど。

「無き原」行きを告げられても「くるり」は全く怯えを見せなかつた。

もともと感情の起伏が緩やかな性格だからそうと見えただけなのかもしれないが、ゆめには「くるり」がすでに何かを納得しているように思えた。

何やらその事で騒ぎ出した「堯湖」を残して「くるり」とゆめと「閼伽注」は、奥の間へと下がりもう寝る事とした。

「くるり」は自分の心配をして声を上げる「堯湖」にすこし申し訳なさそうな様子を見せていた。

しかし自分の文句に酔っているような「堯湖」の物言いは何だか癪に障つたので、ゆめはさつさと「くるり」を寝かしつけるように布団にいざなつた。

しばし襖の向こうの騒動に耳を澄ませていたが、「さき」が「堯湖」を落とした所で随分と静かになつたので、ゆめは「閼伽注」とくすくす笑い合つと、そつと布団に返して寝る事にした。

「くるり」がすでにぼんやりとした瞳をして布団に入ったゆめを眺めている。

ほとんどその意識はまどろみの中にあるようだ。けれどぼそりと「くるり」は呟いていた。

本人もあまり意識してなかったのかもしれない。

けれど確かにゆめにも理解できる言の葉を「くるり」は呟いていた。

「大丈夫？」

「堯湖」の事を言いたいのか、自分のこれからの事を言いたいのか、それともまた別の事なのか、ゆめにははっきりとわからなかったが、そつとその柔らかい髪の毛を抱き寄せるとゆめは優しく呟いていた。

「うん、大丈夫。」

それを聞いた「くるり」は小さく息を漏らすと、すやすやとゆめの腕の中で眠りについていた。

その時、その奥の布団に横たわる「閼伽注」の横顔が視界に入った。起きている時と変わらず表情の無い笑顔を浮かべたまま上を向いて布団の中にいる。

話さないのまだ起きているのかもう寝てしまっているのか、今いち判断できない。

「閼伽注」は目を開けたまま眠るのである。

その姿を見ると、本当にその顔は面なのではないかと疑いたくなつた。

暗闇の中で見るそれは、実はゆめも好きではない。

目を閉じてしっかりと「くるり」を抱きしめると、その香りを確かめながら夢の中へ落ちていった。

—— 大丈夫、「くるり」がいるから。

—— 「縁」があれば大丈夫。

四

「まあ！「くるり」が？

お話をお聞きする限りそこまで大胆な方に思えなかったのですけど……。」

「そうそう！

普段ばくつとしちゃってさあ、ま、本人にしたら何か考えてんのかもしんないけどさ。

何も考えて無いように見える「くるり」がだよ？

まさか初対面の相手を押し倒して接吻するとはねえ。」

好きにしてこいとは行っただけど、まさかここまで好きにしてくるとは思わなかったよ。

さすがのあたしもびっくりしたね。

いや、「在人」はよくわかんないねえ、本当に。」

珍しく夫人の所へ行きたいと言った「丸嬰」と共に、ゆめは午後の御茶会を楽しんでいた。

今の話題はもっぱら最近の「くるり」の事である。

「縁」のゆめにも今回の「くるり」の行動はよくわからなかった。

何でも「丸嬰」が今言った通りの事を「無き原」の山ににいるという「ヒト」にしでかしてきたらしい。

とても怒らせてしまったとしょんぼりし、それからしばらく「無き原」行きを控えているといった始末だ。

—— そりゃ、怒るわよ。

私だっでしていいか聞かれて、うんってちょっと考えて良いかな？位

なのに。

いきなりじゃねえ。

ゆめは時折見せる「丸嬰」の「くるり」の声真似に、吹き出しそうになりながら、何とか紅色のお茶を飲みほしていった。
焼き菓子の甘い香りが鼻孔をくすぐる。

ゆめは目の前に置かれた皿の上のお菓子を見て、目を輝かせた。

全て「鎖葉詩」が作ったもので、御殿では全く見た事の無い食べ物である。

さくさくとした焼き菓子里に、口の中でとろける白く甘い練り物がかけられ沢山の小さな果実が盛り合わせてある。

そこに黒や赤の甘いたれが、まるで絵を描くように施され、さらに白い砂の様な細かい砂糖がまぶされている。

ゆめはこのとても甘く、一度で様々な食感を味わえる魅惑のお菓子がここでの大好物となっていた。

「この感じの、「鎖葉詩」のお菓子の中で私一番好きなの。
有難う、「鎖葉詩」。」

ゆめはぱくりと口に頬張ると、とても幸せそうに表情をとろけさせて「鎖葉詩」にお礼を言った。

「喜んでいただけ私も嬉しいです。」

そう言いながら「鎖葉詩」は「丸嬰」に取り分けて焼き菓子を渡していたが、「丸嬰」はそれを一口で丸飲みするように食して、すぐ皿を「鎖葉詩」につきつけていた。

「「鎖葉詩」！おかわり！！」

「……相変わらず貴女は作りがいがありませんね。」

「何言ってるのさ。」

こうして全部平らげておかわりまで欲しいって言ってるだよ。

沢山作ったかいがあったじゃないか。」

「そうですね。」

本当にそうと思っているのか、微妙なところであるが「鎖葉詩」はそれ以上「丸嬰」とやり合わず、すぐに新しくさっきの数倍の量をその皿に山盛りにした。

これには「丸嬰」も満足したようで、ぱくぱくとそれなりに時間を掛けて食べるそぶりを見せている。

「いいなあ、このお菓子。」

ねえ「丸嬰」！

これ、御殿でも作れないかなあ。」

「ん？」

無理だね。面倒だからやめときな。

道具とかはまあ何とかなくても、たぶん材料がそろわないからね。あつちで育たないもん結構使ってるから。」

「そつかあ、残念。」

あ……そういえば「くるり」は大丈夫なのかな？」

ゆめはぼつりと呟いた。

何かと尋ねる「丸嬰」にゆめは少し硬い表情で向き直る。

「どうしたんだい？そんな固い顔して……。」

「ほら……。」

あの子素直だから私達の質問に、ぼんぼん答えてたけど。私の時みたいに、話したら世界が分かれちゃうとか……。」

初めてゆめがここを訪れた時に犯した禁忌。

それは、今もゆめの中に鮮明なものとして深く刻まれていた。

「くるり」にも自分のような思いをさせたくはなかった。

それを受けた「丸嬰」がにっかりと笑った。
その欠けた前歯の間に焼き菓子の実がすっぽりと綺麗に挟まっているのが何ともおかしい。

「「無き原」の事は別にしゃべっても何ともないよ。
あれはフジンみたいな奴が作ったものじゃないからさ。

ずっと昔からこの世がちゃんと機能するように、ほとんど元からそういう形で自然に作られたもんだから。」

「こいつは特別。」

そう言つてまたいつものように、無礼にも焼き菓子を食べる為の食器の先で夫人の方を指差した。

夫人は少し恥ずかしそうににこにこしている。

「そっか、良かった。」

ゆめは幾分ほつとした。

「あんたもまさか「くるり」に先越されるとは思わなかっただろ？
ほら、頑張らないと「くるり」の方が先に大人になってっちゃうよ
オ？」

「丸嬰」がおどけるような仕草をしてゆめをからかった。

ゆめはそれに対し小さく笑うだけだった。

それは何かしら余裕の表情である。

それは「丸嬰」の気に障った。

「ん？何だい。」

今随分大人びた態度取ったじゃないか？」

「マルエイ……ゆめを子供と扱ってはいけませんよ？
もうちゃんと恋をわかる年頃なんですから。」

「何それ？！」

何？あんた誰かとかしたの？」

「……マルエイ、その聞き方はあまりに不躰ですよ。」

「あ！まさかあんたあのメガネ——」

「な訳ないに決まってるでしょ？！」「丸嬰」！

「丸嬰」はまた綺麗にゆめのお茶を顔面に喰らっていた。

夫人と「鎖葉詩」がぷつと笑いを洩らした。

「マルエイ、あなた最近随分と気が緩んでいるんじゃないくて？」

夫人の言葉に静止していた「丸嬰」は動きを見せ、きいゝゝと奇声を上げて地団太を踏んだ。

「あゝ、そっか子供じゃないってそういう事か…。」

その日の帰り道、「客死隧道」を抜けた所で、「丸嬰」がわかったというように口を開いていた。

ゆめが不思議そうな顔を見ると「丸嬰」が意地悪そうな瞳でにんまりとした。

「あんた子供が産めるようになったね？」

はつきりとした「丸嬰」の発言にゆめはちよつと気恥ずかしくなった。

背けた顔が赤かったのは、決して夕日のせいだけではなかったはずである。

それを見て自分の勘が確かだった事を感じた「丸嬰」は、変に何度もふゝん、へえゝと納得の言葉を示して見せた。

「別に夫人の言った事は、そういう事じゃないんだからね。」

「ふうゝん、でもそういう事はそういう事につながったりもするよねえゝ。」

「「丸嬰」の助平ッ！」

「はあん？今頃気づいたのかい？」

ゆめは知らないとはかりにすたすた赤く染まる畦道を歩きだした。その後をぺたぺた「丸嬰」が行く。

しばらく行った所で、「丸嬰」が呟いていた。
一人言のようであったが、それは明らかにゆめに向けて呟いた言葉であった。

「だから「客死隧道」が騒がしかったんだねえ。」

その言葉は十分ゆめの興味を引いた。
怒っていた事もとりあえず収めて、ゆめは「丸嬰」の方を顧みる。
夕日にぎらぎらと輝く瞳が、何とも妖しくゆめを捕えている。
それは、残虐な一面を見せる「丸嬰」の姿であった。

「どういう事？」

「そういう事さ。」

あそこは墓場だからね。

生の匂いを嫌う。

あんたの中の女は、あそこで眠る者達の魂を呼び覚ますんだよ。」

「私が……呼び覚ます？」

ゆめはそっとお腹の下辺りに手を触れていた。

「丸嬰」がじつとりとした瞳でその指先を視線で追う。

そしてゆっくりとゆめに視線を戻していた。

「特に一つ、変に遺志を持つ御魂があったね。」

——一つ、遺志を持つ御魂……。

「感じなかったかい？」

いや、感じたはずだね。

それを向けられてないあたしにだってわかったんだから。」

「あれは、あんたを見ている。」

—— ヤメテ

「もしかして——」

—— ヤメテ、嘘デモ言ワナイデ

「あんたの知り合いなんじゃないのかい？」

—— …… …… …… …… …… …… …… ……

これまで… 少しずつ少しずつ傷ついていたゆめの心。
それは、あまりに深い所での事であって、そして致命的なものでは
なくて、ゆめ自身は深く傷ついた事に気づけないでいた。

しかし、ゆめは今回の「丸嬰」の軽口でついに自分の傷を知る事と
なった。

深く、深く、何かが傷つき、何かが致命的に壊れる音をゆめは確か
に心の中に聞いていた。

—— 私ハ、本当ニ「私」……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3174k/>

冥獄抄散話（めいごくしょうさんわ） - 儚ノ中

2011年10月6日18時30分発行